
英雄の英雄による、王女様達の為の気まぐれ。

TARO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の英雄による、王女様達の為の気まぐれ。

【Nコード】

N8705U

【作者名】

TARO

【あらすじ】

大陸アルベダイドに存在する四大国の姫君。

彼女たちはそれぞれの国の現状を憂い、そして伝承として伝えられている英雄の棲む塔へ向かう。

そこにいた英雄は何処か厭世的な雰囲気を持つ男だった…。

ファンタジーモノ初挑戦！

ハーレム成分は勿論、主人公チートも搭載。

主人公は回を追うごとに精神的に回復していく（予定）。

巨神国・カルバディアノスの姫騎士（前書き）

ファンタジー初挑戦なので至らない点が色々あるかと思います。
誤字脱字がありましたらメッセージよろしく願いします。

巨神国・カルバディアノスの姫騎士

巨神国・カルバディアノス。

アルベグイド大陸の南東部を統治している国の名前である。

歴史も古く、軍事大国として名を馳せている。

南東に程近い、あるいはその領域にある小国のなかにも制圧された国は少なくは無い。

また、国の方針から軍事技術は他国の群を抜いていた。

巨神国、と言う名の由来はかつてこの地にあった謎の建造物が原因である。

さながら巨大な魔神のように見えたのでここに国を建てたのだというのは王家の秘密の一つである。

その建造物の中にあつた奇なる物質が産業革命を起こした要因でもあるのだが。

国の成り立ち上国民の気質は好戦的である。

軍人になることこそ家の誉れと言わんばかりの勢いで毎年軍学校から上がってくる新兵の割合は同年齢の人間のおよそ四割というのだからどれだけ軍事に力を入れているのかがよく分かる。

しかしながら無意味な戦争をしないということから傘下に入った国々は特に気にしてはいない。

というよりその強大な軍事力を総動員して自国に迫ってこないようにすることが平和に生きる術であると理解しているからなのであるが。

表向きは、だが…

《セラティア・アイラス・カルバディアノス》

「はあ…」

セラティアは憂いていた。

「ここは風が気持ちいいな…」

遙か遠くに見えるだろう自然国境であるアイギス川を思い浮かべながらセラティアは呟いた。

王城・カルバディアノスの城壁の上には見たところセラティアがいなかった。

私はふと眼下に広がる城下町を見た。そこでセラティアは見てしまった。

「奴隷市場か…」

城下町の一角にある、黄昏時の今時分で最も賑わっている場所であり、セラティアが溜息をつく原因の場所。こういうとき、なまじ目がいい事を恨む。

「見えるのに見ないというのは現実からの逃避になる、か…」

奴隷市場では、ステージの前に集まる民衆が右手を挙げている。以前メイドから聞いた話によると買値をつけているらしい。

誰かが一体の奴隷を買ったようだ。

買われた少女と買った男の表情は対照的だった。

目に涙を浮かべながらも現実への諦観が表情に浮かんでいる少女。対する男は醜かった。

容姿はもちろんのこと、ニタニタと笑うその表情を見たときセラティアは寒気がした。

間違いなく少女は愛玩用奴隷なのだろう。

「この剣で奴隷を売買している奴らを切り伏せるだけでそれが解決するのならば良かったのだが…」

腰に差している剣を片目に見つつぼやく。

以前父であるカルバディアス王に問うたことがある。

その時の父の言葉はただ一言。

「仕方が無いのだ」

その時のセラティアはとんでもなくくらいに暴れたと大臣同士の会話を聞いた。

改めて父親の言葉を反芻したときセラティアは思わず城壁を殴りつけていた。

血が出た。だがそんなことはどうだっていい。

セラティアは繰り返し殴り続け、そして吼えた。

「仕方が無い！？そんなことが仕方が無いだ！？」

誰が、他人の人生に仕方が無いなどという免罪符を着けるのだ！？

父上は愚かなのか！！」

報われない人生。

奴隷に残されているのは暗い未来。未来すら見えるのかどうかも怪しいところである。

その言葉はセラティアの慟哭。

地位があっても助けられない、一人の少女の慟哭。

やがてそれを聞きつけた城兵たちが駆け寄って来る。夜間用の見張り交代兵である。

「セラティア様、お止めください！

貴女様の手が、手が！」

『失礼します』と後ろから屈強な兵たちに羽交い絞めにされるセラ

ティア。
腕を固定され自らを傷つけることも出来なくなったセラティアの頬を一筋の涙が伝っていた。

「済まなかった。ありがとう」

出血した手を魔法によって治療した女性魔術師に礼を述べてセラティアは城内に戻った。

部屋に戻る途中、セラティアは考え事をしていた。

勿論今の奴隷市場のことである。

以前治安兵と共に行動しているとき奴隷市場に向かい、一波乱起こしたことがある。

その時の父王の怒りといったら凄まじいものがあった。

余りの怒り様に父親までもが市場を利用しているのではないかと感じて、セラティアはそれから一週間口を利かなかった。

結局父親は利用していなかったという情報をセラティアの近衛が情報を得たため一週間でとりあえず元には戻ったのだが。

しかし、一度空けられた大きな溝はまだ精神的に完全な女性として成熟していなかったセラティアには埋められるものではなく、一概に奴隷市場を認めるという建前論を言うこともなかった。

例え仕方がないと諦観できるほどに人生経験を積んでいたとしてもセラティアが奴隷市場を認めることがあったかと言えば限りなく可能性は低かっただろう。

部屋に帰ったセラティアは事務机の上においてあった手紙の封を切った。

中身は個人的に親しい高貴な身分の人物からだった。

「恒例のお茶会か…」

国における身分が高く、精神的に苦しい生活を送っているセラティアにとっての休息日。

呼ばれるのは四人。

それぞれが大陸を割拠する国のお嬢様だ。

武人である、と自負しているセラティアにとってはお茶会などというものは自分にはそぐわないと常々感じていて、またそれを相手方に伝えたこともあるのだが、その時の返答と言えば

「でも、あなたの休息にはなっているのでしょうか？」
だった。

その返答を聞いたときのセラティアの呆けた顔は見ものだったと他の二人から聞いたのだが、余りにも楽しそうに話す二人を見ていると途端に羞恥心が湧いてきたのだった。

それ以来、茶会のたびにその表情を見せて欲しいとせがまれる始末。鏡の前に立ち、表情を見る。

「そんなに私は面白い顔をしていたのだろうか…」

いつまで見ていてもその顔を意識して出すことは出来ないとわかっていたので早々に止めて本棚につめてある最上段の本を手取る。

「アルベダイド英雄伝…」

アルベダイド英雄伝とはその昔ある男が戦乱にあったこの国を纏め、魔物を討伐して平和をもたらしたとされる小説である。

「英雄か…会ってみたいな…」

武人であるとは言ってもセラティアは十九歳。年齢からすれば立派な乙女である。

また、武人としても憧れる面は多い。

両方の要因から自然と英雄に対する恋慕の情は深まるばかりだった。もちろん、この小説は実際の話を元にしたものでないことは分かっている。でもそれも夢物語の一つでしかないのだが。

数分ほどかけて、セラティアは自身の心に湧いた乙女心を霧散させた。

そして思い出したかのように先ほど手に取った手紙の中にあつた返答を求める用紙に参加する旨を書き、セラティア自身のサインを入れる。

封書に同封してあつた小物転送用の魔法具を使って返答用紙を転送した。

「楽しみだな」

やはり、実際のところはセラティアも少女、もとい女性だったのであつた。

巨神国・カルバディアノスの姫騎士（後書き）

更新予定は不明ですが、他二作との兼ね合いも考えて更新していく所存です。

07/20修正 南西↓南東 凡ミス過ぎて泣けましたorz

太陽姫の憂鬱（前書き）

連続投稿は初めてですが…大変ですね

太陽姫の憂鬱

太陽国・ソルディバイト。

太陽の恵みを大陸の中で最も受けることができると言う国である。その証拠として学者の間で挙げられているのが農作物である。

他国では育つことが不可能な農作物を作ることが可能なのである。他国で育たない原因が調査の結果日光不足であると分かったためこの証拠が裏付けされたのである。

最も太陽国、と名づけたのはソルディバイト皇家初代君主であると記されているのでそれが理由なのかどうかは結局のところ誰にも分からないのであったが。

自然国境であるアイギス川はソルディバイトとカルバディアノスの間に。

そしてクリペウム川は西にある国との自然国境である。

《シャーレヴィヒ「ツヴェルノス」ソルディバイト》

「お日様が気持ちいいわ~~~~」

うーんと腕を上には伸ばして太陽の光を受ける。

木陰に私——シャーレヴィヒ——は入った。

近くから女性兵士が駆けて来る。

私の前で息を切らしてしまい呼吸を整える彼女を見て私はハンカチを渡した。

「えっ、あつ、すみませんシャル様！」

途端に彼女が焦りだした。面白いわ、この反応。

「いいのよ、使って頂戴？あなただって年頃の女の子でしょう？」

それでは…と言って彼女はハンカチで汗を拭いていた。

彼女が落ち着いたところで私は問いかけた。

「それで、そんなに急いで何か緊急のことでも？」

困惑したように、それでいて言わざるを得ないと覚悟を決めたような顔をされた。

そんなに重要事項なのかしら……

「皇王様がシャル様を探しておいでです」

「何よ、何時もの事じゃないの」

苦笑いを浮かべる女性兵士。

私の父、ソルディバイト皇王が一般的に言われる子煩悩というものであることは城下、統治域内全てに知れ渡っている。

「朝食のときにお会いしたような気がするのだけれど？」

女性兵士を上目遣いで見つめてみる。

「えと、その、あの／＼／」

照れられた。

私の顔には何か魔性の類でも憑いているのかしら…？

「申し訳ありません！王の命令には流石に…」

「分かったわ。何時もの事だし、あなたの顔をも立ててあげる」

兵士が何かを言う前に私は父の居るであろう政務室へと向かった。

結論、やっぱり父は子煩悩です。

「失礼します」

政務室に居たのはおよそ四時間くらい。

もう日は落ちかかっていた。

城内が朱色に変わる。

駄々をこねた父に付き合っていたらこんな時間になっていたなんてね。

何時もの事だけでも。

私の部屋と政務室を行き来するルートに丁度ある中庭に差し掛かったとき名前を呼ばれた気がした。

「シャーレヴィヒ、またお父様の部屋に居たのね？」

私を呼んだのは姉だった。

姉、レティア・アイベルセス・ソルディバイトは私の異母姉である。年齢は大して変わらないのだけど、仕事をしている。

毎日父との話をしたり、庭でのんびりしたりできる私と違って影に日向に働いているらしい。

勿論子煩悩な父は姉のことも溺愛している。

でも、私は姉のことが何処か好きになれなかった。

異母姉妹だからではない、それならば他の子も好きにはなれない。

何処か、姉の表情が作り物に見えたからかもしれない。

大半の原因は姉が私のことを嫌っているからなのだろうけど。

「あなた、お父様のところに通って王位でもねだっているの？」

「レティア姉様、私はそんなことはいたしません」

「どうかしらね。分かってないようだから言っておくけど、あなたは第二皇女なの？」

第一皇女である私を差し置いて王政を司るなんて真似はさせないわよ」

「ですから、それはお姉様の勘違いであると前にも申し上げたはずですが？」

私は王位などに興味はございません」

「勘違い？私を侮辱しているの？妾腹の娘の分際で？」

「母のことを愚弄するなど私は許しません！」

「許さないから何だって言うの？どうせもっ少ししたら私が法になるのだから関係ないわ」

そう言つて姉は御付きの者を連れて中庭から出て行つた。姉が去つたのを確認すると私はそこに泣き崩れた。

暫く後、私の従者が発見するまで私はずっと、泣いていた。別に王位などには興味はない。

父の嬉しそうな顔を見ると私も嬉しくなる。

父は私の母のことも愛してくれた。

だったらこれ以上なにを望むことがあるだろうか。

姉はどこか立場に拘りすぎるきらいがあるようだ、というのは私の推測だ。

今は宰相の下で政治について学んでいるようだけれど、それも多分王位に就くため。

「姫様、お風邪を引かないうちに中に入りましょう？」

春先とはいえ夜はまだ冷えますから」

私の御付きの侍女ミレイユが背中を擦りながら声をかけてくれる。

「ありがとうございます、部屋に戻ります。」

あなたも一緒にいてくれる？」

「勿論です、姫様」

「もう、ミレイユ？プライベートよ今は」

「姫さ…失礼。行きましようシャル」

「それでいいのよ」

部屋に戻った二人が見たのは一通の手紙。

「お茶会のお誘いね」

中を開けることなく気付いた私。

「そうですね…前は豪雪中止になりましたもんね」

「ミレイユはついてきてくれるよね？」

「もちろんですよ。返事を書きましょう」

早々に返事を書き終えた私は中にある同封物の魔法具を括り付けた。

「流石ですね、アリア様は…」

「凄いいね〜」

何時もの事ながら知り合いのお姫様謹製の転移具は素晴らしい。

しかも流通させていないのだから希少価値である。

見届けた後、二人は床に就いた。一緒に。

「……………眠れないわ」

シャーレヴィヒに抱きつかれたままで動けないミレイユがぼやいた。

その日、およそ一時間にわたって一人のメイドによる眠り歌が流れ、城の一部区画から大評判となり、母なる眠りの歌の製造注文が整備部隊に殺到するのだがそれはまた別の話である。

太陽姫の憂鬱（後書き）

二人目ヒロイン登場。

主人公はまだ出てきません。

魔界の姫君（前書き）

連続投稿ファイアー！
燃え尽きないように頑張ります。

魔界の姫君

大陸南西部。

そこにいるのはおよそ人ではない……というより、獣人などといった異種交配により生まれた生物たちが暮らしている場所がある。

一応ヒトの血も継承してはいるのだが、群れあうと言う性質はヒトほどのものではなくどちらかといえば寄り合い程度だった。

人による一時期の迫害の影響を受けてこの地に集まってきた亜人——人間が勝手にそう呼んでいる——が村街を作り上げたのだ。

他の国に対抗するためのバックアップを得られるシステムを作るべきだと唱えた一人のエルフによって国、ではないが連合体と言う形を取って村々が纏められた。

名を、アシュメダイア連合体。

現在連合体の名義上最上位に位置しているのは魔王である。

この魔王という呼び方も他の国の人間たちが使っている呼び方なのではあるが。

近年では迫害の影響は薄れ、東のカルバディアノスやソルディバイトで暮らしている亜人も数多く居る。

最も、北部の国、イスラフィール教国に至っては天に叛きし暗黒の僕として今でも迫害対象であるのだが。

《ラグネイアⅡルクシェリアⅡアシュメダイア》

「あーブーいー！！」

その日、アシュメディア連合首都、ルクスエリアは猛暑だった。そんな猛暑の影響を受けている者がここにも一人。

「どーなってるのよ…尋常じゃないわ」

そう言って服を脱ぎ始めるラグネイア。

「ひ、姫様お戯れを…」

それを諫めるのは連合外交官フォルディシュナ、若手の出世頭の男である。

この外交官、他国との外交だけではなく姫との外交も執り行っているのである。

仮にも男の目の前でいきなり脱ぎ始める姫を見ては焦りながらもその肢体を見つめてしまうのは致し方ないことであるのか。

その視線に気が付いたラグネイアは何かを察したらしく、ニヤニヤとフォルディシュナの顔を見た。

「な、何でしょうか姫様…」

「見たいの？」

「——ッ！」

図星を差され顔を背けたフォルディシュナ。

しかし、その鼻から赤色の液体が出るのは時間の問題であった。

「ねえ、見たいんでしょう…フォルディシュナ？」

身体をしなをつくりながら近づくとラグネイア。

フォルディシュナは——墜ちた。

紅い海に沈んでいるフォルディシュナを横目に見つつラグネイアは溜息をついた。

「良かった…これ以上粘られたらどうしようかと思ったわ」

統治域内ではセックスシンボルとしてある意味崇められているラグネイアであったが、実際のところはまだまだ恋に恋するお年頃の生娘である。

彼女に関する街中での噂として有名なものがいくつかある。

曰く、街娼に扮して男共を一夜にして二十人快楽の渦に沈めた。

曰く、獣人の幼女が人間に襲われていた時身代わりになって油断させたところを切り裂いた。

などなどである。

その噂が大きくなるにつれて首都府も看過出来なくなりラグネイアに問いたしたのである。

その結果が今である。

ラグネイアとしては、自らを羨望と憧憬の眼差しで見つめてくる可愛い獣人の子供たちや魔族の子供たちの見本であるべきだと常々感じていたということもあったし、何より彼女は妾腹の子である。

魔族の頂点である父と、今は亡き小国の姫との間の子供。

妾腹の子供であったにも関わらずラグネイアとその母は愛された。

その愛は魔族の王である父と関係を持った相手の一族郎党にまで及んだ。

故に、アシメダイアは人間を遠ざけない。
むしろ歓迎するのである。

それでもやはり一部人間貴族というものは変り種を買いたがる。
その結果が獣人奴隷の存在。

そういったものから回避させるための手段として自らがセックスシンボルになることによって達成できるのではないかと考えたのである。

結果は——とりあえずの成功を見た。

獣人奴隷の数は元々いた数の一割にも満たなくなった。

最も、国の施策によるところもあったのだが。

それが功を奏したのは彼女——ラグネシア——の美貌によるものもあるのかもしれない。

半魔であるが故の人間に程近い華奢な身体。

母親から受け継いだ艶やかな黒髪。

それでいて魔王の血を受け継いだが故の強さ。

見た目だけであれば恐らくイスラフィール教国であっても暮らすことが出来るだろう。

ラグネシアは自らの美貌を維持することが毎日の日課となっていた。

適当に息を吹き返したフォルディシユナを追い返した後放り投げてあつた手紙の封を開ける。

そこにあつたのはお茶会の誘い。

年に幾度かあるそのお茶会は他国の姫たちと立場を無視してガールズトークを行うことの出来る唯一の機会。

相手の顔を思い出しつつ出席の旨を書いて返信した。

ベッドに飛び込んだラグネイアは枕元においてあつたヌイグルミと呼ばれる熊種の置物を抱きしめる。

「そう言えばこのヌイグルミもお茶会でもらつたものだったわね…
皆、元気かな…」

彼女の安息のときを妨げたのは大きな音。

その音は各関所に設置してある物であり、それぞれ音が異なる。
しかし、この数年一帯に鳴り響く音は同じものばかりであつた。

「敵襲————！敵襲————！」

城にいた精兵たちが相次いで街の外に出て行く。

兵、といったも魔族あるいは獣人である彼らは鎧を纏う事は無い。
己の持てる力を発揮するには鎧は枷となる以外に役割が無いからである。

「面倒なことね…いや、ご苦労様とでも言っておこうかしら。
むしろ早く飽きてもらいたいんだけど」

ラグネイアは部屋からその様子を見ると窓を開き翼を広げた。

片方の翼は魔族の証である漆黒の翼。

もう片方は、天使の血を引く証である純白の翼。

彼女は針路を北方の国境限界線に向けて飛び立った。

そう、鐘の音は北のイスラフィール教国との境界線に位置する関所。
いつも通り、教国から少数軍勢が攻め込んできたのだった。

魔界の姫君（後書き）

ブログなのでサクサク進んでいきます。

私用がかさばらない限りは書き進めていくつもりなので、他作品も手を止めるつもりは無いのでご安心ください。感想、評価お待ちしております。

誤字脱字指摘もお待ちしていますので遠慮なく。

沈黙の聖女（前書き）

またまた連続投稿…プロローグはサクサク行きます。

沈黙の聖女

イスラフィール教国は宗教国家である。

国の名前を決めたのはかの”英雄”であるという与太話があるが、英雄が実在しているかどうか不明でありしかも限りなく絵空事の可能性があるため恐らく与太話であるという話だ。

イスラフィール教国が信仰するのは神ではなく天使である。

天使の名はイスラフェル。

かつてこの地に民を集めうるおいを与え、国を成立させるきっかけとなった天使である。

かの天使は音楽を好みまた情に厚い天使であるが罪人を裁くという役目を負っていた。

その役目を果たすとき彼女の目からは血の涙が流れ、アイギス川の色はその都度朱に染まったのである

《イスラフィール教

国歴史録第一章 抜粋》

《アリアⅡサンクテットⅡイスラフィール》

我が軍の第一遠征部隊が激突したぞ――

数刻前から教会内に響き渡る複数名の足音。
その声は最近では日常茶飯事となっている。
また教皇が隣国にちよっかいを出したのだ。

「……………」

沈黙の姫君、アリアはただずっと祈りを捧げている。

天使イスラフエルに。

その祈る姿はまさしく聖女。

彼女の黄金の髪は天井から差す光を受けて輝く。

さながら、その場所は他者の立ち入りを禁ずる聖域であつた。

彼女が沈黙の聖女と呼ばれるようになったのはここ二、三年の話である。

それまでは周囲の付き人を苦勞させる程度にはお転婆姫だった。

朝食を食べては町へ出かけ、町の人間と交流を深めて日が暮れる前に教会へ戻る。

教皇の祖父と小さなお茶会をしておしゃべりをするのも楽しい。

街中で他の子供たちと服を汚しながらも駆けずり回る毎日。

彼女は幸せだった。そう、あの日までは。

イスラフィール教国は国の性質からして王城が存在しない。
同意として教皇庁なるものが存在する。

その日、枢機卿である父は教皇の居室にいた。
他の二名の枢機卿を伴って。
論争だった。

魔族の住む南の国、アシメダイア連合体への進軍要請。
共存、共栄を図ろうとする穏健派。
日に日に打ち勝ってくるのは主戦派。
そして、事件は起きた。

「——っ」

思い返しただけでも頭痛がする。

穏健派の教皇と主戦派の枢機卿。

教国であつても政争は起きる。

勝ったのは主戦派である父。

負けたのは祖父。

教皇の突然の死にも国民は慌てなかった。

国民が信奉するのは教皇ではなくて天使イスラフェルであつたが故
に。

次代教皇は空白として、枢機卿筆頭の位に就いた父親。

それ以降父親は国境付近の軍隊を南へと毎日のように差し向けてい
る。

南征だ、南征だ、と沸き立つ国民。

そんな国内事情にも彼女は傍観者の立場を貫いた。

祖父の昇霊式にも悲しみの涙すら浮かばせず。

母はそんな自分の冷凍された心を悼み、看病をしすぎて無理がたた
った。

周囲の人間は彼女のことを強い精神の持ち主と持ち上げた。
父は関心を持たなくなった。

父娘の間には決して超えることの出来ない壁が出来てしまっていた。

気が付いたら彼女は言葉を発することが出来なくなっていた。

魔術でも治らない、医者に見せても治らない。

原因はストレス性のものらしいが彼女の心は氷を溶かしたら壊れて
しまうギリギリの状態だった。

誰も手が付けられない。

自然と彼女の周りからは人が減っていった。

彼女は気にしない。

気にしても仕方がないから。

言葉を喪った彼女は知識を増やした。

教皇庁に保管されている全ての書籍を読破し、他国の本も読み漁つ
た。

アシメダイアの本は検閲にかけられて捨てられてしまったけれど
も。

彼女は話すことが出来ない。

それ故に書き続ける。

戦争なんて馬鹿馬鹿しい――と。

彼女は天使イスラファエルのことは信仰している。

イスラファエルという崇高な精神は、時の野心家によって歪められて
しまったのだと彼女は考える。

イスラファエルの本当の願いを知りたい、と。

イスラファエルの教えの何処に魔族を滅ぼせ、などという記述があつ
たのか。

彼女は南の国にも行った事がある。

南の姫君であるラグネの誘いで。

そこは何も変わらなかった。

彼女が人間であることを知っていても。

枢機卿の娘という立場さえなければ出奔したいくらいだがそれは不可能である。

だから彼女はお茶会を開く。

更なる知識を得るために。

少ないけれども貴重な友人たちと交流する為に。

父親の目から逃れるために。

神託を得たいが故に。

部屋に戻った彼女は机の上に光る魔法具を見つける。

アリア謹製の転移魔法具である。

他の三姫君に送った参加希望の返信が届いたのだ。

いつも通り皆参加。

誰が見るともなく彼女は頷いた。

修道女を呼びつけ馬車の準備をさせる。

さあ、出発だ――

沈黙の聖女（後書き）

休みがあるので連続更新が出来ていますがそろそろキツイかなあ？

感想、批評、評価、お待ちしております。

皇女達のお茶会（前書き）

毎日更新ワッハッハといたいところですがそろそろエネルギーが
粉骨碎身です。

皇女達のお茶会

小村・ウィドクピロー。

アルベダイド大陸中央にある氷塔を中心とするピローナスク地方の南端にある小さな村である。

氷塔から春先に流れてくる雪解け水が最近は農業に影響を与えている。

この村では、年に数回人通りが多くなり商業が一時的に活性化することがある。

その原因がお茶会である。

元々はお忍びという形で各国皇女の集まりであったがいつの間にか伝聞で一般市民が町に集まるようになっていた。

人口は近年右肩上がりである。

人口が増えれば商業も活性化する。

上下はあれど年々商業が活発にはなってきたのだった。

そして、この日も皇女たちが揃い踏みだった。

「皆さんお久しぶりですね」

口火を切ったのはソルディバイト第二皇女シャーレヴィヒだった。

「何を言っているのよシャル。先月も集まったばかりじゃない」

此れに答えたのはカルバディアノス皇女セラティアだった。

ここにセラティアの部下がいれば驚愕しただろう。

普段武人として名を馳せているセラティアは男集団の中で戦っているせいか男言葉が標準化していたのだから。

そのセラティアが今の言葉である。

武人である前に皇女である、そんなセラティアの本懐が垣間見えるものであった。

それぞれの国から持ち寄ったお茶やお茶菓子を堪能する四人。

「やっぱリアシユメダイアのお茶は美味しいわね。」

「このお茶はなんて名前なのかしら？」

シャーレヴィヒが尋ねた。

「紅茶って言うんだよ。シャルの髪の色と同じ文字が使われているんだって。」

ラグネイアがシャーレヴィヒの紅色の髪を見ながら答えた。

「このお茶菓子は？」

「サトウって言う甘味料を使ったお菓子だそうだ。」

シャーレヴィヒの疑問に答えたのはセラティアだった。

既に彼女の言葉遣いは無骨な女騎士の物へと戻っていた。

話すことの出来ないアリアは一つ一つ咀嚼しながら首を縦に振っていた。

アリアなりの美味表現である事は皆が知っていたので特に気にすることはなかった。

「それで？今日のお茶は何なのよ？」

一段階着いた時他の三人に向けて尋ねたのはラグネイアだった。

最初に提起したのはセラティアだった。

「最近奴隷市場の動きが活発なのだが…」

お茶会は単なるお嬢様たちの憩いの場ではない。

表立って参加することは出来ない各国中枢部の人間に成り代わることもある立場のお嬢様の集まりだ。

過去に大陸内で決められた大きな条約などはほぼ全ての発端がこのお茶会にあると言っても過言ではない。

大陸内にある複数の小国が参加を希望しているものの、中々呼ばれることはない。

参加国を決めるのはその時々ホストであり招待条件も各国は把握している。

このお茶会におけるホストは毎回異なり、今回はアリアであった。

招待条件は、主だった物を挙げると経済規模であったり人口規模であったりと様々である。

このお茶会に参加できるのは国政を司る一族のお嬢様であるということ。

男子禁制の筆頭で、護衛も女性兵士のみで且つ少数である。

第一回のお茶会で決められたことで、これまでに数百年続いてきている伝統と言える物なのだ。

セラティアとシャーレヴィヒがそれぞれ自らの憂慮している事を述

べた後皆の視線がアリアに向いた。

「……………」

無言でアリアが一枚の紙をテーブルの上に置いた。
それを見たラグネイアは驚愕した。

「何コレ！アシユメダイア殲滅作戦！？」

要約するとアシユメダイア連合体を滅ぼすべく教国は天使イスラフ
エルの名において軍隊を動かすつもりなのである。

他の二人も難しい顔で唸っている。

カルバディアノスとソルデイバイトは無宗教国家なのである。

それ故イスラフィール教国の支配下になく、また敵対しているわけ
でもないという状況がある。

故に魔族、獣人族に対して悪感情は持ち合わせていない。

魔族の中の一握り、魔人族に至っては天使と翼の色が異なるだけで
魔人と天使は同族なのではないかと国内で議論が持ち上がったこと
もある。

この時その議論を押しつぶし、数十年前の亜人封鎖が行われた背景
には当時のお茶会が多大に関与していたのであった。

「え？これが今回の主役なの？」

その場に発生した沈黙がそれを肯定していた。

「でも、私達に出来ることってあるのかしら……」

「無理だな。未だかつてお茶会で戦争の話題が出る事はなかったか
らな」

シャーレヴィヒの言葉をセラティアが一蹴した。

「ちよつと、セラ！？一蹴するなんて酷いじゃない！」

ラグネシアが言葉に怒気を含んだ。

「確かに酷いとは私も感じたけれどどうしようもないのではないかな？」

「そうねえ…避難してくる魔族や獣人族の受け入れくらいならやつても構わないと思うけれど…」。

お姉様がね…」

何処か憂愁の表情を浮かべたシャーレヴィヒの言葉の意味を皆正確に理解していた。

シャーレヴィヒの姉である第一皇女レティアは亜人、特に獣人族嫌いである。

どのくらい嫌っているかと問われれば彼女が往来で行商に来ていた獣人族の男を見て一太刀で身体を半分にしてしまったことを鑑みるとどれほどの物であるかが分かるだろう。

その時、これまで動静を見守っていたアリアが本を取り出した。

アルベダイド英雄伝であった。

皇女達のお茶会（後書き）

まだ主人公が出てこない…orz
順調に進んでいます。

お気に入り登録をくださった方々、有難うございます。

アルペダイド英雄伝（前書き）

学校が終わりません。台風が涼しくて気持ちがいいです、そろそろ用意してあった物が尽きそうです。

アルベダイド英雄伝

突然のアリアの行動に他の三人はどのように対処するべきかを思考する時間を要した。

「アリアは…英雄を信じているのか？」

セラティアの疑念値最大の質問にアリアは肯定の意を示した。

「アリアちゃん…それは流石に、ねえ？」

シャーレヴィヒがセラティアとラグネイアに同意を求めた。

二人も頷いている。

しかし、アリアは頑として譲らない。

壁際に下がっていた侍従を呼びジェスチャーで書く物を用意させたアリアは筆談を始めた。

アルベダイド英雄伝は、御伽噺ではなくて事実。

脚色されている点はあるけれども大半が当時に書かれたもの。

英雄は”氷塔”に座している。

これは各国の王は知っていること。

当たり前のことであるけれども王以外はこの事実を知らない。

探しに…行く？

アリアの書いた文を見て三人はそれぞれ異なった表情を浮かべた。

「氷塔というのは、そこから見えるあの巨塔のことか？」

最初に尋ねたのはセラティア。

どこか言葉が弾んでいる。彼女の英雄への憧れの強さを見れば当然ともいえるのだろうか。

アリアは肯定した。

『英雄殿…』と呟き何処か夢見心地になってしまったセラティアを華麗にスルーしてシャーレヴィヒが尋ねた。

「どうしてアリアちゃんがこの事を知っているのかしら？」

アリアちゃんによると国の王しか知らないと言ったことになってい
るようだけれど？」

アリアは書き始めた。

教皇庁の書棚にあった本に書いてあった。

アルベダイド英雄伝の著者の自伝があったから…

「そういうことなのね…。理解したわ」

シャーレヴィヒが質問を終えたのと入れ違いにこれまでアリアの筆談メモを読んでいたラグネイアがおずおずと尋ねた。

「で、さ…。仮に英雄さんに会ったとして、どうするの?」

アリアは困惑の表情を浮かべた。

他の三人も同様の表情を浮かべた。

「まさか奴隷市場を破壊してくれとも頼めないしな…」

「お姉様と私の仲を取り持ってくださいとも言えないわね…」

声が出るようになって頼んでも無理そう

「戦争を止めてもらって言うのは難しそうだよね。
何かそれが一番英雄っぽいけどさ」

四人は考え込んでしまった。

お茶会の為に用意されているこの貴族御用達別邸の周りには有象無象がひしめいていた。

四人の間に沈黙の空気が流れているため外の喧騒が大きく聞こえる。壁際の従者の一人がセラティアのカップを持っているのと逆の手がきつく拳を作っていたのを確認して周りの者に小声でそれを伝えると数人と部屋から出て行った。

数分後、屋敷外の喧騒は綺麗さっぱりなくなっていた。

恐るべし従者たちである。

輪転する思考の渦から最初に回帰したのはラグネシアだった。

「何はともあれ、とりあえず英雄さんに会いに行ってみなきゃね」

他の三人は肯定の意を示した。

「それじゃあ行く前提での話になるけれど、どうやって行くのかしら……」

シャーレヴィヒが他の三人に聞いた。

巨塔のある地、ピローナスクー帯は巨大河川であるアイギス川とクリペウム川の交差点にある。

ピローナスクの入り口部分に当たる所の標高はそこの山くらいの物がある。

クリペウム川とアイギス川はその場所、ゴーズニール山から平野部へと流れ込んでいるのだ。

故にピローナスクはアルベダイド大陸最大の要衝であると古来から言われているにも関わらずどの国家も制圧するに至っていないと言うのが現在の状況である。

「ラグネイアは羨ましいことに翼があるではないか」

「私？ そうだね、皆は抱えられないよ？」

「分かっている」

「ですが、ゴーズニール山は魔物の棲息地でしたわよね？」

この世界における魔物とは、魔人でないものの事を指す。

要するに、他の人間の国三国と、アシユメダイア連合からも弾かれるような者のことである。

明確な基準点と言えば、言語による意志の疎通が可能かどうかというただ一点である。

「商人がこぞって予定進路から外すルートだもんね」

ラグネイアの返事に加えてアリアの首肯がその事実を認めていた。

「しかし、問題は麓についた後だな。

あの氷塔を上るには一日や二日どころではないぞ」

元来ピローナスクー帯とその麓、ゴーズニール山は人跡未踏の地で、
明確な地図資料もないため行き当たりばったりの旅であることは確
実だった。

「やっぱり英雄さんはあの氷塔の天辺にいるのかな……？」

「……………」

「……………」

「……………」

四人は雲を突き破ってまだ更に伸びている巨塔を見て深い溜息をつ
いたのだった。

アルペダイド英雄伝（後書き）

ゆったりペースを自覚していこうかなと。

お気に入り登録有難うございます。

評価、感想、レビューなどありましたらよろしく願います。

出発（前書き）

平日更新は厳しいなあ……。受験学生の憂鬱みたいな（笑）

出発

「それで、いつ出発するんだ？」

各王家が英雄が実在すると言つことを隠蔽していると言つことは何かしらの問題があるのだろうということを察した四人は各個人で国を出奔することに決めた。

「それでは、手筈通りに」

「そうですわね」

「……………（コクリ）」

「分かったよ」

こうして今回のお茶会は終了したのだった。

数日後、カルバディアノス領内の王都ギルガンダス。

未明、まだ日が城下町を照らし出していないこの時間帯には表通りにある幾つかの商店は開店する。

主に開店するのは朝一番で水揚げされる魚類を扱う食料品店である。この日、開店準備中だった老年の店主の前に立ったのはフードで顔を隠した一人の人物だった。

「店主、食料を売ってもらいたいのだが」

存外に若い女性の声だったことに驚愕しつつも女性の鎧装備から国境付近の警備に就くのだろうと考えた店主は保存食料を数種類用意した。

「こちらが保存食になるんじやが…お前さん国境の警備に行くんだろっ?」

相手の女騎士は一拍置いて答えた。

「そうだ、よく分かったな」

経験から察することが出来たという旨の世間話をしながら保存食を女騎士に渡した。

「有難う店主。代金だ」

「国境の警備頼んだぞ?お前さん方がいなければ国は成り立たんからの」

店主に向かって軽く会釈をした女騎士は門番に挨拶をして街から出て行った。

この数時間後、店主の下には更に多数の騎士が押し寄せることになったのであったがこのときの店主はそんなことを露ほども想像してはいなかった。

勿論店に食料を求めに来たのはカルバディアノス第一皇女・セラティアだった。

彼女は自室に国を出て見聞を広めるといふ旨の手紙を置いて街を出たのだった。

セラティアが出発する数日前。

北東の国ソルディバイト王都リ・アル＝ソラーレ。

大陸で最も日の出が早いのがこのリ・アル＝ソラーレである。

しかしこの時間にはまだ日は出ていない。

人通りが皆無である中央通りを走る二つの影。

「姫様。荷物は仕舞われましたか？」

口を開いたのはシャーレヴィヒと王との連絡係をやっている女性兵士。

名をソルという。

シャーレヴィヒと同じ日に生まれた幼馴染と言ってもいい関係の兵士である。

名付け親はシャーレヴィヒと同じく現王である。

「ええ、準備は完璧よ。貴女こそ私が渡した手紙、置いてきてくれた？」

「姫様の仰るように部屋の机の上に置きましたが…本当によろしいのですか？」

ソルの心配は子煩悩である父王が心配の余りとんでもない行動に出ることを案じてのことである。

「大丈夫よ…多分」

「多分ですか…」と何処か呆れているソルを横目にシャーレヴィヒは手紙の内容を思い返していた。

お父様へ。

旅に出ます。探さないでください。

内政はお姉様にお任せするのが一番だと思います。

お体を大切に。

シャーレヴィヒ

「あの…この文章ってかなり危なくないですか？」

「え？何処がかしら」

「多分これを皇王様がお読みになられると…城下町で王乱心か、な」という噂が起こりそうです」

「ないわよ。そんなことより、馬車の準備は出来ていて？」

「町外れに留めてあります」

「それにしても、長年一緒にいるけれど二人旅は初めてね。よろしく頼むわ、ソル」

「承知しました」

「昔みたいに呼んでくれないの…？」

涙目のシャーレヴィヒを見てソルはぎょつとした。

「……………分かったわよ。急ぐわよ、シャル！」

「ええ！」

朝日が昇る頃目覚めた皇王は手紙を発見して咽び泣いている所をシャーレヴィヒの母親に窘められることになるのだがこれは別の話。

セラティアが発発して数日後。

南西の国。アシュメダイア連合首都ルクスエリア。

ラグネイアはいつもの日課、フォルディシュナとの掛け合いをやっていた。

若干この日は毛色が違ったが。

「ひ、姫様どちらへ…？」

「何処だっでいいでしょ？出かけるのよ、悪い？」

「しかし私は姫様の付き人として…」

「いらないって言ってるでしょ！

もう行くからね。父様にもそう言っておいて」

ラグネイアの機嫌が悪いのは昨日父親と喧嘩をしたからである。

英雄について隠されているという見解で終えたお茶会であったが父なら教えてくれるだろうと考えたラグネイアは父親に殲滅作戦の件と共にさりげなく聞いたのだ。

父の返答は怪しかった。

「そ、そんなことは知らんぞ」

どうみても怪しかったが殲滅作戦の件を話すと真剣な表情になって軍議を始めたため問い詰める暇がなかったのだ。

ようやく時間が取れた深夜、父はまたしても一言だった。

「ラグネイア。英雄を探しに行こうとは思うなよ」

会話の最初がこれであったため出足を挫かれたラグネイアは理由を尋ねたが理由を濁す父親に怒りがこみ上げてきたのである。

その結果が今に至る。

フォルディシュナの制止を振り切ってラグネイアは集合予定場所へと飛び立った。

ラグネイアが飛び立って数日後。 集合予定日の前日である。

アリアは日課である祈りを終えて資料を集めてしまっておいた収納袋と共に集合予定場所へと魔道具で転移した。

誰に告げるともなく。

誰にも告げなかったことが後々大きな影響を及ぼすのだがそれはまた後の話。

結果的に四大国の姫君は全員が王に外出を認めさせることなく出国することとなったのである。

出発（後書き）

いよいよですね…。

ちなみに、都市名などの固有名は翻訳辞典とか造語とかで組んできます。

全く関係ないのもちらほら…そうでもなかった。

感想、批評、評価、お気に入り登録有難うございます。
今後ともよろしく願います。

螺旋の氷塔（前書き）

更新ペース、落ちそうです。

更新時間帯は21:00を基本ベースにしていたのですが若干遅れました。

螺旋の氷塔

「大きいねー！」

一番最初に叫んだのはラグネイア。

姫様集団随一のアクティブな少女はただただその大きさに驚くばかりであった。

「ほう……」

「へえ……」

「……………」

その他の姫集団も感嘆の意を示した。

「とりあえず、どうやって中に入るの？」

ラグネイアが塔の正面にある扉を見ながら尋ねた。

扉は凍り漬けになっていて、触れることすらままならない冷たさである。

扉には窪みがあり、ちょっとした文庫本なら入りそうなサイズであった。

この時代には文庫本などというものは存在しなかったのだが。

「……………」

一歩進み出たアリアが窪みに一冊の本を嵌め込んだ。
アルベダイド英雄伝を。

誰かがあつ、と言う間もなく正面扉の氷は解けきってしまった。

「何というか… 案外適当な造りなのか？」

「そんなはずはないと思うけれど…。それにしてもアリアちゃんよくそんな物持ってたわね」

シャーレヴィヒの問いかけにアリアは自らの所持物である背負っていた収納袋を示した。

気になったラグネイアが収納袋の中身を空けた。

「えっと何々…？ 英雄伝の真偽は如何に！？ 英雄の夜の生活模倣図、描いてみた氷塔の全景、想像してみた氷塔の全景、英雄への質問事項108項、英雄×ボクの愛の生活… たくさん入ってるね」

華奢なアリアが背負うには明らかに重そうな収納袋ではあったものの、アリアの断固たる意志の前に三人はこれ以上口出しをしなかった。

内容にも色々と問い詰めてみたい物があつたがそれについても尋ねることはなかった。

尋ねられたところでアリアが答えるかと言う問題の答えは恐らく否であるだろうから。

螺旋階段を上っていく一行。

シャーレヴィヒが乗ってきた馬車は地上に置いてある。

普通の場所であれば危険極まりない行為であるのだがこの氷塔周辺には魔物が出現しないと言うのは古くからの国お抱えの研究者たち

によって明かされている。

曰く、魔物たちは塔にいる十二カに怯えている、と。

塔に関する調査事項は秘匿義務を要していたためこの情報源は勿論アリアからであったが、万が一と言うこともあって御者は残してある。

御者は傭兵ギルドに所属している人物で金に相当する信用は与えられている。

それ故、放置しておくのには何の躊躇いもなかった。

「それにしても…改めて中から見ても高い塔だな」

「この階段まで凍り漬けになっているのは面倒だけどね」

「そういうラグは翼があるのだから関係のない話ではないのかしら？

アリア、大丈夫かしら？」

「……………（コクン）」

ガールズトークを繰り広げつつ階段を上る四人。

その後ろを歩くのはシャーレヴィヒと共にここまでやってきたソル。

姫集団とは一歩後ろを歩く彼女は周囲の警戒に全力を傾けていた。

「姫様方、来ます！」

ソルの一声に四人の姫は周囲を見回した。

「何もないわよ？」

「ありませんわね……」

「いや、ちがう。正面だ！」

セラティアの一言で五人の視線が正面の空間を貫いた。

そこにいたのは、狼族。

「よりによってウォルヴスとはな……」

ウォルヴスとは、元々群れて行動する性質を持っている狼族の個体名称であり生物図鑑にも載せられている。

単体で行動をしないのは高知能の証明。

故に、少数であつても警戒するべき対象の一つであり国境の兵士には第一級優先討伐義務が与えられている。

上官の指示を仰ぐことなく即座に討伐することで安寧を得ようとするための最善の策である。

姫ではあるものの、前線に出て戦うことも多いセラティアは周りに指示を出していく。

ざつくばらんな指示ではあつたが、正確な物である。

シャーレヴィヒが魔法攻撃。

ラグネイアが攪乱遊撃。

アリアが補助。

このスタイルは、その後傭兵たちがチーム行動をするときに使う役割分担の基礎となる。

誰が言い始めたか、その編成名を「瀬良式行動術」と呼ぶようになったのである。

誰、の部分は割愛する。

ラグネイアが機動力を生かして突撃、回避したウォルヴスをアリアによって強化された魔法でシャーレヴィヒが追尾、同じくアリアの短距離転移魔道具でウォルヴスに肉迫したセラティアが斬り伏せるという一連の流れはその場にいたシャーレヴィヒの護衛・ソルを驚

かせた。

その動きの華麗さ、圧倒的な制圧力、護衛として、武人としてこの光景に感動しなければそれは武人とは言えないだろう、とソルは後に友人たちに語ったと言う。

通常の兵士たちが十数人で囲んで、三人の負傷者を出してようやく勝てる程度の敵を圧倒的に屠る姿は彼女たちが並の兵士とは次元が異なることを証明していた。

返り血を拭うセラティアを尻目に、ラグネイアがぼやいた。

「何か面倒になってきたんだけど…」。

アリア、何か楽な方法ってない？」

アリアが取り出してラグネイアに見せたのは収納袋に入っていた「描いてみた氷塔の全景」だった。

横からその細部に書かれた物を眺めていたシャーレヴィヒが気が付いた。

「これって…転移魔導陣じゃありませんか？」

アリアが頷く。

「でもどうやって…？」とシャーレヴィヒが言い切る前にアリアは自らの転移魔道具を取り出した。

「魔力がたまっていますわね…。もしかして先ほどのウォルヴスが！？」

再びアリアが首肯した。

「ですが、この魔力量しか溜まらないのでは跳べるのは何時になる

「ことやら…」

そうシャーレヴィヒが呟いた瞬間、塔内を強い風が吹き渡った。

「だから…我々のような者がいるのだから」
「そうね」

「——つ、神龍ですって!？」

そこにいたのは、二柱の白銀の龍だった。

螺旋の氷塔（後書き）

あえて、数え方を柱にしたのは立場的に神龍だからです。

龍が喋るとかいろいろテンプレートじゃないかな…とは思ったんですが、彼女たちも必要な存在なので登場は必然的要素です。

日々お気に入り件数が増えていることを大変嬉しく感じております。批評、感想、評価などお待ちしております。

神の頂の姫君（前書き）

東京に用事がありましてこの数日更新が出来ておりませんでした。

神の頂の姫君

神龍。

大陸中に神話として伝えられている龍種のことである。

標準龍が、ある条件を満たすと全身が白銀と化する。

元々の表皮の色に箔が付くような物である。

故に、見分けが付きやすい。

しかし、生存する個体数そのものが少なく目撃情報も少ないため生物図鑑には載ることはないのだった。

かつてこの大陸が存在を刻み始めた頃から龍族は既にいて、大陸の人間たちを見守ってきたというように大半の歴史書には書かれている。

イスラフィールの歴史書には例外的に、誇り高き天使イスラフェルが龍を従えて地方統一をしたというあくまで龍は天使の僕として扱っている。

故にイスラフェル至上主義の民たちは龍族を見てもただのトカゲもしくはそれに準ずる程度の生物であると言う考えしか持っていない。シャーレヴィヒが一目見て神龍だとわかったのは単に彼女の教養が高かったと言うことの証明であるのだが、その冠詞、「神」の名を持つ龍を前にしては四姫も動きを止めざるを得なかった。

「だからお前たちがいるというのはどういうことだ？説明してもらいたいのだが」

問いを投げかけたのはセラティア。

周りが「言葉遣いが…」とセラティアを窘める中で特に気にした様子もなく龍の石柱が答えた。

「なかなか見所のありそうな娘ではないか！主には敵わないだろうが」

「そうね。主様に敵う物がいたらそれだけで万死に値するのだけだよね」

さらっとんでもないことを言う。

その会話中に気になる一言を聞き取ったシャーレヴィヒが訊ねた。

「主って…誰のことなのかしら？」

龍達が嗤った。

塔の中に気流が発生する。空気が振動する。

「小娘。この塔にいらっしやるのは我が主・瑞樹殿以外にはいないことは周知だろうが！」

「瑞樹様の名前を知らないなんて…言わせないから。」

どうせ貴女たちも瑞樹様を狙ってきた暗殺者とかその類なのでしよう？」

四人は首を横に振った。

「なればお前たちは何者だ！」

「内容によつては…ここで死んでもらう」

容赦無く叩き付けられた死刑宣告に、流石の四姫も震え上がった。

それに素早く反応し、ソルが四姫の前に庇うように立ち剣を構えた。

と、これまで沈黙を保っていたラグネイアが答えた。

「私たちは大陸を四つに統べる大国の王族に連なる者よ」

その言葉に何かしら思うところがあつたのか、二龍から殺気が消えた。

「大陸を統べる…だと？笑いが止まらんわ！

大陸を統べているのは我らが主であるというのに、ひよっこが何を言うか！

しかしながら…不本意ではあるが案内するしかあるまい。

今更主様の子孫たちが何用かは分からんがな」

「瑞樹様を害するならば…消えてもらう。幾ら貴女たちが瑞樹様の血統としても」

そう言つて、四姫＋一人の護衛^{ソル}は龍達の背中に乗つて最上部へと上昇していく。

上昇中龍が呟いた。

「そう言えば、我らはまだ名乗っていなかったではないか。

我の名はデュ＝シル。主の守護龍じゃ」

「……………ラ＝テール。貴女たちの事、認めたわけじゃないから」

奇妙な組み合わせのパーティーはどんどん上へ上へと進んでいった。

ふと、アリアが筆談を始めた。

「龍って手綱いらないの？」

それを見たデュールは嗤った。

その嗤いの中にあるのは、怒り。

「我々誇り高き龍族が手綱をつけるだど！」

これは全く異な事よ！

我々を馬族や何かと勘違いしておるのではないか？」

馬族とは一般的な乗用馬や商業用の馬車馬、ケンタウルスなども含まれる。

傾向的に魔族の血も引いているケンタウルスはどちらかと言えば馬族と呼ばれる事は少ない。

「よりもよって私たち龍族の姫にそれを言うとは思わなかったわ……」

ラッテレが呆れたように言った。

「龍族にも姫がいるのか？」

セラティアの驚きの声を聞いたシャーレヴィヒが冷たい視線を浴びせた。

「もう少し勉強なさったほうがよろしいのでは……？」

セラは英雄殿に憧れているのでしょぅ？

ならば龍族について知っておくのは当たり前でしょぅ？。」

ラグネイアも続いた。

「全く……セラってば脳筋なの？」

歴史の勉強したじゃない。龍族はその昔国が栄える前から独自の文化を持ってたって」

アリアが頷いた。

「しかしそんな事言われたかな……。そもそも歴史の勉強なんてやったか？」

冷たい視線に貫かれたセラティアはそれ以後黙り込んでしまった。

その間にも更に上へ上へと進んでいく。

神の頂の姫君（後書き）

龍族の名前はそれぞれギリシャ語・・・（だったかな）で『天空』と『大地』の翻訳語を適当にカタカナ読みしてみた感じです。

読み方ちがうかもしれないし、仮にちがったとしても別に構いませんが。

お気に入り登録してくださった方有難うございます。

また、いつも読んでくださっている方も有難うございます。

批評、評価、レビューいつでもお待ちしております。

誤字脱字に関しても指摘お待ちしております（一応一通りは確かめてはいますが）

邂逅（前書き）

そろそろ2日に一回のペースに持っていこうかなと思っています。
（他のが更新できなくなるし…（汗））

邂逅

龍の背中に乗せられて揺られる事数分。

姫様たち一行は氷塔の最上階にたどり着いた。

「凄く広いのねー」

感嘆の声を上げたのはラグネイア。

「若干呼吸が難しい気がするのですが…」

「それは恐らくここが高所だからだろう」

「……………（コクン）」

兵士と言う肩書きも持っているセラティアは行軍で高山に登ることもあるため適切な答えを返す事ができたのだ。

決して、シャーレヴィヒが無教養と言うわけではない。

四人がふと後ろを見ると自分たちをここまで運んできた龍族の姫君達がいなくなっている事に気が付いた。

「あの人たちは何処に行っただのかしら」

周りを見回すシャーレヴィヒ。

すると二人に近づいてきたのは美少女だった。

「それは私たちの事だよ」

「……………気が付かなかったの？」

首を傾げるラーテール。

「凄く女性として負けている気がする…」

セラティアががっくりと膝をついた。

セラティアが落ち込むのも無理は無い。

ラィティレは腰まで伸びる長い銀髪を持ち、結構な年月の経験を積んでいるにもかかわらず顔の作りは何処かあどけないもので保護欲をそえられる物だったからだ。

一方のデュィシールはこちらも長い紅髪を持っている。

どちらかと言えば妙齡の美女と言った風である。

そんな二人を前にしては、大国有数の美（少）女である姫たちも引け目を感じてしまうのは致しかたないと言う事もないのだが。

そんな美女たちから目を逸らした付き人ソルは改めてフロアを見渡した。

部屋は長方形といえる。

中央に延びるカーペットの様な物の両サイドには氷柱がいくつも立っている。

さながらRPGのボス戦の部屋である。

自分で言ってみてRPGとは何なのだろう…とソルは思わず考え込んでしまった。

「こつち…案内する」

「我らに付いて来るとよい」

龍人の二人に付いていく五人。

驚きと賞賛の声を上げながら歩くラグネイアが何かを発見した。

「この柱…凄く精巧だね！」

ラグネイアが指したのは中央の紅い道の両サイドに立っている氷柱である。

「ああ、それは勿論…」

「だって本物だもの」

デュールが言葉を取られて膝をついたが誰もその状態には反応しなかった。

ラッテールの言葉はそれほど強力だった。

「え？この柱の中の人の像って…本物なの！？」

「ありえせんわ！」

「この像は私に似ている気がするな…」

それぞれが似通っているような似通っていないような反応を見せる中更に爆弾発言が飛び出した。

「そこにいるのはかつての大国の姫君。

主様の元へ嫁がされた哀れな姫君。

貴女達は違うのかしら？」

ラッテールが詠うように言った。

四人は青褪めていた。

かろうじて青褪めはしなかったものの、ソルの表情も硬い。

「ふむ…違うようだな。

ならばここから降ろすか？」

「無理。もう連れてきてしまったから。

それに来たいって言ったのは彼女たち。

私達の意志ではない」

「むう…しかしだな、」

「しつこいよ、シール。瑞樹様に言いつけるから」

「それは勘弁しとくれ。瑞樹様に嫌われるのは御免だからな」

「じゃあ黙ってて」

どうやら力関係は見かけとは裏腹にラ＝テールであるようだと言う事を五人は感じ取った。

「着いた」

ラ＝テールの言葉で顔を上げた五人の人間たちは驚愕の表情を浮かべた。

そこにあつたのは、他の柱の数倍は太い氷の柱。
そこに凍っているのは、人間。

デュ＝シルとラ＝テールが火を噴いた。
溶けていく氷。

それでも少しずつしか溶けない。

「あれを！」

シャーレヴィヒが気が付いた。

閉じ込められている男の眼が開いた事に。

「嘘……！」

「……………！」

「何……だと……」

五人の前で、氷が弾け飛んだ。

氷が急速に溶けていった影響で水蒸気が上がった。

水蒸気が晴れていったそこにいたのは、少年だった。

人間的年齢で言えば17、18と言ったところだ。

そんな少年が五人を見た。

「あつ……」

最初に声をあげたのはシャーレヴィヒ。

見てしまったのだ。

少年の瞳の奥の暗闇を。

それは何も見えない漆黒の闇。

「なっ！」

次に声を上げたのはセラティア。

少年の表情は変わっていた。

何処かモノを見る眼だったその目はギラギラと輝き、表情は何処か冷笑を貼り付けた物に。

場を沈黙が支配した。

唐突に少年が口を開いた。

「シール、テルル、今度の生贄は彼女たちかい？」

何処か嘲りをこめて――その嘲りが誰に対する物かは本人以外には分からなかったが――それでいて何処か五人を哀れむように見るその眼に五人は心を動かされた。

幼い。

声はどこか大人に変わるかわ変わらないかと言うくらいに幼さなのに、その奥にある心は深すぎて、重すぎて誰の手に負えるものでもなかった。

「瑞樹様…… / / /」

テルル、と呼ばれたラッテールがトコトコと近寄っていき少年に撫

でられている。

場を沈黙が支配した。

邂逅（後書き）

主人公登場です！

時間が掛かったなあ…。

更新のくだりは前書きで説明させていただきましたが、概ねそんな感じで進めていく予定です。

お気に入り登録してくださった方有難うございます。

いつも見てくださっている方も有難うございます。

評価、批評、感想、誤字脱字などお待ちしております。

座談会（前書き）

二日にいっぺんになりました。

座談会

「あーっと…自称英雄です」

そんな少年の一言から始まった。

今彼らは円を作って座っていた。

さながら花見に來た会社員たちの集まりである。
勿論この世界にオフィスワーカーはいない。

彼の両脇を固めるのは龍姫。

「またまた瑞樹様、ご謙遜を… / / /」

ラ「テーレはまだ頭を撫でられている。それが満更でもない、むしろ喜びに満ちた表情で頭撫で撫でを受けている表情を見れば誰かがいらだつても仕方のない事であろう。」

周りの人が「今のつて自己紹介!？」とツツコむ間もなく話を進める。

「他の皆は自己紹介はしたのかい？」

少年―瑞樹―の言葉に首肯する一同。

「じゃあ、そこらへんのお姫様達に自己紹介願おうかな。」

俺はいなかったし」

「巨神国・カルバディアノス第一皇女、セラティア「アイラス」カルバディアノスだ。」

英雄の名は数百年たった今も語り継がれている。会えて光栄だ」

武人である事を象徴するかのような無骨な挨拶だったが、特に瑞樹

はそれを咎める事はしなかった。

「巨神国って、何？神様住んでるの？」

「いや、そんな事は。現在の城が建っている場所にかつて巨大な謎の建造物があったのが起源らしい」

瑞樹はしばらく唸っていた後、頷いた。

「ああ！そんなところに置きっぱなしにしてたのか。激戦で使い潰しちゃったから捨てただけだ。今も残ってる？」

姫たちは啞然とした。

「使った！？あれは使うものなのか？建物ではなかったのか？」

啞然としながらも質問をぶつけたセラティアに対して瑞樹は答えた。

「そうだよ。アレの正式名称は魔導神器カルバディオスって言うんだ。

この大陸で一番最初に作られた魔道具さ」

シャールヴィヒが合点のいったかのように手を叩いた。

「ああ、それで。ですからセラティアの国は名前がカルバディアノスですね」

「カルバディオスとカルバディアノスか…。ならば初代皇帝は知っ
ていてもおかしくないではないか」

話が長引きそうだと感じた瑞樹はそこで話を区切った。

「次の人」

次の人はシャーレヴィヒだった。

「太陽国・ソルディバイト第二皇女、シャーレヴィヒ」ツヴェルノス「ソルディバイトですわ。」

英雄様。どうぞよろしくお願いいたします」

周りの姫が「何をよろしくするのだろう」と考えていたが思いつか
なかった。

ただ一人、ラッテーレだけはその意味を正確に理解し龍をも射殺す
眼で睨みつけていたが。

「ソルディバイトって言えば…大陸の中で一番最初に朝が来るんだ
つたよね」

「はい！ご存知だったんですね？」

瑞樹が勿論、と笑みを浮かべて言った。

どうやらこの少年女誑し…というよりジゴロであるようだ。

「そうですね、ソルも紹介しておかなければ。ソル？」

シャーレヴィヒに呼ばれて出てきたソルを見た瑞樹は固まった。

「君は…ソルディバイトの人じゃないね。」

もしかしてジパオンの人じゃないかな」

「ジパオンはソルディバイトが吸収しましたが？」

シャーレヴィヒの言葉を聞いた瑞樹は傍目からも分かるくらい落ち
込んだ。

「そつだよ…分かってたさ。」

幾ら俺が国を治めていたとしても当の俺がここにいるんだから滅

びてもおかしくなかったんだよな」

ジパオンは他の国とは全く異なる独自の文化を持っていた国である。しかしソルデイバイトとの戦争の結果敗北し領地は吸収されたのだ。もちろん英雄の国だとは誰も知らない。

「そんな！ジパオンは英雄様の国だったのですか？
私たちは何ということをして…」

落ち込むシャーレヴィヒを宥める瑞樹。

「心配しないでシャル。ちゃんと取り戻すから」

その時瑞樹の表情に一瞬空虚が過ぎ去ったのが見て取れた。

「取り返すということは…戦争でもなさるのですか？」

「どうだろうね。もう飽きたけど戦争は。」

まあ必要になったらソル…だっけ？に協力してもらうから、お願いね」

ソルはシャーレヴィヒのほうを見て許可を得た後首肯した。

「そう言えば、シャル、でよかったんだよね？」

シャーレヴィヒって言うのは長すぎて」

「構いませんわ。むしろ親しみをこめていただいたほうが嬉しいですよ。」

神様もよろしく願いしますわね」

若干シャルの言っている事が理解できなかった一同だが、シャルはそういう人だと思い直して気にしない事にした。

「それで君は？」

尋ねられたのはラグネイア。

「私？えっとラグネイア。ルクシエリア。アシメダイアよ。
出来ればラグネって呼んで欲しいわ」

「ルクシエリア？……ああルクシエリア姫の娘か！
姫は元気かな？」

フランクになった瑞樹に対してラグネイアもフランクに返す。

「おかーさんはもう死んじゃったよ。幾ら天使族といっても瑞樹さんみたいに長生きではないもん。」

あ、瑞樹さんでよかった？」

瑞樹は「構わないよ」と返してしみじみと呟いた。

「そうか…ルクシエリア姫は約束を護ってくれたのか…。
相手はアシメダイア国王だろ…？あのおっさんか」

仮にも大陸の四分の一の王であるアシメダイア王をおっさん呼ばわり出来るのは英雄だけである。

「おとーさんのこと知ってるの？」

「そりゃあ知ってるさ。元々ルクシエリアは俺の嫁だったんだから」

衝撃の一言。

再び一同は啞然となった。

ラ。テ。ー。レ。に。至。つ。て。は。瑞樹様の嫁は私だけ瑞樹様の嫁は私だけ瑞樹様の…」と壊れたテープのように繰り返している始末である。

ラグネイアは笑って済ませた。

「あはは…それにしても王様と英雄に奪い合われるなんてお母さんも果報者だね〜」

「それで君はやっぱり翼を？」

「うん、あるよ〜」

そう言ってラグネイアは黒と白の翼を広げた。

この中の何人かは見るのが初めてなので驚いていた。

「ほお…」

とはデュ＝シール。

「綺麗…悔しいけど」

とはラ＝テール。

「便利だな…」

とはセラティア。

「欲しいわね…」

とはシャル。

「やっぱり魔族と天使族の血を引いたら半々になるんだな」

瑞樹が呟くとラグネイアははにかんだ。

「えへへ／＼かっこいいでしょ？」

そうだな、と瑞樹は返し残りの一人を見る。

「君は……………ッ！」

突然気が触れた瑞樹はアリアの肩を揺らした。

「君は、話せないのか!？」

頷くアリア。

両手を籠につかまれた瑞樹は元の位置に戻る。

周りの姫は何が起こったのか思考が追いついていなかった。

そんな中瑞樹がつぶやいたのは衝撃的な一言だった。

「ざまーみる…お前らが悪いんだ」

「瑞樹様!？」

「えっ!」

「なッ!」

驚くギャラリーを他所に言葉を続ける。

「お前らが…俺の愛天使イスラフェルを殺したりするから…」

声は出なかったがアリアの思考はパニックになっていた。

殺した…？

教義で最高の敬うべき天使であるイスラフェルを？
私の先祖が？

「何処の国って言ったっけ…」

セラティアとシャルが止めようとしたがもう遅かった。

「イスラフィールだよ？」

答えたのはラグネイア。

その瞬間、辺りは重い空気が漂った。

「そうか…忌々しい事に上っ面だけは崇拜してるってか。
いいぜ…絶対に滅ぼしてやる。」

待ってるよイスラフィール教国枢機卿!」

その時の瑞樹の形相は、魔王よりも魔王らしかったという。

座談会（後書き）

何かハーレム成分が分泌されない…。

お気に入り登録有難うございます。

誤字脱字指摘、感想、評価お待ちしております。

嘆願（前書き）

2日にいっぺんの更新になったのは書くのに一日、誤字脱字チエツクに1日を要しているためであります。

感想批評などどんどんお寄せください。

また、評価・お気に入り登録してくださっている方有難うございます。

嘆願

瑞樹はイスラファエルについては語らなかった。

また、場の空気からNGワードだと判断した全員はイスラフィールという言葉を使わないようにした。

憎悪に覆われてしまった場の空気を入れ替えたのはデュ＝シールだった。

「ま、まあ主も大分調子を取り戻してきたようじゃしそろそろ用件を話したほうが良いのではないか？」

瑞樹は黙っている、というより改めて姫たちを観察している。その瞳には生気が感じられなかった。

「わが国で流行している奴隷売買を止めて欲しいのだ」
こついう時に最初に発言出来るのはやはりセラティアだった。

瑞樹の眉がピクつと動いた。

「奴隷……？」

そこからセラティアは自らの国で見た事を正確に説明していった。奴隷売買を止めようと市場に飛び込んでいった事や父王に嘆願した事、それを一蹴されてしまった事などなど。

それを聞いて瑞樹が放ったのは一言。

「カルバディアノスも堕ちたもんだな」

「——っ！」

セラティアも分かつてはいたのだ。

現在大陸において奴隷売買が許されているのはカルバディアノスだけ。

魔人族にはそもそも奴隷という存在となりうるものがそもそも居らず、太陽国も善政を敷いている現国王によって数十年前に死罪付きの法令で決められ、今は奴隷商がない。

また、イスラフィール教国も天使様の前にはわれらは皆平等であるという教義のもと奴隷階級は存在しない。

唯一教義に反する魔人族はそもそも国内に入る事を禁じているので入る事はない。

勿論魔人族の民も入ろうとは思っていないのであるが。

カルバディアノスが武力国家、と賞賛と共に侮蔑の意を込められているのはこれが原因である。

国の成り立ち上武力に傾倒しているカルバディアノスは兵士の数が国民の大半を占めている。

近年法整備がようやく一段落したばかりの、国としては後進国であるのだ。

「しかしそれならギルドに頼めばいいんじゃないか？」

瑞樹が思い出したように聞いた。

「ギルドは動いてはくれたのだが…私が皇女である故に国に刃を向けるのではないかと疑われてしまって。更に基本国政に干渉の立場のギルドだから国とはかわりたくないというのが本心だろう」

瑞樹は傭兵ギルドの存在を知っていた。

それは彼がギルドの創始者であるからに他ならない。

ギルド内戒律を定めたのも瑞樹。

セラティアのこの発言に、瑞樹はギルドを回している現在のギルド長を心の中で賞賛したのだった。

傭兵ギルドは種族に関わらず加入可能な組織である。

傭兵ギルドに登録された場合、大陸中における身分が証明される。

入国も自在に可能であり、余程のことが無ければ関所で止められる事もない。

但し、国の関係からある特定の種族の傭兵が入れない国は存在するのであるが。

傭兵ギルドの規模は一国のそれに相当する。

故に発言力は他国の代表と同じであり、組織には国は不介入でその逆もまた保証されているのである。

ふと顔を上げるとデュゥシールが瑞樹を見ていた。

その視線の意図を悟った瑞樹はセラティアに答えた。

「まあやってやらない事もないから考えておくよ。じゃあ次」

次に身を乗り出したのはシャルだった。

「瑞樹様！私を瑞樹様の下へ嫁がせてください！」

場は固まった。

ラグネシア、セラティア、アリアも思考が追いついていない。

デュゥシールは笑みを浮かべたがラゥテールからの殺視線によって表情を能面へと変えた。

そのラゥテールは殺視線をシャルへと向けている。

当の本人である瑞樹は何も言わない。

数分の間を置いて、瑞樹が答えた。

「いいのかい？最終的にはあぁなってしまうのかもしれないんだよ

？」

穏やかな表情で後ろの氷柱を指す。

一面に聳え立つそれはかつての彼の妻、と呼べる人たちの墓標だった。

「構いませんわ。出来れば瑞樹様と幾百年も一緒にいられたら嬉しいとは思うのですけれど。」

そういうわけにもいかないのでしょうか？」

瑞樹は首を横に振った。

「可能だよ。でもそれは人間として生きる事を止める事になる。」

だから彼女たちには今までその道を選ばないようにと繰り返し進言してきたんだ」

穏やかな、それでいて悲しげな表情を浮かべる瑞樹を見たシャルの表情に変化が生まれた。

「シャル？」

ラグネシアが呼びかけたときシャルは瑞樹を抱きしめていた。

ラ＝テレーが喚いているのだがそれをデュ＝シールが押さえつけている。

シャルの目からは涙が零れ落ちていた。

「そんな悲しそうな顔をしないでください。」

私が一瞬惚れをしたあなたのそんな顔は今は見たくありません！

私と一緒にいますから……」

抱きしめていたシャルが顔を瑞樹の胸に埋めて泣いた。

瑞樹がシャルの頭を撫でる。

それを眺めていた他の姫たちには様々な表情が浮かんでいた。

―どうしてそんなに一途なの―
―出会ったばかりなのに―
―あんなシャル見た事ない―
―…羨ましい―
―わしも後で―

一部シャルに対するものではない欲求が吐き出されていたがそれを咎める者はいなかった。

これが、太陽国第二皇女シャーレヴィヒの持つ感受性の豊かさなのであるがそれを知っているのは太陽国の彼女と交流のある一般庶民と侍女のみである。

シャルが落ち着いたのを確認した後瑞樹が静かに告げた。
「分かった、シャルの願いを聞き入れよう…。
いや、僕もそれを願おう」

こうして太陽姫と英雄の婚姻が成立してしまったのである。

嘆願（後書き）

何だか急展開www

シャルのような女の子いたらエエなあ…。

前回の話の件でシャーレヴィヒを地の文含めて全部「シャル」に統一しましたが、違和感を覚えたので次からは地の文は「シャーレヴィヒ」とします。

なお主人公の瑞樹君は普段は穏やかな人柄なのでそこをお忘れなきように…。

厭世的じゃないな…塔に引きこもっている時点で結構世間離れしていると思うんですが…

複雑な姫の恋心（前書き）

前話で多少急展開に持っていったしまったシャーレヴィヒの件を若干補完しています。

決してヒロイン内での比重がシャルに重きを置いているわけではないです。

複雑な姫の恋心

幼い。

シャーレヴィヒが初めてその”英雄”を見たときの第一印象だった。体の大きさを見る限り王立の魔術学校や騎士学校に通う子供たちと大して変わらない。

年齢的には十七歳位といったところだろうか。

少年…青年と言えるくらいの年齢に到達している瑞樹は分不相応な大きさのマントを羽織っていた。

凍り漬けになっていたときの彼の寝顔にシャーレヴィヒは愛しさを感じた。

ところがそれは彼が眼を開いた時に一変した。

黒い瞳。

単純な瞳の色ではなく、吸い込まれそうなくらいに奥が深くて見えない黒さ。

シャーレヴィヒはかつての暴政を敷いた王の瞳に同じ物を見た。

その瞳は——狂気——。

恐ろしい。

彼女の第一印象だった幼いというものはどこかに消えてしまった。無論体の大きさが突然変わったわけでもない。

体のパーツそれぞれの造りが変わったわけでもない。

今やその瞳から溢れ出ていた狂気は全身から滲み出していた。

そんな彼の表情は、シャーレヴィヒが見ていたときとはまた異なっ

ていた。

狂気から、獲物を狩る眼へと。

小さな体——とはいっても然程シャーレヴィヒたちと変わらない——でありながら、数倍の大きさの魔獣ですら狩ってしまいそうな恐るべき強さ。

武器が強いわけではない。現に瑞樹は武器を持つてはいない。

肉体が強いわけでもない。見るだけで分かるその華奢な体。

強いのは…その精神こころだと。

ふと考えるのを止めて瑞樹のほうを見るとその表情は満面の笑み、というには程遠かったがラグネイアやセラティアとの会話で大分打ち解けているようだった。

時折見せる憂いを帯びた表情が気にはなったが、シャーレヴィヒは会話に混ざっていった。

瑞樹が表情を一変させたのはアリアを見たときだ。

シャーレヴィヒだけでなくほかの二人も気が付いたであろう彼の表情。

能面と化したその後の憎悪。

（狂気なんてお飾りだった！本当に恐ろしいのは純粹な憎悪…。でもどうしてアリアが…？）

事情を知る由もないシャーレヴィヒに分かるはずもなく、勿論他の二人も分らない。

龍人の二人もよく意味が分かっているようだった。

結局それから瑞樹がアリアを睨み続けたため、小休止をとることになった。

全員の紹介が終わり、瑞樹も休憩を取ったためか大分落ち着いているように見えた。

落ち着いているようであるが、それはきつと無関心でいることに決めたのだろう、とシャーレヴィヒは考えた。

そしてようやくここに来た目的を話し始める。

セラティアが話し始めたころは聞き流しているようにも見えたが、『奴隷』という言葉に体がピクつと動いているのを見ることが出来た。

表情は見えない。

意図的に隠しているのかもしれないが、もしかしたらそれが素の表情なのかもしれないとシャーレヴィヒが考えているとセラティアが話を終えた。

「カルバディアノスも堕ちたものだな」

瑞樹の表情には何も浮かんではいなかった。
能面のような表情の中にあるのは侮蔑、憐憫、どれをとっても負の感情であると思えない物ばかりだった。

セラティアに対してギルドに働きかける事を勧めたのを聞いてシャーレヴィヒは疑問に思った。

（瑞樹様は長い間氷の中に籠っていたのではなかったかしら。どうしてギルドの事を知っているのでしょうか…）

何時の間にやら自分が瑞樹様と呼んでいる事に気が付いていないシャーレヴィヒであったが彼女には些細な事であった。

そして自分の番が来る。

先ほどのセラティアの話のおかげか瑞樹は話を聞いてくれるようだった。

「瑞樹様！私を瑞樹様の下へ嫁がせてください！」

どうしてそんな事を言ったのかは彼女自身も分からなかった。

氷柱を見たときからなのか、それとも瑞樹のその漆黒の瞳を見たときなのか。

色々国のことについて相談しようと思っていたのに結局飛び出したのは自らの事だった。

しかし自分の言った事に対してどこか安堵している自分がいることに気が付いた。

周りを見ると瑞樹以外のメンバーは皆啞然としていた。

当然のことだろう。

出会ってからまだ一日も経っていないのだから。

その後の瑞樹のこれを是とする答えにも驚かされたが。

人間として生きるのを止める事になる、と瑞樹が発言したときの顔は淋しげだった。

また、シャーレヴィヒは自らの行動を止められなかった。
瑞樹を抱きしめていたのだ。

瑞樹のその眼は見たことがあった。

それは彼女がかつて溺愛していたソルディバイトの第三皇女、セシリアが見せた物と同一だった。

彼女は病に負けて亡くなってしまった、シャーレヴィヒの妹。
最期の瞬間にも立ち会えなかった父と義姉。

父に最後まで仕事を回し続けていた義姉に怒りを覚えたのはそれが
最初で最後だった。

セシリアが見せたのは、諦め。

父親と義姉が来ないことへの諦めはついてはいたのだろうが、それ
でも納得のいくものではなかっただろう。

結局最後まで諦観していたセシリアの胸中を察するのは容易な事だ
った。

そしてそれと同じ表情を見せられたシャーレヴィヒ。

嘗ての時は自らの器が足りず、慰められなかった妹。

今ならばもしかすると――

彼女は、瑞樹を慰めることが出来るのかもしれない。

再び見たときの彼の表情は穏やかなもので、シャーレヴィヒを初めて
認識した。

有象無象とは違う、個人として。

そんな彼をシャーレヴィヒは、愛しい、と感じたのだった。

複雑な姫の恋心（後書き）

ハーレムじゃなくなりそうですね…（汗

一応ハーレム要素はありますからその辺りはご心配なく。
シャルさんの別面からの部分描写でした。

お気に入り登録・評価有難うございます。

いつも見てくださっている方、有難うございます。

感想、批評、評価お待ちしております。

何分拙い筆であります、これからもよろしく願います。

嘆願―続き―（前書き）

話が進みませんね…。そろそろ塔での件を終えて次に向かいたいの
ですが。

次くらいには終われそうです。

嘆願―続き―

「えっと…じゃあラグネイア？お願い」

一時の間をおいて復活した瑞樹。

両脇にはラ＝テールとシャーレヴィヒ。

俗に言う両手に花状態であるのだが、その麗しき花たちは火花を散らしている。

ラ＝テールが火花を散らしているのは瑞樹を盗られそうになったからというのもあるのだが、もう一つの理由として瑞樹の様子に対して敏感に反応したシャーレヴィヒを認めているからである。

自分ができなかった事をシャーレヴィヒがした。

その事実を心の裡で認めてしまっているが故の自らに対する葛藤などが混ざっているのである。

勿論、瑞樹は他人の心を読む事は出来ないのでシャーレヴィヒの行動の本当の意味も現在ラ＝テールが荒れている理由も分からないのであった。

とりあえず目の前の状況から脱するためにラグネイアに話を振ったのだった。

「私のお願いって言うのはアリアの国との戦争を止めて欲しいって事なんだけど…」

その言葉に瑞樹が笑顔になった。

「それはいい！俺の願望と見ているところが一緒だからな、絶対に叶えてあげるよ」

それは暗い笑み。

好戦家がよく戦場で浮かべる笑みであった。

その表情の意味を一寸間をおいて理解したラグネイアは慌てて首を振った。

「違うよ？戦争を止めて欲しいとは言ったけど、アリアの国を滅ぼしてなんて頼んでいないからね？」

瑞樹がキョトンとした顔をした。

所謂『え？こいつ何言ってるの？』という顔である。

「結果的に国が無くなれば戦争に脅える必要もなくなるんだから一石二鳥だよ。

俺は強いから心配は要らない」

ラグネイアはもう何を言っても無駄だと悟り、これ以上言うのを止めた。

ラグネイアと瑞樹がずっと自分の故国を滅ぼすか否かという話し合いをしているにもかかわらずアリアは龍―デユ―シールの娘―と黙々と戯れていた。

「それで…」

瑞樹がアリアに視線を向けた。

瑞樹がアリアの願いを叶えることは無いだろうと皆が思っていた。

「お前の願いは、声が出せるようになる事か？」

瑞樹が訊ねた。

頷くアリア。

「却下だ」

にべも無く却下されてしまったが、アリアは特に気にしてはいなかった。

その時立ち上がったのはやはりというか、セラティアだった。

「何故だ！確かにアリアの国が英雄殿の関係者を害したのは事実かもしれないが、アリアは関係ない！」

また、場の空気が重くなった。

瑞樹が腹の底から声を出した。

「関係ない……？関係ないだと……？今何て言った？」

瑞樹がセラティアを見る眼は敵を見る眼であつた。

気迫と表情に気圧されながらもセラティアは言葉を発した。

「アリアには罪は無いと言ったのだ、英雄殿！」

瑞樹が、冷静に荒れた。

「関係が無いわけがない。」

俺がこの世界に飛ばされてから約百数十年を共にしてきた俺の愛すべき妻だ。

アリアが話すことが出来ないのは俺がイーリアにかけた魔術の結果だ。

それを受けたという事はまごう事なくアリアが罪を受けるべき存在の一つである事に他ならない。

アリアに罪が無いというのであればその魔術は他の人間にかかっていたはずだ。

それ以外にアリアがこの呪いを受ける理由など無い」

言葉は静かに放たれた物だったがそれと相反するかのようになり重みを持っていた。

もはや誰にも言い返すことなど不可能だった。

瑞樹の漆黒の瞳は水気を帯びていたから。

嘆願―続き―（後書き）

第一章は塔での件が終わるところまでです。

お気に入り登録、評価ありがとうございます。

いつも見てくださっている方も有難うございます。

動き出した時間（前書き）

遅れてすみません。

動き出した時間

涙を拭った瑞樹はおもむろに立ち上がった。

そして瑞樹はこれまでの伴侶たちのもとへ向かった。

一つ一つの氷柱を前に声を掛けていく。

座り込んだままの四人はその状況をただ見ていた。

「ねえ、彼は何をしているのかな」

ラグネイアがボソボソと言った。

「さあ…何かの儀式でしょうか。」

もしかしたら私のことを紹介してくださっているのかもしれない
ん」

ご機嫌なシャーレヴィヒが答えた。

「シャル、もう少し恥じらいとか持つべきではないのか？」

「そうです、お嬢様」

ソルとセラティアに窘められたシャーレヴィヒは床に「の」を書き
始めた。

とりあえず皆シャーレヴィヒを無視した。

やがておよそ七十ほどの氷柱を全て回った瑞樹は瑞樹たちのいる大
広間の中央に立った。

—福音の塔は永久に在りし—
—天と共に在りし彼の塔は—

―天啓を得し者の―
―今一度の介入を―
―許したまえよ―

瑞樹が詠った。

「聖歌？いや、賛美歌？いや、神言！？」

神言とはその名のとおり神の言葉である。
古代術式などを用いるときに多く使われるが、もともとは形式的なものである。

その時ピローナスクが揺れた。

「うわっ」

「きゃっ」

「姫様！」

「！」

順にセラティア、シャーレヴィヒ、ソル、アリアである。
ラグネイアは浮遊していた。

二龍も同様であった。

一足先に状況を確認したラグネイアが声をあげた。
「外壁が崩壊していつてる！早くここを出ないと！」

一同が頷く。

シャーレヴィヒは揺られながらも自らの足で瑞樹の下にたどり着いた。

瑞樹は一瞬驚いたような顔をしたがシャーレヴィヒの手を握った。

また一同は驚愕した。

瑞樹の背中から翼が現れたのだ。

二龍も知らなかったらしく他と同様の反応を見せた。

瑞樹が何かを呟いた。

それは近くにいたシャーレヴィヒですら聞き取ることとは出来なかったが恐らくはそこにいた姫達への旅立ちの合図であったのだらうと考えた。

そして彼らが塔の上に飛び上がったとき氷塔は崩れ落ちていった。

後に「神の頂の喪失」と呼称される事になる出来事だった。

空に集まった一同に対して瑞樹は告げた。

「歩いて、カルバディアノスに向かおう」

こうして旅のとりあえずの最初の目的地が決まった。

動き出した時間（後書き）

第一章終了です。

お気に入り登録、評価 e t c 有難うございます。

とある諜報員の手記（前書き）

自分でのまとめた意味を持たせてあります。

とある諜報員の手記

地理的要項

アルベダイド大陸。

山岳地帯や溪流地帯など自然に恵まれている大陸である。

外海に出ると他の大陸が見えるのだが、他の大陸はいずれも魔族の棲家となっているため基本的にこの大陸での生活が主な物となっている。

丁度大陸を四等分するかのように流れる川が二本。

西部から東部にかけて流れるアイギス川と、北部から南部にかけて流れるクリペウム川。

大陸中央部にあるのは中央山脈といわれる山脈。

山脈の中で最も高い山がゴーズニール山である。

クリペウム川とアイギス川の起点がある山である。

近年は洞窟工事で交通を活性化しようという動きがあつたが、現在のところ完成の目処は立っていない。

そのゴーズニール山の頂上にあつたのが氷塔・ピローナスク。

略称としてその周辺の地域一帯をピローナスクと呼ぶ事もあるが、実際は塔の名前である。

歴史的要項

アルベダイド大陸の成り立ち自体は諸説ある。
最有力説は神の贈り物というものである。

その昔、魔族が大陸を跋扈していた頃人間族などの力関係における圧倒的な敗北者達は成す術もなく殺戮されていた。
そんな中、ある日突然大陸中央部に巨塔が現れそこから五人の人間族が現れた。

英雄、戦女神、神導術師、魔導術師、魔人。

これらの敬称は後に市井で流行ったものである。
これまで圧倒的優位だった魔族はたった五人の人間族に敗北を喫し、大陸の外へと追われた。
その後五人は自然環境を利用して大陸を四等分に統治。
ただ一人、英雄と呼ばれたものだけはその後表舞台に立つ事はなかった。

<アルベダイド英雄伝

〈序章・五戦記〉より抜粋〉

現在は小国が乱立する状況ではあるが、それぞれの領域を仕切っているのは先の四国。

半独立領とも言える。

軍事的援助を受けたり資金援助を受けたりして国を成り立たせているところも数多く存在する。

登場人物

瑞樹Ⅱアマゾナイト

この物語の主人公。

アルベダイド大陸英雄伝の主人公でもある。

社会遠ざけ型の人間であるが決して非社会的ではない。

風貌は16〜17程度。

幼さの残る顔立ち。黒髪黒瞳。

アマゾナイトは敬称。ゴーズニール山で産出される宝石・アマゾナイトから採られたもの。

別世界の地球において言えばホープストーンと呼ばれることもある。和名・天河石であることから、本名は天河石 瑞樹であると考えられる。

滅びた国・ジパオンの元王。

セラティアⅡアイラスⅡカルバディアノス

カルバディアノス第一皇女。

皇女でありながら兵隊と共に戦場を駆けるその姿を人は戦女神と呼ぶ。

そんな武人的要素を持ちながら、年齢相応な姿を見せる事もある。一本気なところがある。

他国の姫と比べると若干脳筋。

アッシュブロンドの髪と碧の瞳を持つ。

シャーレヴィヒⅡツヴェルノスⅡソルディバイト

ソルディバイト第二皇女。王の妾の娘。

穏和な性格で、民からの支持は厚い。

天然ではない。むしろ若干策略家。

魔導術が使える。

その能力は義姉のレティアⅡアイベルセスⅡソルディバイトを超える。

親しい従者が二人いる。

燃える様な赤髪に落ち着きを与えるような蒼い瞳が特徴。

アリアⅡサンクテットⅡイスラフィール

イスラフィール教国の姫。

幼い頃の出来事によって言葉を発することが出来ない。

沈黙の聖女と呼ばれる。

黄金の髪と瞳をもつ美姫である。

神導術を使えるはずなのだが、祝詞を発言出来ない為効果が通常より過分に薄くなってしまふ。

ラグネイアⅡルクシエリアⅡアシュメダイア

アシュメダイア連合のセックスシンボル（笑）。

連合の姫。

黒髪が特徴。翼は黒と白のデュアルウイング。

魔術が使えるはずである。
魔術と魔導術は異なる物である。

「ふう…あの人たち観察していて飽きないな」

「姫様を監視しようとする不逞な輩は切り捨てます！」

「……………」

「何でしょうこれは…？姫様たちの個人情報！？あの者はやはり何処かの諜報員だったか…」

とある諜報員の手記（後書き）

要点を簡単に抑えてみました。

馬車生活（前書き）

第一章始まりました。

今話は瑞樹視点でお送りしております。

馬車生活

《瑞樹「アマゾナイト」》

「はあ……」

俺はもう幾度となく吐き出している溜息をまた吐いた。

俺の住む城、ピローナスクを魔導陣の解除で自然に還元してしまったからと言うもの、後悔がずっと俺を苛んでいる。

何に後悔しているかと言えば……全てだろう。

まず塔をぶっ壊したから俺の住むところがなくなった。

俺を愛してくれた女達は皆昇天されているのかどうかも気になる……つ。

もう一つはあの集まりだったかの時に俺と婚約宣言しやがったあの出来事。

「おかしい……俺は明らかに割を食っている……？」

そもそも俺の寵愛するテルルとシールがあの女達をどうして追い返さなかったのかって言うところだ。

「あいつらがちゃんと働いていれば今の状況にはならなかったのにな……」

御者台にいるのは瑞樹である。

馬車はシャーレヴィヒが乗り付けたあの馬車をそのまま全員で使用していると言うわけである。

もちろん龍の二人？は人の形を取っているためスペースに何ら問題はない。

瑞樹が馬車を運転できるのは単に経験の賜物と言うところだ。

「いつだったか…どつかの国の爺が教えてくれたんだっけ」
あの爺はどうなったのか気にはなったが些細な問題であった。

しばらくするとピローナスク地方を出る旨の看板があった。

街道の整備をするのはそれぞれの国である。

それ故、国ごとに特色のある街道が出来たりする。

例をあげてみればカルバディアノスの石畳街道。

適当な間隔ごとに国旗が描かれていて、一時期にはその絵を踏んだ者を不敬罪として処罰していたなどという事例もあったので中々実用的な例とも言えるだろう。

ピローナスクは何処の国の所有でもない。

故に街道はそこまで整備されてはいない。

瑞樹が調子に乗って作った黄金街路と名づけられたその道は、相次ぐ盗賊などによって金を完全に剥がされてしまった。

瑞樹はその時に盗賊の後ろ盾になっていた国を幾つか世代交代させるといふ暴挙を行ったが。

「暗くなってきたな…」

既に日は水平線に沈み、辺りは段々と闇に包まれている。

「シャル？村はこの近くにあるのかな？」

今のところ最も瑞樹に近い（と瑞樹が思っている）シャーレヴィヒに訊ねた。

「そうですね…セラ？どうかしら」

「いや、ないな」

「だそうですね」

「分かった、ありがとう」

セラティアの声を軽く聞き流して馬車を進める。

残念な事に数十年以上塔に籠っていた瑞樹はコミュニケーション能力が確実に欠如していた。

瑞樹自身それを自覚していたため、窓口をシャーレヴィヒとすることでは話をしていた。

「ところで…」

瑞樹が左を向いた。

御者台には実は二人居たのである。

「何でしょうか、瑞樹様」

瑞樹のほうを向かずには答えたのはシャーレヴィヒの従者、ソラである。

「いや…中に入らなくてもいいのかなと」

「ご心配有難うございます。しかし特に問題はありませんので」

「……それならいいんだけどね」

おかしい、シャーレヴィヒに聞いていたことと全く違う。

確か彼女は頼れる姉貴分でしかも優しいと言っていたのに、実際はクールとかそういうレベルの人である。

馬車に乗り始めて数時間が経っていたが馬車の中と異なり御者台は沈黙が支配するという温度差が発生していた。

瑞樹の拙いコミュニケーション能力を最大限使用して得られる効果

が先ほどの対話レベルである。

瑞樹は既にハートブレイクしかかっていた。

「瑞樹様は…」

ボツリとソルが洩らした一言を聞いて言葉の続きを聞こうと耳を澄ませた。

「どうして…私を選んだのでしょうか？」

瑞樹はしばらく考えて、談話の時に言っていたジパオン領奪還の件だという事に気がついた。

「何故かって？ソルさんはジパオン系の血を引いている様だし、多分協力してくれるんじゃないかって、そう思っただけ」

「そうですか…つまらない質問で申し訳ありません」

瑞樹は謝られた事に動揺していた。

普通の人ならばここで軽く笑って流すのだが、如何せん瑞樹である。考えに考えた瑞樹が出した答えは代案を出す事だった。

「じゃあさ、俺に敬語使うのは止めてくれない？何だか慣れなくて」

瑞樹が言い出したことに驚愕の表情を浮かべていたソルだったが、しばらくして笑みを浮かべた。

「分かりました。でしたら、私のこともさん付けは要らないです」

「分かった…ソル、これでいいかい？」

「ええ、構わないわ」

二人は親密度が上がったのだった。

それからしばらく進み、野宿が出来そうな場所を見つけた瑞樹は馬車を止めた。

馬車から皆が現れる。

「ここで野宿するの？」

「いい剣の修行が出来そうだな」

「そうねえ」

「……………」

順にラグネイア、セラティア、シャーレヴィヒ、アリアである。

正直剣の修行は勘弁して欲しい。

四人が馬車から降りた時には既にソルが火を熾していた。
仕事が早い。

「あれ？テルルとシールは？」

アリアが近寄ってくる。

正直鬱陶しかったがとりあえず手を引かれて馬車に向かう。

この女これだけ俺に言われておきながら何故…と思った自らの思考を封じた。

馬車の中ではテルルとシールが眠っていた。

それはもう快眠も快眠、見ているこっちが眠くなりそうな程度には。

眠り姫を放置して二人は火の元に戻った。

ずっと三人娘は喋り続けている。

それをアリアが隣で聞き、ソルは火の世話をしている。
それで俺はボーっとしていた。

割と近くにいるソルに眠る旨を伝えたと反応が返ってきたので俺は馬車に戻った。

馬車の中は何故か広がった。

魔導術の応用で空間拡張されているらしい。

詳しいことは知らない。

で、ベッドが五つあるんだ。

「あれ…」

俺、シャーレヴィヒ、ソル、ラグネシア、セラティア、アリア、デユ＝シール、ラ＝テール。

一、二、三、四、五、六、七、八。

ベッドが足りない。

「早い者勝ちでいいか…」

瑞樹は空いているベッドに倒れこんだ。

「……………」

「……………ん？」

「ごそごそと動いて目覚めた俺は両横からの熱に気がついた。

「熱源反応…左右から？」

暗くて周りが見えないので手探りで状況を確認める。

ムニユ。

「ムニユ？」

「あつ……………」

左から何か声が聞こえた。

むにゅむにゅ。

「むにゅむにゅ？」

「ふにゅう…」

右から先程とは別の声。

暗闇に目が慣れてきた時、俺は事態を悟った。

左にいたのはシャーレヴィヒ、右にいたのはラッテレであった。

注意しておくが、瑞樹はコミュニケーション能力は皆無であるが妻の数を踏まえると圧倒的に夜のコミュニケーションは経験豊富なのである。

「まさか…俺やっちゃった？」

一瞬とんでもないことが頭の隅をよぎったが自らで否定する。

「俺が一番寝るのが早かったんだから…夜這われた？」

特に被害を受けていない事を確認して速やかにベッドを降りた。

その時外からセラティアが入ってきた。

そしてベッドの惨状を見てセラティアの目が光った。

「英雄殿…？何をした？」

「お、俺は…」

セラティアと相對するだけのコミュニケーション能力がない瑞樹は言葉が続かない。

「言わなくてもいい、見ればわかる。少々付き合ってもらおうか」

一応結構な力を持っている瑞樹だったが、セラティアの怒りの攻撃には何故か敵わなかった。

瑞樹はもう馬車の中で寝るのは止めようと固い決意を滲ませたのだ。
った。

馬車生活（後書き）

意外とコミカルなキャラクターになりそうなんですけどうし
ましょか…主人公。

気まぐれ発動、その1（前書き）

第一章、続いています。

気まぐれ発動、その1

馬車生活を続けて数日。

初夜のようなアクシデントも起こらず、大分瑞樹は同行者達と打ち解けていた。

その日、昼ごろに一行は小さな農村にたどり着いた。

一同を迎えたのは汽笛の音だった。

「あれは何だ？」

「あれは鉄道、と言う。何代か前の皇帝が国家間友好の証、とか言
つて作った物らしい」

鉄道については一応知っていた瑞樹は軽く聞いた。

村中が農業をやっているようだった。

家屋の面積より圧倒的に農地面積が多いのだ。

「ここがカルバディアノスの生産拠点か」

感心したかのようにラグネシアが呟いた。

「まあな、兵士が多い以上食い扶持の元となる穀物なんかは自給し
なければ」

「やっぱり魔導術は使えないんだね」

「教える人間もないからな」

現状、国家間の人の流通は商人限定となっている。

たまにピローナスク地方を経由して関所を抜ける関所破りが現れるのだが、大抵の人間は諦める。

「元々戦士の国という雰囲気があるからな…」

瑞樹がここで一石を投じる。

「初代皇帝は戦姫神と呼ばれてはいたけど、魔導術も神導術も使っていたような気が…」

「瑞樹殿は初代皇帝に会ったことがあるのか!？」

「まあ一応…一緒に戦ってた事もあるし」

「どんな方だった？」

瑞樹は暫し黙考して答えた。

「美人だった」

その一言を聞いたシャーレヴィヒとテルルが瑞樹の服の裾を掴んだ。

「私も一度お会いしたかったな…」

うつとりとした顔で喋るセラティアを見て瑞樹は驚いたような顔をする。

「いや…いたじゃないか」

「は？」

瑞樹と龍姫達以外の同行者達が目を点にする。

「だからいたって。氷柱の中に」

未だ思考の追いついていない他を差し置いて、瑞樹たちは村の中心部へと向かった。

汽車が停車している駅、と呼ばれる場所に立っている男に瑞樹が訊ねた。

「これに乗ればカルバディアノス皇都まで行けるのか？」

男は頷いた。

「あんた見ない顔だね、新参の商人か？」

「まあ、そんな所だ」

「そうか、俺も商人だ。よろしく頼むぜ同業者」

そうつって手を差し出す男に瑞樹は驚いた。

「普通商人同士って仲が悪いんじゃないのか？商売敵なんだろう？」

「ああ、そういう事か。売っている物の種類が違えば問題はねえよ」

「俺は売り物について教えてはいないが？」

「見たら分かるぜ、奴隷商だろう？」

後ろの姫達を指差してそういう男に対して一応は同意しておく。

「それにしてもいいオンナばかり集めたじゃねーか。羨ましいぜ」
段々男が下卑た人間だと分かってきた瑞樹は適当に相槌を打った。

「なあ兄ちゃん良ければ一人…」
男のそんな言葉は汽車が駅に到着した音で掻き消された。

下衆男、と瑞樹が名付けた男を放置して一行の下へ向かった瑞樹は魔獣が村を襲っているのを捉えた。
村の中心部にいるのはシャーレヴィヒとアリア、二人を守るソルだった。

「ラグネとセラティアは？」
駆け寄った瑞樹がシャーレヴィヒに訊ねるとアリアが虚空を指差した。

指し示す方向を見ると確かに、ラグネアが遊撃を行っているのが見て取れた。

「ハアッ！」
セラティアが魔獣と交戦している。
相手はどうやら群れて行動するタイプのようだった。

反応に答えないシャーレヴィヒは詠唱を行っていた。
アリアは何か祈っている。

デュ＝シールとラー＝テールはラグネアと同様に空を駆け回っていた。
しかし、村が元々小規模である事や敵は小個体である事から苦戦していた。

とりあえず瑞樹は駅が破壊されないように自らの位置より後ろ側に障壁を張った。

瑞樹がふと駅のほうを振り返ると汽車は何事もなかったように発車した。

そんな様子を見ていたセラティアが駅の方角を睨みながら言った。

「ここは…奴隷村の一つなのだ…」

セラティアによると、皇都の外縁部にある小村はほとんどが半奴隷的扱いを受けていると言うのだ。

普段は農耕で国に尽くし、必要とされれば奴隷商に売り飛ばされる。国の人口のおよそ六割が農奴であるのだ。

それを聞いて瑞樹がつぶやいたのは、

「くだらない」

という一言だった。

瑞樹は近くに倒れていた少女に近寄って言った。

「俺は奴隷商じゃないけど、一緒に来るか？」

少女はふるふると首を横に振った。

「お母さんが…」

そう言って潰れた瓦礫を指差す。

それを見た瑞樹はコミュニケーション能力を規格外に持っていった。

「分かった、じゃあお母さんと一緒に行こうか」

その様子を見ていたセラティアは瑞樹に腹を立てた。

無論セラティアも少女から話を聞いて助けに行こうとしたのだ。

しかしどう見ても絶望的だった上に近付きすぎると魔獣が寄ってくる

る。

そんな状況であるにも拘らず、瑞樹が安易に約束をした事に腹が立ったのである。

「おい瑞樹殿！」

瑞樹に迫ったとき瑞樹は前にいた魔獣を払っていた。

魔力のないセラティアには分からなかったが、この時瑞樹の周りには魔力の奔流が渦巻いていたのである。

それを敏感に感じ取ったシャーレヴィヒが詠唱を止めた。

相殺される危険があるからだ。

神導術を繰り出そうとしたアリアもその挙動を止めた。

魔力と神力が合わさると力融合が発生し制御不能に陥るからである。

瑞樹はその後も襲い掛かってくる魔獣を屠っていく。

それはさながら絵のようであった。

その状況を車窓から見ていた一人の画家が描いたそれは、後に買い手が多すぎて模造品が出回るほどであったと言う。

ともあれ、瑞樹はその流れで瓦礫も吹き飛ばした。

そこから現れたのは一人の女性。

間違いなく少女の母親である。

彼女の容態は至って悪く、虫の息だった。

すると今度は瑞樹が魔力を吹き飛ばし、神力に包まれ始めた。

今度こそ場にいた者は一様に驚いたであろう。

この大陸の民が分けられているのはそれぞれが人一個体につき一力しか得られないのが常。

それ故、魔導術信奉のソルディバイト、魔術信仰のアシユメダイア、

神導術信奉のイスラフィール、無術信奉のカルバディアノスとなっているのである。

それぞれの属国も似たような物である。

それほどまでに瑞樹の存在は規格外だった。

瑞樹が術を切り替えたのは、神導術が癒しの能力に長けているためである。

「^{サルベ}汝の体を癒し^{・シヨ}し者発動」

瑞樹の言葉と共に女性の体が青い光に包まれていき——光が消えたときには女性の傷は癒えていた。

「お母さん！」

泣き付く少女が縋りついた。

その感動的な様子を眺めるのは姫様一行。

何処かその状況に無関心な瑞樹は別のことを考えているのだった…。

気まぐれ発動、その1（後書き）

瑞樹が人助けをするのはあくまで気まぐれであるので、これからも話の内容によってはタイトルが「気まぐれ」と付くと思います。

お気に入りの中略）有難うございます。

毎回書くとスクロールが大変、と言われたので中略します。

針路の分岐点（前書き）

今話より、文章を見やすくするために行空けの頻度を上げました。
決して字数稼ぎとかそういうこと考えているわけではないのでご安心ください。

針路の分岐点

「北へ向かう？ 奴隷問題は放置するのか？」

瑞樹の突然の方向転換に対し納得いかないと言わんばかりに詰め寄るセラティア。

「ああ。先に俺の国を取り戻す」

セラティアが怒った。

「天下の英雄ともあろう者が自らの欲望を優先するというのか！？ そんなことは認められないだろう！」

瑞樹は落ち着いた表情で淡々と答えた。

「まず俺自身が英雄とか名乗ってるわけじゃないし。善人って言うわけでもないし。勿論聖人君子なんかじゃない」

「英雄というからもちとそういう素晴らしい人格者だと思っていたのに…。」

貴殿には失望した。もういい、その二人は私が皇都まで連れて行く！」

「勝手な期待を寄せられても困る。それはお前の意志のみで作られた偶像に過ぎない。

それからその二人は俺が預かる」

そこの二人、と言われた農奴の母娘は肩を震わせた。

「な！勝手な事をいうな！この二人は皇国カルバディアノスの民だ！
その場合貴殿は人攫いとみなすぞ！」

「どうせ奴隷階級なんだろうが。
人攫いとみなされても構わない。どうせ常人では俺には勝てない」

そこところは全て思い当たるところがあつたのかセラティアは黙
つてしまった。

黙ってしまったのを機に話はこれで終わりだといわんばかりに瑞樹
は母娘を呼んだ。

そして、空間に裂け目を作り出した。

「もう驚きませんわ」

「だね」

「……（コクコク）」

裂け目を見て呆然としている二人に対して瑞樹は中に入るように言
った。

「ごめんな、狭いけど少しの辛抱だから。食べるものもそこにおい
であるのを適当に食べて」

母娘が頷いたのを見て瑞樹は裂け目から出てそれを閉じた。

「分かった。貴殿がそういう人間だというのが私は抜けさせてもらう」

復活したセラティアが言った。

「ちょっとセラティア！？あなた強情すぎるわよ」

「そうだよ、何言ってるのさ」

「……………」

踏みとどまらせようとする三人を尻目に瑞樹がとどめを刺した。

「構わない。別に一緒にいることを強制させているわけではないから」

「……………」つ。失礼する！」

そう言ってセラティアは単身駅に向かって行った。

「瑞樹様……………」

「瑞樹さん……………」

「……………」

瑞樹の表情が元に戻った。

「本当、セラティアって怖いな。いつ剣を抜かれるかひやひやした」

それまで何も言わなかったデュ＝シールが声を出した。

「全く…主殿はどうして素直に言わんのかの？」

先に奴隷階級のものが住める土地を用意してから奴隷解放するといえはよかるうに」

それを聞いた三人の姫が今気がついたといわんばかりの表情を浮かべた。

「なるほど…そういうことでしたか。瑞樹様を疑ってしまいました」

「私は始めから信じてたけどね」

「……（コク）」

「いや…言いそびれただけ」

その場にいた全員がコケた。

空で哨戒活動を行っていたラ＝テレーが降りてきた。

「……………何で皆地面に転がってるの？」

誰も答える者はいなかった。

「瑞樹様。北の空…空いてる」

「ありがとうテルル。いつも助かってるよ」

「そ、そんなことない／＼／」

「シールとテルルは俺たちを乗せてほしいんだ」

「陸路で行くんじゃないの？」

ラグネイアが訊ねた。

「時間が足りない。今回は短期決戦で行きたいから」

「……馬車のほうは駅に留めておけばいいでしょうか？」

「そうだな。ソルはちゃんと来てくれよ？」

「分かっています」

傍から見ると仲が良さそうに見える二人の会話にシャーレヴィヒとラッテーレがむくれた。

瑞樹はそれを無視すると指示を出した。

「俺がテルルのほうに乗るから、皆はシールのほうに」

「主殿：我を扱き使いすぎではないか？」

「シール大きいんだからいいだろ」

「あ、私飛べるから自分で行くよ」

翼を持つラグネイアが言った。

「殊勝な事だな、娘」

デュールシールがラグネイアを賞賛するとラグネイアが照れた。

「瑞樹様…行く」

「よろしく頼む。皆、行くよ！」

その言葉を合図に一行は北へと針路を向けた。

この時セラティアと一緒に連れて行けばよかったと瑞樹が後悔するかどうかは…今はまだ分からない。

針路の分岐点（後書き）

おいおいハーレムメンバー人抜けちまったぜ！とか思っている貴方。

多分復活するので大丈夫です。

セラティアファンの方…セラティアがフェードアウトしたからといって作品を見捨てないでくださいm（――）m

それはそうとお気に入り（中略）ありがとうございます。

変革の国（前書き）

前話は急展開でしたが今話は…どうなんでしょうか。

変革の国

大陸北東部。

農奴の村から龍姫たちに乗って飛ぶ事数時間。

瑞樹たちはそれぞれが風避けの術を用いて飛んでいた。

現在地は北東部の小国をいくらか飛び越し、ソルディバイト領内に差し掛かるうとしていた。

「……瑞樹様……」

瑞樹を乗せて飛行中のラーテレーが呟いた。

「何だか…暖かい…」

その言葉を聞き取ったのか、シャーレヴィヒが声を上げた。

「何故だか分かりませんが、ソルディバイト領内は大陸北部にあるにも拘らず温暖な気候なのです」

恐らく嘗て共に戦った魔導術師の力によるものだろう、と瑞樹は頭の中で考え、それを一瞬のうちに振り払った。

今の自分が考えなければならぬのはそのことではないと。

現在位置を改めて確認した瑞樹は、着地する旨を伝えた。

五人を乗せた二頭の龍姫はゆっくりと着地した。

「そろそろ関所が近いからな。関所破りをするつもりは毛頭ない」

「では歩いていくのですか？馬車は置いてきましたから」

「ええ、それは面倒だよ！」

冷静に考えを述べたシャーレヴィヒと、その考えに真っ向から否定的なラグネイア。

このまま話し合っていてても平行線であることは確実であったため、瑞樹は俊足の魔導術を施した。

「これなら別に歩きでも構わないだろう？」

「うう…まあ瑞樹さんがそういうなら…」

何時の間にやらかなりの信頼を置かれているという事に気がついた瑞樹は苦笑した。

「さて…時間がない…セラティアが何かやらさなければいいけど…」

瑞樹はセラティアの純粋な、且つ剛毅な性格を思い出して呟いた。

姫達が雑談をしている間にも関所は近付いてくる。

「こんな時間に関所を通ってもいいのかな」

現在は深夜に差し掛かろうとしている。

そのような時間に関所を通るのは盗賊の類かもしくは顔を出せない危ない人間か…であると考えた瑞樹なりの呟きである。

「問題ありません。そもそも盗賊は馬鹿正直に関所なんて通りませんし。」

関所を通るには通行手形が必要なのですから」
身分証明も兼ねていますから、危険人物も入手しようとはしないでしょう」

ソルが淡々と答えた。

考えている事をそっくり読み取られてしまった事に対する驚愕と、自らの疑問に明確な着地点が見えたことに対する安堵が混ざって瑞樹は表情が崩壊していた。

「主殿：顔がおかしいぞ？」

普通そこは顔色だろ…とかその場にいた人間ならツツコミを入れるところなのだがその言葉自体は的を射ていたので誰も何も言わなかった。

瑞樹がその場に膝を突いている事にも。

「あ…ほら、もう関所です」

シャーレヴィヒが空気を換えるためか若干気合の入った声で言った。

「俺たちって通行手形取れるのか？」

「無理でしょう。姫様がいたら可能だと思いますが」

「それなら大丈夫か」

「ええ」

そんな対話を繰り返す。

この時、シャーレヴィヒは一行の先頭に。

瑞樹はラ＝テールに腕をつかまれたままで二番目を歩く。

その後ろにラグネイア。

そして一番後ろにデュ＝シールとアリアである。

何故かデュ＝シールはアリアが気に入ったらしく、背中に乗せてから妙にべたべたしている。

俄然アリアに興味を示さない瑞樹には然程支障はなかったが。

「何故ですか！？通れないとはどういうことですか！」

シャーレヴィヒが叫んでいる。

「何やら揉めている様だな」

「ええ」

少し早足で駆け寄っていく。

困った顔をした衛兵が告げる。

「ですから、先ほどから申し上げていますように現在ソルディバイトに通ずる全ての関所は封鎖されています。これは宰相府からの通達です」

「私は、ソルディバイト直系の姫なのですよ？何故私までとめられなければならないのです！」

衛兵の顔が困惑から疑念へと変わった。

「姫様の名を騙る偽者とは…不敬。増援を呼べ！」

「了解！」

もう一人の衛兵が関所の中へと入っていく。

「どういふことです!？」

「偽者め…悪運尽きたな。第二皇女様と皇王様は現在病床に臥せているのだ!」

シャーレヴィヒの顎が落ちた、と瑞樹は錯覚した。

「父が…?じゃあ今の国の王は…?」

「倒れられる数日前に皇王様がレティア姫に王位を譲られたのだ。現在はレティア姫殿下が王である!」

シャーレヴィヒはその場に崩れ落ちた。

それを見た衛兵が確保しようと迫る。

それを留めたのは瑞樹だった。

「じゃあ、俺たちは去らせてもらっわ」

衛兵の待て!というお決まりのセリフを聞き流しつつ一行は通ってきた道と逆の方向に走っていくのだった。

変革の国（後書き）

お気に入り登録（中略）有難うございます。

お寄せいただいた感想は一つ一つ目を通していただいています。

それを本編にどのように生かしていくかは現在思考中ですので少々お待ちを。

日の沈む国（前書き）

ソルディバイト編です。

感想を戴きましたシンシアさん、健康に生きる尾床さん有難うございます。

日の沈む国

「ハア…ハア…いるか？」

主な街道には設置されている術式街灯であるが、瑞樹たちが今駆けているのは獣道ではないが、主要な街道でもなかった。

茫然自失としたシャーレヴィヒを腕で抱え、走る瑞樹。

その後を追うのはアリア、ラグネイア、ラ＝テレー、デュ＝シール、ソルの五人である。

「います」

と息を弾ませる事もなく答えたのはソル。

「いるよ」

場にそぐわない陽気な声で答えたのはラグネイア。

早々に走る事を諦めたラグネイアは低空で飛行している。

ラ＝テレーとデュ＝シールがついてきていることは気配で分かった。

アリアは近くにるのが見えた。

瑞樹は夜目が利くと自分でも感じていたが、ことこの状況に至っては魔導術式を作動させ視界を補完しているのである。

ちなみに、瑞樹の体力は这其中でもずば抜けているのだが息切れを起こしかけているのは術式の併用が原因である。

「追っ手は…いないようだな」

そう言つて瑞樹は立ち止まった。

他もそれに習う。

瑞樹は再び術式を作動させた。

デュアル
シンティス
「分かたれし我が思考」

術式を詠唱するのは神導術のみである。

とは言つても、魔導術を無詠唱で使うことができるようになるまでは数十年の年月を要するのだが。

ともあれ、瑞樹の神導術は瑞樹自身に作用する術式である。

術式の通り思考を分割、というよりは多元的に増やすのである。

脳がいつぱい、といえば生物学的には合つてはいるが実際に脳が増えているわけではない。

「とりあえず何処に行こうか…」

「ソルディバイト領から出るのが先じゃない？」

「しかしそれでは予定が伸ばし伸ばしに…」

「ふむ…主殿はどうなんじゃ」

皆の目が瑞樹を捉えた。

「俺か？そつだな……」

そつ言つて星空を見上げる瑞樹。

皆は何かあるのかと一様に見上げたがそこには星空が広がるだけである。

「とりあえず、こつちに近付いてくる人に聞いてみよう」

瑞樹が目を向けた先に現れたのはメイドだった。

「ミレイユ！？どうして貴女……」

ソルが驚愕の表情を浮かべて訊ねた。

「それは私が所用であの関所にいたからよ……
それにしても姫様が……」

姫付きの会話が始まりそつだったので瑞樹がやんわりと止めた。

「まあまあ……ちよつと話を聞きたいんだけど、貴女はどなたですか？」

瑞樹としては割と丁寧に訊ねた言葉だったのだがどうも相手はお気に召さなかったようだ。

「シャーレヴィヒ姫の侍女のミレイユと申します」

仏頂面である。

普段から堅いわけではないのだろうと判断した瑞樹は気にすることなく話を進める。

「それで、ちよつと話を聞かせて欲しいんだけど…」

「それならば姫様を連れてきてください。こちらです」

そう言つてズンズンと獣道に入っていくミレイユを一行は追いかけるのだった。

連れて来られたのは小さな家だった。

「ここは私の実家です」

そう言つて椅子に座るよう勧めたミレイユ。

ミレイユによつてシャーレヴィヒはベッドに寝かされている。

「どこから話した物でしょうか…」

その日はいつもと変わらない日だった。

シャーレヴィヒが手紙を残して出て行つた日の朝、その手紙を見た皇王はソルディバイトで現在組織されている皇国軍を城内の広場に

集めた。

無論シャーレヴィヒを連れ戻すためである。

しかし、それを止めたのはレティアであった。

「あのレティア様がその様な事を言うとは思っていませんでした…」

レティアは焦る父王にこう告げたのだ。

『お父様の愛されている私の妹ですよ？

軍隊を派遣する必要などありませんわ。あの子は優秀ですもの。

その様な事はお父様が重々ご承知だと思います。

それより今は内政に専念するべきです』

言っている事は的を射ていた為皇王は何も言う事が出来ずその場で軍隊は解散したのである。

「でも…それが畏だっ たんです」

レティアは皇王が自らを次の後継者に指名することは無いと気がついていたのである。

決して皇王がレティアを嫌っているわけではない。

子煩悩な皇王なのだから当然ともいえる。

しかしレティアはそれを感じられなかった。

「レティア様のお母様とシャーレヴィヒ様のお母様は大変仲が良いのです」

そして皇王は子煩悩でもあるが当然の事ながら妻達の事も愛している。

「レティア様は御三方を嵌めたのです」

その日、いつもの様に城内を巡回していたミレイユは皇王とその妻達が部屋に入っていくのを見たという。

王の私室であつたためいつもの談笑でもしているのだろつと思つたのだ。

後でお茶菓子でも持つて行くべきか…とミレイユが考えていた時その部屋にもう一人の人間が入つていったのだ。

レティアである。

普段とは少し変わった状況ではあつたが、家族内での談話を妨げる事もないと思い特に気にはしなかつた。

それが起きたのはミレイユがお茶菓子を持つていったときのことである。

失礼します…と部屋に入つたミレイユはそこで三人が倒れているを発見した。

『皇王様！？奥方様！？どうなさつたのです！』

駆け寄つたミレイユ。

『貴女がやつたの…？』

その時ドアのほうから声がした。

レティアであつた。

「私は嵌められたと思いました」

それから数分も経たないうちに衛兵が部屋に現れ、ソレイユは侍女の任を解かれた。

「あれは間違いなくレティア様の罠です」

「それから私は城を出ようと思ったのですが、何の気まぐれかレティア様に新たな役目を命じられたのです」

それは三人の看病であつた。

三人はレティアによって眠らされたままである。

ミレイユが事件の本質に気が付いたと判断したレティアは三人の命を盾にミレイユを縛り付けたのである。

「でもどうして貴女はここに？」

ラグネイアが口を挟んだ。

「実家に用事がある、と言ってレティア様をお願いしたのです」

「よく許してくれたわね」

「私もそうは思いました。レティア様は私にあの関所に行ってから行け、と仰いましたが」

「逃げていないか確認するためかもね」

「そう思います」

ところで…とミレイユが話を続ける。

「御三方は今現在城の尖塔にいるはずです」

そこで毎日毎日世話をしていたのだ。

その間にレティアは臨時に姫殿下として宣誓し、正式な拝命も無いまま政治の舵を取り始める。

「レティア様は確かに優秀であられました…」

その言葉の意味が全く異なった意味を示していることは皆気が付いた。

「それは、ある意味必然だったのかもしれませんが」

レティアが行った最初の仕事。

それは内政部門の引き締めである。

「元々宰相府で働かれていたレティア様は内政には明るかったのです…」

引き締めと称して行われたのは断罪であった。

元来人間族以外を余り好まない——というよりかなり嫌悪している——
ため自らの周りにそうした者達がいるのが許せなかったのだろう。

レティアはでっち上げの罪でそうした者達を片っ端から処断した。

一般市民には特に何も触れなかったが徐々に生活の幅は狭くなっている。

「例えば最近の例だと店で物を購入するのが難しくなりました」

獣人などを見ると店を閉めてしまったり、獣人お断りと書かれた看板を提げている所もあるのだ。

「その上レティア様は……」

そついつとふとラグネイアの顔を見た。

「？」

ラグネイアは勿論何故見られているかわからなかった。

「レティア様は、イスラファエル教の敬虔な信者なのです」

それだけで瑞樹は全てを理解した。

「つまるところ、そのレティア様とやらが教国と仲良くな……た……って
所か？」

躊躇いがちにミレイユは頷いた。

「このままではイスラフィール教国と違って多種族のいるソルディバイトは内乱が起きます！」

そうなればこの国はもう二度と太陽国とは呼ばれなくなるでしょう」

「…そうね…止めなければならぬわね…」

「シャル！？」

ソルが駆け寄った。誰もソルが呼び捨てにした事を咎めなかった。

「話は全部聞いていたわ…。というか瑞樹様私が起きているのはご存知だったのでしょうか？」

「ああ」

悪びれもせず答えた瑞樹にシャーレヴィヒは苦笑ではなく微笑を返した。

「行きましようか」

先ほどのまでの落ち込んだ素振りは全く見られない。

「ああ。だがラグネイアは国に戻ったほうがいいんじゃないか？」

話を聞いて顔面蒼白になっていたラグネイアは復活した。

「いいや、瑞樹さんがきつと何とかしてくれると思うよ」

瑞樹は苦笑した。

「そんなに頼られても困るんだけどな……」

瑞樹は立ち上がった。

「まあでも、俺の妻の国なら手伝ってやらない事もない。
目的も達成出来そうだしな」

妻、と聞いて悶えているシャーレヴィヒを尻目に全員は立ち上がった。

「さて行こうか……」

「レティア様にお伝えねば……」
家の外で聞き耳を立てている人影はそれを聞いてその場を立ち去った。

日の沈む国（後書き）

二話以降登場が皆無だったミレイユが再登場です。

お茶会についていったはずじゃなかったのか？と疑問に思われた方がいらっしゃるのではないかと（いないかな？）思うのですが彼女は当日体調不良で参加していませんでした（という設定です）

お姫様のご招待（前書き）

お気に入り登録100名突破有難うございます。

期待されているんだと思っていいのかどうかは分かりませんが、
自らの頭を捻り捻り投稿をしていきたいと思っています。
どうぞこれからもよろしく願いします。

お姫様のご招待

《セラティアⅡアイラスⅡカルバディアノス》

瑞樹たちと別れて数時間。

セラティアは鉄道を利用して皇都・ギルガンダスに到着した。

駅を出ると五人の城兵がセラティアを待っていた。

「出迎えは不要だと言ったのだが…？」

セラティアがそう言うのと五人の中から一人の衛兵が前に立った。

「皇王様がお待ちです。お乗りください」

そう言っただけで自分達の後ろにある馬車を示した。

この衛兵、最近の若手の中で期待値が最も高いと言われている将来有望な兵である。

一部の貴族階級に連なる当主たちから推されているらしく、その評価もつなぎのほりであった。

一度セラティアはこの衛兵と模擬戦を行ったことがある。

その時セラティアは当然のように再起不能なまでに打ち砕いたのだがこうして再びセラティアの前に立っていると云う事は立ち直ったのである、と考えた。

「ほう…」

セラティアがそんな事を呟くと周りの衛兵達は首を傾げた。

最も、セラティアはその男を気にすることは無く馬車に乗り込んだのだったが。

馬車が街の大通りを抜けていく。

周りは喧騒に包まれている。

店先に行列が出来ていたり、行商が街の至る所で活動をしている。

とりわけ目立つのはやはり鎧を着ている人間が多いと言う事である。

女性や子供は普通の服を着ているのだが、若者は殆どが鎧を装着している。

軍として採られていなくとも有事の際には一兵士として国を守る。

「いや…守るのは国ではなく親しき者達か…」

セラティアはぼんやりとその光景を見つめていた。

しばらく進むと城門が見えてきた。

城門の上をふつと見上げ、セラティアは先日の自分を思い出した。

「結局、何も変わらないのか…」

自分自身に対する嘲りであった。

セラティアの独り言は皆聞こえていない。

馬車の中にいるのはセラティアだけで、御者台に一人、残りは馬車の周りを同じ速度で歩いているからだ。

馬車が止まった。

セラティアは馬車を降り、歩いて城の中に入っていった。

一人でスタスタと進んでいくセラティアを慌てて衛兵が追いかけたのだった。

セラティアは衛兵が言ったように、帰着早々に父であるカルバディアノス王の元へ向かった。

謁見の間でセラティアは片膝を突く。

親子とは言えども、この場においては王と家臣である。

故に立場を示す意味でもこれは必要であった。

「面を上げよ」

「はっ」

王の、重々しい声に従い顔を上げたセラティア。

「……？」

セラティアは王の目の上に隈を見つけた。

「まずは、よく帰って来たと言っておこう」

またセラティアは疑問を覚えた。

セラティアが修行のため、と称して普段から近隣の山や海へ行き数日間のサバイバル生活を送っているのは父も知っている事であり、そこには然程関心を持たれていなかったのだ。

恐らく今回の遠出もその一つだと考えているのだろうと思ったのだが、帰って来たら喜ばれた。

その意味がセラティアには理解できないのであった。

「本題に入る。」

帰して早々悪いのだが、これからお前にはソルディバイトへ出立してもらう」

「ソルディバイトへですか？ 昨年国の生誕記念式典に出席したばかりだと思いますが」

本題が兵士としての自分ではなく皇女としての自分に向けての物であると気付いたセラティアは口調を元に戻した。

「うむ。実はソルディバイトの王が代わったのだ」

「はっ？」

意味が分からなかった。

式典の時にはとても健勝であったソルディバイト皇王の姿を思い出したからだ。

「何故…でしょうか…？」

皇王はふむ、と暫し考えるような素振りを見せ、言葉を続けた。

「公式回答^{たてまえ}によると、病らしいのだ」

公式回答、を建前と一蹴したところに真意があると気が付いた。

「では実際は…？」

「恐らく退位させたのだろう。現在ソルディバイトの舵をとっているのはレティア姫だ」

「それで、何故私が向かう事に？」

「これは、我が建前だと判断するに至った理由でもあるのだが今回呼ばれたのは厳密にはお前ではない。ルシアなのだ」

「ルシアがですか！？何故に」

セラティアが慌てたのを見た王は落ち着かせた。

「まあ話を聞け。此度の用件はレティア姫の王位継承式への出席と
言う事だ」

「……………」

「つまりはだ、そのような国家的事態にも拘らず王の現状については何も伝えず、自らが皇位を継承するほうに重点を置いていると言う事がまさに無理やり即位しようとしているのを証明しているのだ」

「成程…。しかしそれもまだ推測としか…」

「間諜によると国の実権を握ったレティア姫は要職に就いていた人間族以外の者を処刑したらしい」

「何ですって！？」

「そして話を戻すが、ルシアは純粋な人間族ではない。
それはお前も分かっているだろう」

「ということは…まさか！？」

「流石に我もかの姫が他国の皇位継承者を害するなどということは考えてはおらぬが…」

万一の事もある、ルシアの護衛としてお前にカルバディアノスへと向かって欲しいのだ」

セラティアは即断した。

「分かりました、支度をします。ルシアは何処に？」

「多分お前の部屋で待っている事だろう。あれもお前の帰りを待っていたようだからな」

「失礼します」

謁見の間を出たセラティアを迎えたのはセラティアとは似つかないほどに線の細い体付きの少女であった。

「お姉様、お帰りなさい！」

そう言つて飛びついてくるルシアを抱きしめながらセラティアは言葉を返した。

「ここら、第二皇女というものがはしたないぞ？衛兵が見ていたらどうする」

ルシアは頬をぷくぷくと膨らませた。

「問題は無いです。それよりお姉様……」

ルシアが手を出したため、セラティアはその手を握った。

ルシアの手は震えていた。

「やはりお前は怖いか…？」

「はい…」

ルシアはセラティアとは異母姉妹である。

人間族のセラティアの母とは異なり、ルシアの母は天使であった。

ラグネシアと違う点は翼を広げられないと言う事である。

ルシアの母も人間族と天使族の混血であり、その前も…という流れから、ルシアの代にはかなり天使族の血は薄くなっていたのである。

ちなみに、過去魔人中心国家であるアシュメダイアとの対立は彼女が生まれたことによつて霧散した。

ルシアが継承したのはその美貌と体付きであつた。

生まれつきルシアは体が弱く、生まれてから五年ほどはほぼ毎日部屋暮らしが続いていた。

六年目頃から城の中を徘徊出来るようになったのだ。

勿論ルシアが恐れているのはレティアである。

例えば血がどれだけ薄まっていたとしてもルシアを一目見れば恐らく純血ではないことに気が付くだろう。

世界的には聖なる者として崇められる事が多い天使族も、レティアからすれば排除の対象であるからだ。

「大丈夫だ、ルシア。私も一緒に行ってお前を護ってあげるから」

「お姉様……」

その夜、ルシアはセラティアの部屋に夜這いをかけた。

勿論恐怖ゆえの甘え心であった。

セラティアは余りにしがみ付くルシアによって睡眠不足へと追い込まれるのであった。

お姫様のご招待（後書き）

時系列的には、丁度瑞樹たちが飛行中の時です。

何だか異母姉妹が多いですね…男性キャラクター用意しているんですが使いどころが難しい…。

MOBキャラは衛兵であったり関所の門番であったりと結構登場してはいるんですが…。そろそろ絡みがほしいと…。

お気に入り登録（中略）有難うございます。

作戦会議（前書き）

どうも、こんばんわ。

受験勉強が佳境です。

行く先は死か生か。わかりませんが、更新は続けていきます。

勉強ばかりじゃなくても国公立には受かると言う事を証明してやりますので。

更新頻度に変更があつたらまたお知らせします。

作戦会議

アルベダイト大陸中最も東側にある都市であるため日の出が最も早いソルデイバイト王都、リ・アルソラーレ。

瑞樹たちは外套を羽織ったまま入市した。

まだ太陽が水平線から顔を出していない時間帯である。

元々、商業国家として商業圏の人間を広く迎え入れていた風潮もあったか城下町であるリ・アルソラーレでさえも王都に入る為の門は開かれていた。

さすがに王城へ向かう道筋の途中にある城門は閉まっていたが。

「活気が無いな…」

瑞樹がぼやいた。

「それはそうよ。だってまだ未明だから」

ぼやきに反応したのはラグネイア。

シャーレヴィヒ、ソル、そしてミレイユは黙りこくったままである。

そしてデュ＝シールとラ＝テールは仔龍となっていた。

「便利な身体なんだね」

驚きを隠せないラグネシアは小さくなっているラ＝テーレをつつく。暫くは突かれるがままになっていたデュ＝シールは瑞樹の外套のポケットの中に潜り込んだ。

そしてラグネシアの方を睨みつけている……のだが見た目が愛くるしいのでラグネシアは全く気にせず弄り続けていた。

現在一行はミレイユの先導で待ち合わせ場所へと向かっていた。

勿論この時間を選んだ理由は人目につかないようにするためである。

「幾ら外套を羽織っていてもシャーレヴィヒの放つオーラというのが風格と言うのか……そのようなものが市民達によって気付かれてしまうのです」

入都する前に瑞樹がミレイユに訊ねた時の答えである。

魔力や神力の奔流が見えると言うのは導術師ならば当然ともいえることではあるのだが流石の瑞樹もオーラの存在は認められなかった。とりあえずこれ以上オーラについて話し合っても解決しないだろうと踏んだ瑞樹はそれ以降話を切り上げている。

「こ、これは！」

ソルが時間帯に沿わないような素っ頓狂な声を上げた。

ソルの声を聞いて皆がその方向を見ると、そこにあったのは市民の憩いの場と銘打たれた掲示板だった。

城下町の簡略な地図や伝言板などの意味を成しているその掲示板に貼られていたのはシャーレヴィヒの写真。

この世界にも映写機、と呼ばれる所謂写真を撮る機械が存在する。

その昔とある工房の職人が作り上げたとされるシロモノで、その製法は世界中に広まりそしてバリエーション豊かな商品群となっている。

職人が増えたために完成当時は法外な金額だったが、現在は供給過多によって若干値下がり気味である。

一般市民の中にも写真愛好家はいるが、購入者層は記者である。

この製品によって情報業が大幅に拡大し、瓦版などを手がけている。

この掲示板も管理責任者はとある情報業者である。

一般的には情報屋と呼ばれているのである。

そのシャーレヴィヒの写真には大量の小型刃物が突き刺さっていた。よろめくシャーレヴィヒと、それを支えるソル。

「これは……どういうことなんだ？」

瑞樹がミレイユに訊ねる。

ミレイユが答えようとしたが、その時目的地に到着した。

大陸^ギ大手通商貿易監視組合^{ルド}。

元々は無法であつた貿易業を取り締まる物である。

貿易業は法外な値段の吊り上げ、商品の不法入手、天然の貴重品の略取などの様々な犯罪的行為が起こりうる業種である。

その他にも、街道を通つてやってくる盗賊の撃退なども引き受けている内に総合的業種となつたのである。

盗賊の撃退から魔獣の撃退、軍隊への傭兵としての参加。

不法入手品の取締りから門付近での商業貨物の点検。

但し、貿易に直接介入できるのは商会の貿易と、個人貿易に限られる。

国同士の大きな取引には干渉しないのが規定事項。

これが現在の国政への不干涉へと繋がっている。

しかしながら、いまやギルドは大陸になくてもならないものとなっていた。

ミレイユがドアを開ける。

ギルドは無休である。

夜番を任されていた受付の老人はぞろぞろと入ってくる人物のそれぞれの表情を観察していた。

——最後に入ってきた瑞樹に既視感を覚えた。

「こんばんは、予約を入れていたものですが」

老人はぶっきらぼうに言った。

「十三番テーブル。既に消音術は掛けてある。使用制限は一時間半じゃ」

「有難うございます」

ミレイユはそう述べると一行を予約席に案内した。

「予約制だったんだね」

ラグネイアがミレイユに訊ねた。

「ええ、旧くからの決まりだそうです」

「ふん」

答えを聞いたラグネイアは仔龍たちとふれあいをはじめた。

頭脳派ではないと自負するラグネイアは結果だけ聞けば十分なのだ。

「それで、話してもらおうか」

「はい……」

ミレイユが話し始めた。

「現在、御三方は病気で臥せっていると公表はされていません」

「じゃあ何と？」

答えは瑞樹の予想通りだった。

「レティア様は…… 皇王様とその妃は第二皇女・シャーレヴィヒに暗殺をされかけた、と。」

「現在皇国兵が反逆の大罪人シャーレヴィヒを目下搜索中であると、皇国通信で発表したのです」

「皇国通信、とはソルディバイト皇国内での活動を主とする情報屋である。」

「皇国内で最も発言力を持っているといわれる皇国通信は、普段の活

動として皇室の動静、国内の動乱や魔獣の出没情報などを皇国通信、と呼ばれる紙面で発表している。

その情報の正確さ、また裏の顔の情報屋としての能力の高さが裏稼業の人間に信頼されている事もあり、表裏共に皇国内での大手情報屋となっている。

「皇国通信が姫様を大罪人として報道すればきっと国民の心は姫様から離れていくだろう……」

そうレティア様は予想したと思われる

「しかし実際はそうはならなかった？」

瑞樹の質問にミレイユは肯定の意を示した。

「はい。余りにも唐突な出来事であったのと皇王様自身の言葉がなかったのもあるでしょう。」

姫様の城下町での人気の高さも一因ともいえると思いますが……。とにかく、思うように運ばなかった事を知るとレティア様は次の行動を起こしたのです」

レティアは親レティア派と呼ばれる派閥の兵を使って城下で見世物をはじめたのだ。

「それは日によって違います。」

姫様のお写真を民衆の前で燃やしたり、掲示板に貼り付けて的当てと題して小刀を投げつけたり。

最初の頃は一般の皇国兵が止めていたのですが……」

「その皇国兵はどうなった？」

「国賊に賛同するものは国賊だと……国を追われました。家族と共に」

その時ギルド関係者と思われる男が一組の夫婦を連れてきた。

「もしかしてお二人が……？」

瑞樹が訊ねると夫の方が答えた。

「ええ、ですが私は後悔してはいませんし妻も納得してくれています。」

それにここは皇国不可侵の領域ですから、身も安全です」

ギルドは冤罪で国を追われることとなった人々の支援も行っているのだ。

シャーレヴィヒと夫婦の目があつた。

シャーレヴィヒの表情に生氣と、やる気が現れる。

「お二方、私のために……ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

「そ、そんな姫様！ 顔をお上げになつてください！」

頭を下げられた夫婦は困惑と焦りとでいっぱいになっている。

「ですが……何とお詫びしたらよいか……」

「私達は、姫様の国の民なのです。私達の希望であるのですからど

うぞお顔をお上げに……」

妻らしき女性がそう述べると、シャーレヴィヒはゆっくりと顔を上げた。

「分かりました。きっと貴女方の想いには答えますから、皇国の名において宣言いたします！」

シャーレヴィヒに深く礼をした後、夫婦はギルドの奥のほうへ向かっていった。

ミレイユが話を戻す。

「あのお二方が罰せられてから国民はその光景に何も言えないのです。

今度は打ち首かもしれない……そういう恐怖で民の心を縛り付けているのです」

「そして……」

瑞樹が立ち上がった。

「まあ、そのくらいにしてそろそろ対策を練ろう。
何時までもそんな話を話している時間はないし」

ミレイユは頷いた。

そして一枚の紙を見せる。

「これは？」

瑞樹が訊ねる。

「明日行われる、王位継承式への招待状です」

次の紙を取り出す。

「これは……地図かな」

「そうです。当日の警備配置と城内の詳細な地図です」

瑞樹は頭を回す。

シャーレヴィヒはそんな瑞樹をずっと見つめる。

「つまり、作戦はこうだね？」

継承式が始まると同時に尖塔へ侵入し三人を救出。

それを終わると式の最後に行われる継承の儀に間に合うように向かう。

継承の儀を未遂で終わらせてクーデターを止める。

継承の儀は重要な意味を持っている。

この儀を終えてしまった場合、いかなる理由があっても王位継承者を廃することは出来ない。

継承録に記録されるからだ。

継承されたものは次に継承するまでは当然皇王であるため誰も文句が言えないのである。

それ故狙うのは継承の儀が終わるまでなのだ。

「流石瑞樹様です……」

シャーレヴィヒが感嘆した。

「ではそれで行きましょう。皆さん、どうかこの国を救ってください！」

これで作戦会議は終わりを告げる。

実行日は明日、継承式である。

作戦会議（後書き）

いよいよ佳境です。

お気に入り登録（中略）ありがとうございます。

作戦前夜（前書き）

予定通りの更新です。

作戦前夜

《ルシアⅡディーヴェントⅡカルバディアノス》

私とお姉様は今、お隣の国・ソルディバイトにいます。

お姉様は馬車の中でずっと難しい顔をしていました。

私がお姉様を見ていることに気が付くと表情を引つ込めて私の頭を撫でてくれました。

お姉様の表情はとても辛そうです。

恐らくレティア様の事を考えているのだろっなと思います。

ソルディバイトの新しい皇王様になるレティア様は異種族を極端に排除するきらいがあるらしいのです。

私はカルバディアノスの現皇王であるお父様と、天使族であるお母様との間に生まれているのでレティア様の言う、異種族という分類にはいるのだと思います。

お姉様が心配しているのは多分もう一つの事もあると思います。

それは、お姉様のお友達であるシャーレヴィヒ様です。

お茶会以降行方不明になっていたと思ったら、皇王様に毒を盛ったとか…。

あんなに優しい人だったのに…信じられません。

お姉様、一人で悩むのは止めてください。

私達は、家族なのでから。

王位継承式前夜。

ソルディバイト城の謁見の間には五人の人物がいた。

王位継承者、レティアⅡアイベルセスⅡソルディバイト。

太陽国ソルディバイト総括執政官、ロイドⅡアルイラーフⅡエルストロイ。

イスラフィール教国宣教師長代理、ノイア。

そしてカルバディアノスからの来賓であるルシアとセラティアである。

「遠路はるばるありがとう、逆境の姫騎士。そしてカルバディアノ

「ス第二皇女殿下」

レティアが述べる。

逆境の姫騎士、とは嘗ての魔獣大群出沒の折にセラティアが圧倒的逆境を見事打ち砕いた事により兵士達からつけられている別名である。

「レティア姫殿下。今回の我が国からの主役はルシア第二皇女です。私はただの護衛の身である故、私の事は壁とでも思っておいて頂ければ……」

「分かりました。ならば私も少し気を緩めてもいいのかしら？」

「」随意に」

一見気を緩めたかに見えるレティアだが、決してそんなことはない。と場にいる人間達は理解していた。

ルシアが訊ねる。

「あの……レティア様の後ろにいらっしゃるのは何方でしょうか？」

ロイド様は以前にお会いしたことがあるので存じているのですが」

後ろにいろのが宣教師であると服装から気が付いたルシア。

勿論敢えて訊ねたのは自らの思考を一边倒に持っていないためである。

「こちらの方は今回の式の見届け役であるノイアです。」

第三国が務める役割であるため今回はイスラフィール教国からお呼びしました」

後ろでノイア、と呼ばれた男が軽く会釈をする。

ロイド執政官がそのタイミングを見計らって仔細を話し始めた。

「まず、ルシア姫殿下には夜も遅いですので来賓の方用の個室をご用意しております。

侍従に案内させますので……キミ、ちょっと」

ノイアの隣に控えていたメイドがロイドに呼ばれて近付く。

「お二方を来賓用の個室へ、丁重に」

かしこまりました、とロイドに頭を下げ、続いてセラティアとルシアに頭を下げた。

「どうぞ、こちらへ。個室の準備は整っております」

メイドに促される形で二人は謁見の間を後にした。

《レティアⅡアイベルセスⅡソルディバイト》

「さて……どう思う？ ロイド」

「特に問題はないと思われます。」

初対面であれば些か不安もありましたがそうでもないのです。
それに城内は完全にこちらの領域、彼女達には何も出来ませんよ」

「……でしょうね。ノイア、準備のほうは？」

「姫殿下の頼みですから何時でも大丈夫です」

ノイアの脂ぎった顔を見てレティアは吐き気を覚えた。

「（何でコイツみたいなのが宣教師なんだか……世も末ね）」

そんな事を考えていると、正面の扉から黒装束の男が入ってきた。

「どうかしたのかしら？ 間諜の任務は今は皇国通信の管制でしょ？」

「至急お耳に入りたいことが……」

男からの情報を得たレティアは思考を巡らせる。

「（シャーレヴィヒが国に帰ってきている？
しかも謎の男と一緒に……。」

その男とは一体……？）」

「その男の正体は掴めたのかしら？」

「情報不足です。全ての導術が干渉されているために盗聴、索敵術が完全に封じられています」

「厄介ね……」

そこでまたノイアが気味の悪い顔を上げた。

「姫殿下……そのような男の事を考えていても仕方がないでしょう。どうせ明日には全てがあなたの物になっているのですから」

ロイドが口を挟む。

「貴様、殿下に軽々しく口を利くなど……」

それを遮ったレティアは何処か吹っ切ったかのように呟いた。

「まあそれもそうよね。今更何をしようが無駄な事。

私も今日はもう就寝するわ。後はロイドに任せるから」

「承知しました」

「式の成功を祈っています」

グヒヒとどこか醜悪な生物を思わせる顔を最後に見たレティアは自室に戻って怒りを爆発させるのだった。

ここで考えるのをやめてしまったことが後々どのような結果をもたらすのかは……今はまだ誰も知らないのだった。

作戦前夜（後書き）

前夜です。

登場人物増えました。

どれがヒロインでどれが敵でどれがMOBかは今後次第です。
いつもお気（中略）ありがとうございます。

王位継承式（前書き）

どうも、こんばんわ。

予定通りの更新を続けております。

夏休み以降は正直どうなるか分かりませんが、仮にも受験生ですし、決まり次第お知らせしたいと思います。

王位継承式

この日、ソルディバイトの一般市民は王城にある広場に集まっていた。

王位継承式を見物するためである。

レティアの策略によって、広く自らの継承を伝える意味もこめて、この日は王城広場も一般解放されていた。

市民が集まった理由はレティアの継承式を見る、という理由もあったがそれよりも関心があったのは現皇王の動静が知りたかったからである。

公式発表されているのは第二皇女であるシャーレヴィヒに毒物を盛られたというものであったが、レティアと違い普段から民との交流を欠かさなかったシャーレヴィヒに限ってそんなことはありえないだろうという民の思いであった。

当日までシャーレヴィヒの株を落とそうと様々な策を講じてきたレティアであったが、思ったほどの成果は上がりず寧ろ自らが放った私兵の行動が目には余るという状況によりレティアはいつそう苦しい立場になっていたのである。

そんな一般市民をよそに、各国から招かれている貴族達が集まってきた。

貴族制が採用されているのはアシユメダイア連合とカルバディアノス皇国。

天使イスラフェルの名の下に皆平等を謳うイスラフィールは勿論そんな制度は無い。

今回アシメダイアは出席を見合わせている。

その原因がレティア政への不信感、特に異種族に対する仕打ちを鑑みた上での判断である事は想像に難くない。

そして、最前列の貴族席にはセラティアとルシア、そしてロイドがいたのである。

「ロイド殿？貴方はレティア様のところに居なくても宜しいのか？」

セラティアが訊ねると困ったような、苦笑いを浮かべる。

「いえ、以前レティア様の着替えのシーンに遭遇いたしました……」

場を沈黙が襲いかけたが、その空気を吹き飛ばしたのはルシア。

「まだ式は始まらないのですか？」

見事なスルースキルを発揮したルシアに追隨するかのようにセラティアも言う。

「確かに、予定の時は既に過ぎていると言うのに……」

「ふむ、何故なのでしょうね……」

何処か他人事のように言うのを聞いてセラティアは疑問を抱いた。

「心配は、しないのか？」

ロイドはぞっとするような笑みを浮かべた。

「姫様ですから」

一方、市街地。

住民の大半が広場にいるため、閑散としている街中を歩く数人。

「というか、別に俺だけでもいいんだけどな」

楽天モードの瑞樹。

「いけませんよ、瑞樹様におんぶに抱っこなのは。共生するんです」

意味の方向性に大きな隔たりがあるのはシャーレヴィヒ。

昨日の作戦会議でようやく正気を取り戻したようで、以前のような状態に戻っている。

「何だかシャル、本当にデレたね」

ラグネイアは呆れ顔である。

アリアはギルドで留守番である。

参加者の中にイスラフィールの人間がいることを知ったため万が一アリアが見つかったても困るから、という理由である。

「主。今回は我らの出番は無いのかの」

「私も……」

龍姫達は現在も省エネルギーモード、従来比80%オフの身体で瑞樹のローブに入っている。

ローブはこの国の正装で、一般庶民は着る必要はないが皇族や貴族など、ある程度の地位を持つ人間なら大抵が着用する。

「とは言ってもこのゆるゆる感がいいんだけどな」

瑞樹が着用しているのは黒単色のローブ。

高貴な死神が着用していそうだと過去言われた事があるのをしみじみと思い出しつつ瑞樹たちは城へと向かっていった。

城門の正面に建つ三人と二匹。

ミレイユは式準備に参加しているため今回の作戦には表立って参加をしていない。

ソルは広場のほうに待機している。

「えーっと…ミレイユさんに言われたのがあの塔か。
遠いな」

位置的には城門から反対側にあるため最も遠い位置にある尖塔を確認する。

「私達はどうしましょうか」

「私は飛んでるよ？」

瑞樹がラグネイアに待ったをかけた。

「見つかりでもしたら一気に処刑ルートだ」

「……止めておくわ」

「二人も広場に向かっていてくれ。この二匹も置いていくから役に立てて」

「我らは小動物とは…やめんか」

ラグネイアに可愛がりを受けているデュ＝シール。

それを見つめるラ＝テール。

奇妙な状況を取りあえず気にせず、瑞樹は城門の上に飛び上がった。

「行ってしまいましたね……」

「そうだね……」

「取り合えず広場に行きましょうか」

「その必要はない」

「っ！……レティア姉様！？」

そこにいたのは黒装束の男とレティアであった。

「久しぶりね、シャーレヴィヒ。貴女は……驚いたわ、アシュメダイアのお姫様じゃない」

「何か用ですか？」

淡泊に言葉を返すラグネイアに若干苛立ちを覚えながらもレティアは予定通りの行動を起こした。

「ちょっと私の人気取りに協力してくれない？」

そう言うと二人の周りに数十人の黒装束が現れた。

「なっ！」

しかし驚いた声を上げたのは二人ではなく、レティアだった。

それもそうだろう、二人が連れていたペットらしき小動物が発光した途端に人と同じ大きさになったからである。勿論人の顔をして。

「異種族！ 排除してくれるわ！」

「異種族などと言われようとはな…数百年生きてきたが初めてだぞ？
光栄に思っんだな」

デュ＝シールの声にたじろぐ一同。

「とりあえずここは状況が悪いので去らせてもらっ」

そう言つと人サイズから更に完全体である龍種へと戻る。

「神龍！ 滅びていなかったの！？」

「お前の異種族と私達を蔑んだ言葉、覚えておくぞ。
覚悟しておけ」

ラ＝テレーの声と共に二人と二頭はその場から去った。

誰も動けなかった。

脅えている者すらいる。

「神龍に喧嘩を売るなんて……この国は終わりだあつ！」

そう言つてその場を逃げ出そうとしたのは黒装束の隊の新入りである。

「五月蠅い！」

その新入りはレティアによつて容赦なく切り捨てられた。

そして、場に再び静寂が戻つた。

「さて、予定通りに事を進めるわ。広場に向かつて頂戴」

了解、という言葉を残して黒装束隊は皆その場から消えた。

一人残つたレティアは溜息をついた。

「ああ……面倒臭い」

瑞樹は順調に目的地へと向かつていく。

当然である。

城の中を行き来するなら入り組んでいて難しいが、瑞樹は直線距離で進んでいるのだから。

やがて到達した尖塔の小窓から侵入を果たすと、周囲の状況を確認する。

「埃っぽいな……ゴホッ」

窓を全開にして換気をするわけにもいかないので、廊下に出て監禁場所を探す。

探す事五分。

「ここか…」

どの部屋も埃っぽかったが、この部屋のドアの前だけ妙に往来の後がある。

そう思っ中に入ると、中にはベッドが三つ。

それぞれ御本人様であることを確認して起こす。

「我^{ヒール}、汝を癒したらん」

簡易詠唱で神術を行使する。

それぞれがピクツと反応する。

「君は……誰だね？」

「あんたのこの第二皇女の使いの者さ。
状況、分かってるよな」

「ああ……そうだ、レティアに………レティアは!？」

「あんたの後釜に就くために現在王位継承式を挙行中だ」

それを聞いた現皇王とその妃たちは啞然とする。

「わしを連れて行け、早く!」

「私達も参ります」

「ええ、当然」

「まあ、落ち着いて。準備するから」

そう言つて瑞樹は以前にも使用した空間を再び裁断する。

「ちょっとここに入つてくれ、どうせあんたら体力落ちてるんだろっし」

「何だこれは？異空間か？お前は一体……」

疑問を抱いて中々入ろうとしない皇王を無理やり押し込んで妃たちが入る。

「よろしく願いますわ」

その言葉を聞いて、瑞樹は空間を閉じた。

そして広場へと転移するのだった。

広場は阿鼻叫喚、地獄絵図と化していた。

基本開かれた場所である都市部には魔獣が集まってくることは無い。

しかし今の広場はどうか。

魔獣、魔獣、魔獣。

魔獣のカーニバルが開催されている。

素早く辺りを見回してミレイユを探す。

ミレイユは聖騎士、と呼ばれるソルディバイト王国の騎士達の中でも最上位に位置する能力を持つ兵士達と共に戦っていた。

一般市民の被害が少ないのは単に彼らの後ろに集まっているからだろっ、というのは容易に想像できた。

瑞樹が更に周りを見渡すと、ラグネイアより二、三歳ほど幼いように見える子供が魔獣の間を縫うように人を捜し求めている。

魔獣が後ろから接近してくる。

瑞樹は駆けた。

「間に合えー！ー！」

瑞樹がその少女を抱えた途端、背中に何かが突き刺さった。

「（痛い……。傷を負ったのは久しぶりだな……。）」

何処か他人事のように感じた瑞樹。

「とりあえず……」

瑞樹は神導術を解き放った。

——在れ、在れ、聖なる導き

——灯れ、灯れ、聖なる輝き

——我が行く末に敵は在らず

——ただ在るのは我のみ

——神よ、神よ、我に託宣を

——多くの命を環に戻すことを許したまえ

「^{サント}ただ^ス我の前に立つたが故の^{オービス}輪廻転生」

これを見たものはこの光景を奇跡というだろう。

魔獣たちが青い光に包まれていく。

そして姿形を消していく。

これは死であるが、復活でもある。

輪廻転生の環の流れを少し速めただけのこと。

少し早い死の訪れを迎えるだけの事。

命は、回り続ける。

空気が冷たい。

衆人の視線は一人の男に注がれている。

その当人、瑞樹は瑞樹が助けた少女と空から降りてきた龍、が変化した人と、まるで聖女様といわんばかりの美しい黄金の紙を持った少女が治療している。それを見つめるのは一人の少女。

治療されている割には横たわっているわけでもなく淡々とその場に突っ立っているだけなのだが。

ふと周囲を見渡した瑞樹は誰も居ない場所に指先を向けた。

「開け」

上から下に振り下ろされていく指先に沿って空間に裂け目が出る。

そこから現れたのは誰もが知っているだろう顔だった。

「こ、皇王様！」

ざわ、ざわ、となる間もなく市民は皆その場に平伏した。

「よい、面を上げよ」

「此度は我が娘レティアによる単独的な行為である。

民には大層影響を与えただろう、誠にすまないと思っている」

一拍置いて、皇王は続ける。

「さて、先の出来事もあったであろうが、我が娘レティアは中々に才女であったと私も思う。

驕りから来るものなのか、それは分からぬが民に害を与えたのは事実。

責任、といったはあれだが私がもうしばらく復興まで皇王を続ける。

その後は再び継承の儀を執り行う事になるだろう。
それでもいいだろうか」

民衆から同意の声が上がると皇王は微笑を浮かべた。

「レティアは？レティアは何処？」

皇王の傍に控えていた第一皇妃が訊ねる。

誰も知らないで顔を見合わせるばかり。

「おい、あれ！」

民衆の一人が挙げた指先を見ると……そこには三人の人影。

「ロイド！お前もか……」

皇王が愕然とした声で言う。

「申し訳ありません皇王様。始めからこうする計画でしたので」

三人の中心に立っている見た目が余り宜しくない修道服を着た男が叫んだ。

「世は！断罪のときを迎える！

最後の審判がこの大陸に齎されるのもそう先のことではない！
他ならぬ最後の審判を伝える女神イスラファル様の神託である！
審判を迎えたとき、生き残れる者は誰もいない！

しかし、イスラファル様を敬う者ならば必ずや救済を与えられる
だろう！」

男はそう叫ぶと息切れした。

「特にその男！

イスラファル様の夫を名乗る不屈き物であり、この大陸を平定した五勇者が一人、英雄よ！

お前こそ最も断罪を受け……」

言葉は続かなかった。

瑞樹の鋭い視線に射竦められた宣教師ノイアは言葉を発することが出来なかったのだ。

「……るな」

[illegible]

場の空気が一変した。

神導術師だと言っただろう。

何か自分の中に魔が巣食っているのを感じた、と。

魔導術師ならばこう言うだろう。

自らが穢れているわけではないが何故か清められている感覚がする、と。

場は混沌と化していた。

神力と魔力が混在する、この世の果て・混沌であるかのような空気はとても清らかさをウリにする宣教師には堪えられなかった。

神導術師は元々魔力という存在を実感しているが故に耐性はあったが、宣教師はその限りではない。

寧ろ神導術を使えない者が就く地位としての最高位が宣教師であつたのだ。

「これは不味いでしょう……行きますようか」

ロイドの言葉の後、三人は西の空へ飛び去っていった。

一方、瑞樹は力を使い果たして倒れこんだ。

倒れこんだ瑞樹は皇王親衛隊の手によって城内の医務室まで運ばれる事となる。

結局、実行人を捕らえる事ができないと言う後味の悪い結果となったが、これが王位継承事変と呼ばれ後のソルディバイト歴史書に載ることになるのだ。

王位継承式（後書き）

いくらのチート君でも自分の力を一度に使いまくったらそれは疲弊するでしょうよと。

過去話のなかで一番長い話となったような気がします……。

他のファンタジー書いている方はいつもこれくらいなのだろうか。

お気に入り登録（中略）ありがとうございます。

粉骨碎身で頑張っておりますので。

感想なども返事が書けることを知ったので順次返信しております。

王位継承式へセラティア編（前書き）

ちょっとした裏話。

前話でセラティアが場面から消失するという事態に見舞われていたので。

王位継承式へセラティア編

《セラティアⅡアイラスⅡカルバディアノス》

ロイド氏が「ちょっと出てきます」といって広場を後にしてから数分後、私は混戦の真っ只中にいた。

「ハア……ハア……」

何が起こったのか、突然市民達のほうから悲鳴が聞こえる。

それに気が付いて声の聞こえた方向に向かってから僅か数分の今の状況である。

「どういうことだ……？」

目の前には理解の出来ない光景が映っていた。

大都市の中心とも言っても過言ではないこの広場に魔獣が出現しているなどと言う事は嘗て聞いたことも無い。

「しかし……っ！」

目の前に迫ってきた魔獣を一体斬り捨てる。

「グオオオオオオオオ」

なにやらよく分からない雄叫びを上げている魔獣たちを次々と斬っ

ていく。

幸いにも敵個体その物は然程強くは無い。

しかし、数が多い。

城兵は基本的に出てきて市民を守っているようだし、そちらに向かったほうがいいかと判断した私は一目散にその場所へ向かう。

何とか合流した城兵たちと共に市民を魔獣から守っていると悲鳴が聞こえた。

ふと目をやると……そこには私の大事な妹、ルシアがいた。

「そんなっ！　ルシア！？」

向かおうとしたが、敵がまるで壁のように迫ってくるので動けない。

ルシアが屠られそうになったのを見て私は目を逸らした。

次の光景は、全く想定外だった。

どうやらルシアは助かったらしい。

代わりに男が斬られてくれたようだ。

「それも当然か……」

思わずそんな事を言ってしまった自分を戒める。

「（これでは城にいる貴族達と同じような考え方ではないか！）」
貴族達が民を導いてやる。

その代わりに民は貴族のために命を差し出せ。

一般貴族の間ではそのような教育が貴族の初等教育になっているらしい。

民が命を差し出すのは当然。

思えば嘗て奴隷市場で娘を買ったのは見たことのある貴族の男ではなかったか。

結局自分も貴族の端くれであると気が付いてしまった私は前に居た魔獣の攻撃に気が付かなかった。

そして向かってきた攻撃は……………私には当たらなかった。

目の前で誰かがその攻撃を受けたからである。

名も知らない一般兵。

私は、自分の醜さに気がついてしまった。

気が付くと、広場を青い光が包んでいた。

青い光の中心に居たのはあの男。

攻撃を受けたのに死んでいなかったのか、と言う事を考えたが男の外套は破れていて、身体にはきちんと穴が開いていた。

光と共に魔獣が消えていく。

広場が歓喜に包まれる中、私はその男を見る。

強い。

一目見てそう思った。

力が強いとかそういう問題ではなく、芯の強さというのか、それが全身から滲み出ている。

羨ましい、私はそう思った。

と、場の歓喜に沸いた雰囲気急速に萎んでいく。

空中に浮いた謎の男が居たからだ。

距離が遠かったから声は途切れ途切れにしか聞こえない。

「断罪………迎………。

最後の……。

生き残………ない」

それくらいしか聞き取れなかったが、見当はついた。

これは、イスラフィール教国が発行している聖書の一部だ。

何でも天使イスラフェルは最後の審判と呼ばれる時を知らせる役目を担っているとか。

幼い頃アリアに見せられた聖書にそんなことが書いてあった。

独りごちていると、また場の空気が変わっていた。

気持ちが悪い空気だった。

何ともいえない空気だったが、隣に居た魔導術師の顔を見ると真っ青になっている。

「おい、どうしたんだ？」

魔導術師は目を合わせると震えながら言った。

「魔力と……神力が………混ざっています。
ここは………混沌です」

魔力も神力も持っていない私には分からなかったがどうやらとても危険な物らしい。

ふと見ると、空中に浮いていた男は何時の間にも消えていた。

同時に妙な空気の重さも無くなっている。

男の周りには複数の人間が集まっている。

「あれは……ルシア？」

ルシアは天使との混血のため神導術を行使できることは分かっていた。

ルシアが必死に治癒術式をかけている。

ルシアの真剣な眼差しは、自分の代わりに傷を負った男を助けようとする力強い物のように見えたが、その中に何処か熱っぽい視線が混じっている事に気が付いた。

急に憎らしくなった。

ルシアにそんな目を向けられる男に対しても。

そんな風に嫉妬している自分を。

城内へ運ばれていく男に付き添っているルシアに私は結局声をかけることが出来なかった。

王位継承式へセラティア編（後書き）

お気に入り（中略）ありがとうございます。

不整合性を洗い出している最中であります。

融解の兆しと新たな争種（前書き）

若干短いかな。

融解の兆しと新たな争種

瑞樹は夢を見ていた。

青空が広がり、一面が緑の大地の上に瑞樹は立っている。

前方で金髪の女性が瑞樹に向かって手を振っている。

瑞樹はその方向に向かって歩いていく。

金髪の女性の顔は見えない。

黒く塗り潰されてしまっているのだ。

瑞樹がその女性の前にたどり着くと口を動かしているのが見て取れる。

「何を言っているんだ？貴女は誰だ？」

そう瑞樹が言うと、女性は落ち込んだ素振りを見せる。

だがやはり顔は見えない。

ふと、瑞樹が足元を見るとそこには水溜りがあった。

水面で反射している。

その水溜りのおかげで瑞樹は女性の顔を見ることが出来た。

しかし、見覚えがなさそうな顔だった。

「（誰……いや、俺はこの人を知っている？」

水溜りを更に見ると、波紋が広がっていた。

何度も、何度も。

その波紋を作っていたのは目の前の女性。

彼女は泣いていたのだ。

「（何故貴女は泣いているんだ？）」

そう訊ねようとしたが声が出ない。

そうこうしている間に彼女は消えていた。

いつの間にか青空は黒雲に覆われ、緑の大地は茶色の、枯れた大地へと変容していた。

そして、周辺から湧き上がるのは表現が出来ないモノ。

形状は液体のようである。

どす黒いその液体はやがて瑞樹の周りに集まり始める。

瑞樹は抵抗が出来なかった。

決して押さえつけられているわけでもないのに身体が反応しない。

集まった液体は瑞樹を覆っていく。

全身が埋まる直前に瑞樹はふと口にした。

「ああ……これは澱みか」

そこで瑞樹の意識は途切れた。

瑞樹が目を覚めたのは天蓋付きのベッドの上だった。

ふと見るとベッドの横にあった椅子に誰かが座っている。

「アリア……？」

その声に反応したアリアは瑞樹と目を合わせると足早に部屋を出て行った。

一人きりになった部屋で瑞樹は独りごちた。

「今、俺は何て……？」

認識したのだ、アリアを。

これまではただ存在する有象無象の中の一人だったアリアと、瑞樹は正面から向き合ったのである。

しかも、不思議と憎しみを覚えなかったのだ。

依然イスラフィール教国への憎しみは消えては居ないが、瑞樹はアリアに対して気を許し始めている自分に気が付いたのだった。

しばらくして、アリアが連れて来たのはそうアリアと背の高さが変わらない少女だった。

瑞樹は、何処かで見たような気がしたが記憶に残っていなかった。

「あの、ありがとうございました！」

少女から向けられた第一声はそれだった。

「え……っと、何のことかな」

瑞樹が困惑した表情を見せる。

『あつすみません』と身を乗り出していた状態から元の体勢に戻る。

「私のことを、体を張って助けてくださいました」

瑞樹は思い出した。

自分の背中に穴を開けそうになったときに助けた娘だと。

「大した事はしていないよ。えっと…君は」

とりあえず訊ねた。

「申し遅れました、私はカルバディアノス第二皇女、ルシア＝ディ
ーヴェント＝カルバディアノスです」

その名前を聞いて思い当たる節があった。

今代の四大国の王家は偶然にも全てが天使族との契りを交わしているのだ。

勿論天使崇拝の某教国は除くが。

それに加え、ソルディバイトの天使族の血を引く者は既に天に召されている。

名はセシリア＝アルデヴィテ＝ソルディバイト。

この二カ国を除く残りの二大国、アシュメダイアとカルバディアノス。

ラグネイア、そしてこのルシア皇女である。

「お姉様に聞きました。貴方様は英雄なのですよね？」

「まあ……一応」

英雄と呼ばれるのを余り好まない瑞樹は言葉を濁した。

「それに、旅をなさっているとか！」

「え……まあ一応ね」

流石に復讐のためとも言えない瑞樹はまた濁した。

「私も連れて行ってください！」

「ええええええええええ！」

その言葉と同時に部屋に入ってきたセラティア、シャーレヴィヒ、ラグネシア、ラッテリーは叫んだ。

ラッテーレなど、普段は絶対に上げないような叫び声を上げたので瑞樹は驚く。

「まあ、こうなる予感はしたんじやがの」

一人、デュルシールは落ち着いていたのだった。

一拍遅れて瑞樹も返事をする。

「止めておいた方がいいかもしれないよ？
君のお姉さんも多分止めると思うし」

ルシアがじつとセラティアの顔を見る。

セラティアは瑞樹の言葉に頷いていた。

もう一度じつと見る。

ルシアとセラティアの目が合った。

セラティアが困惑の表情を浮かべた。

周囲に助けを求めようと目を逸らしたのを確認してルシアは言った。

「お姉様が諦めてくださったので大丈夫です！」

強引に、同行を申し出るのだった。

その後セラティアは自らの色々な意味での不甲斐なさに悔し涙を浮かべることになるのだった。

融解の兆しと新たな争種（後書き）

身長のお話が出ました。

単純比較すると、

セラティア＞ラグネイア デュ＝シール＞シャールヴィヒ＞ラ＝
テール＞アリア ルシア、と言うところです。

勿論ラ＝テールとデュ＝シールは人間の姿のときですよ？

終結（前書き）

第一章終了です。

お気に入り（中略）ありがとうございます。

終結

王都、リ・アルⅡソラーレを震撼させた王位継承事変より二日後。

瑞樹は単独で王都より距離がいくらか離れた場所に居た。

「久しぶりだな」

そう言つて手に持っていた花束を手向けた。

瑞樹の前にあるのはおよそ瑞樹の背と同じくらいの高さの白い石柱。

初代ソルディバイト皇王の墓碑である。

「随分長い事来ていなかったから荒れているかと思つたんだが……
綺麗に掃除されているな」

周りには無節操に草が生えているなどと言う事もなく、墓碑自体も
風雨に晒されているとは思えないほどに綺麗であつた。

「全く……お前は楽でいいよな、竜也」

矢来竜也。

後に竜也Ⅱソルディバイトと名乗る彼は瑞樹と同郷の出身であつた。

瑞樹が眠っている間に竜也は天寿を全うしたのだ。

「いや……楽じゃないか。あの戦いを終えた後の俺達はひどかつた」

空を見上げ、過去の回想に浸る瑞樹。

しばらくそこに立ち尽くしていると声が聞こえてきた。

「瑞樹様——！」

走ってくるのは二人。

シャーレヴィヒとラ＝テールである。

瑞樹の目の前まで駆けてきたシャーレヴィヒは息を弾ませている。

対するラ＝テールは落ち着いた様子を見せているが、節々から疲れを感じさせる。

「どうしたんだ？」

その瑞樹の問いにシャーレヴィヒがじつと瑞樹に目を合わせる。

「どうしたって——いきなり瑞樹様がベッドから居なくなっていたから城中大騒ぎですよ！」

さあ、早く帰りましょう?。」

そう言ってグイグイと瑞樹を引っ張る。

「行く」

ラ＝テールも同じように引っ張る。

「わかった、分かったからちょっと緩めてくれ」

龍族の強い腕力で破れそうになっていた外套を確かめつつ瑞樹が言った。

「ごめんなさい…」

「うん、帰ろうか」

瑞樹は服がダメなら——といって両腕を掴まれたまま城へと向かった。

決して後ろを振り返ることはしなかった。

明くる朝、瑞樹が居たのは謁見の間。

数日前にはレティアとその仲間達が集っていたそこは、現皇王の存在によって威厳を取り戻していた。

「さて、此度の働き大儀であつた……と言いたい所なのじゃが、お主はわが国の兵ではない。

楽にしてくれ」

「それはどうも」

その言葉を聞いた途端王の目の前で胡坐をかいて座った瑞樹。

一応人払いがしてあるのでそれを咎める者は居なかったが、万が一にでもこの光景を見たならば折檻されていても仕方がないと言えるほどの挙動だった。

「お主の要求を一つだけ聞いてやろう」

躊躇うことなく瑞樹は言った。

「俺が貸してやった土地を返してもらいたい」

ふむ、と唸った皇王は腕を組んだ。

「今更内政をしようとも思ったのか？」

瑞樹は首を横に振った。

「いいや、姫様たちとの約束だからな。それに契約でもある」

「契約、とは……そうかあれの事か」

独りで納得した皇王。

「分かった、なれば土地を返そうではないか」

「助かる」

ところで……と皇王は話を変えた。

「これから主はどうするつもりじゃ？」

「まだ一人しか約束を果たしていないから、後三人を。
まだまだ世界を周っていないからな」

そう言うつと、皇王は瑞樹をどこか羨望の眼差しで見つめた。

「そのような気まぐれが出来る身分と言うのは真、羨ましいのう」

「まだ若いからな」

「わしよりも齡は重ねておるだろうが」

「違うない」

二人は笑いあつた。

「話を戻すが……我が娘を貰つてはくれんか？」

「貰うも何も本人から求婚されたが」

皇王の顔が一瞬蒼白になった。

「そ、そうか……しかし主は放浪するのじゃろ？なれば娘はここに……」

最後まで言い切る前に正面の大扉が勢いよく開いた。

「お父様！私は瑞樹様に付いていきます！」

突然の娘の登場に皇王は固まった。

「ゆめゆめ私の邪魔をなさらぬようお願いしますね、お父様？」

仮面が発動したシャーレヴィヒに一国の王はタジタジだった。

「分かった、分かったから落ち着くのじゃ」

一瞬で皇王は折れた。というかそもそも抵抗値すらなかったのだが。

親の承諾を取り付けたシャーレヴィヒは瑞樹のほうに向き直った。

「いつ出発にします？」

「……………明後日」

「はい」

仲睦まじく会話をする娘婿への嫉妬と、娘が自分に対するときの態度との豹変振りを見せているのを見て皇王の胃がギリギリと痛むのだった。

正式な婚礼をすれば、瑞樹が国に縛り付けられてしまう事にもなりかねないので形式的な婚礼を行うことが決められた。

その間に取り戻した土地を視察したり、同行メンバーの確認を行ったりと言つ事を行つて瑞樹は数日を過ごした。

そして、婚礼の儀の翌日。

瑞樹は自らが得た領地・ジパオンへと針路を向けるのだった。

終結（後書き）

第一章終了です。

キリがいいので報告させていただきます。

これ以降の更新予定ですが、月一回と言う事にさせていただきます。続話をお待ちの方には大変申し訳ありません。

一応、人生の一大分岐点ともいえる大学受験を控えている身でありますので多少のことは目を瞑っていただけると有り難いです。

途中で打ち切る、と言う事は無いのでそれだけはご安心ください。今後もよろしくお願いいたします。

閑話のーとある一日の瑞樹（前書き）

前回お知らせさせていただいた更新頻度について若干の修正を入れます。

月一回↓↓↓不定期とさせていただきます。

お気に入り登録（中略）ありがとうございます。

閑話の一　とある一日の瑞樹

王都、リ・アル＝ソラーレは以前の活気を取り戻していた。

あの事件があつた後、市民達の手によってレティアが建てた掲示板や看板は全て撤去された。

また、ソルディバイトで最も影響力の高い新聞である皇国通信は事件後現経営陣の全員を役員会議で全員解雇。

数日後に復活した新・皇国通信の一面は経営陣が膝を突いてうなだれている様子が映写機によって撮られた物が載せられている。

また、周辺国家との国境防衛を占め、レティア支配時に閉じられていた関所の門は再び開かれた。

これにより経済大国・ソルディバイトは復活の目処が立ったのである。

そんなある日、瑞樹は城下町の中心に在る、とある場所を目指していた。

周囲では瑞樹を見た一般民が映写機を構えるという連鎖が発生していた。

また、瑞樹の前には道が出来ていて他の市民は道の端の方に避けていた。

「まあ、仕方が無いよな。」

あれだけ目立っただし、最後のなんかもう恐怖の対象だったからな」

市民の顔を見てみると、好奇心四割、恐怖心三割、好感三割と言ったところである。

溜息をつきながら瑞樹が歩いていると、不意に瑞樹に向かってトコトコと歩いてやってくる少女を発見した。

瑞樹が注目したのは三点。

まず初めに顔。

推定年齢は人間年齢で7〜8歳と言ったところである。

次に見たのは耳。

人間とは異なる部分から生えている耳は間違いなく少女が獣人であることを示していた。

そして、最後の注目点はしっぽ。

服の間から伸びているしっぽはふさふさだった。

瑞樹の目の前までやってきた少女は瑞樹の前までやってくると、瑞樹の手を握った。

「お兄ちゃん、助けてくれてありがとう!」

それだけを言い残し、また両脇にある人ごみに紛れていく少女。

目で追うと、少女の母親らしき人が少女の頭を撫でていた。

それを嬉しそうに享受する少女。

瑞樹はその光景を見て穏やかな微笑を湛えるのだった。

このような事例は散発した。

やってくるのは老若男女問わずであった。

時には手紙を渡されたり、何故か花束を贈られたり。

中には高級品と思われるものも散見した。

一つ一つ瑞樹は丁寧に受け取っていった。

その結果、目的地に付く頃には瑞樹は『倉庫』と自らが名付けた異空間に贈り物を放り込んでいかなければならない状況に追い込まれていた。

後に瑞樹が通ったこの通りが市民の間でプレゼントロードと言われることになる。

年に一度この通りで贈り物を贈る習慣が出来るようになるのだが、それはまた別の話である。

瑞樹の目的地はギルドだった。

看板には大きく大陸大手通商監視連合と書かれている。

看板を見て確認を済ませた後瑞樹は中に入ってしまった。

中は喧騒に包まれていた。

ギャンブルに興じる者、酒場で酒を大量に啣る者、親しい面々でテーブルを一つ使って話をしている者もいる。

ここには、時代にそぐわない所謂未知の遺産と一般的に呼ばれるものが多数存在している。ロストテクノロジー

例えば、ギルドの依頼掲示板である。

とある世界の日本と呼ばれる国から持ち込まれたと伝えられているその掲示板は発光して文字を表す機能を持っている。

当時持ち込んだ者は『これは電光掲示板って言っただけだな』と言ったらしいが、誰もそれを覚えては居らず、ただ依頼掲示板と呼んでいるのである。

周囲の様子には然程関心を持たず瑞樹は依頼受け付けカウンターへと向かった。

通常はここで依頼を受ける旨を伝え、それが認められた場合ギルド内中央にある掲示板に依頼受け付け終了、と記載されるのである。

この掲示板は他の国家内に設置されているギルドと相互通信を行っているため偶に他地域の以来が舞い込んでくる事がある。

その場合は地域を超えて共同で依頼に当たる事もあるのだが、瑞樹は依頼を受けに来たわけではない。

「ギルド証を作成したいんだけど、北東ギルド長はいる？」

カウンターに居た受付嬢に瑞樹が訊ねた。

「えっと、作成なら私が承りますが……？」

「いや、ギルド長に用事があったから序にと思って」

「そういう事なら……メリア、ちょっとマスター呼んできて」

「分かりました〜〜」

受付嬢にメリア、と呼ばれた少女が酒場のほうへ駆けて行く。

やがて酒場から引き摺ってきたのは所謂酒場のマスターであった。

「あの、これ酒場の……」

瑞樹がそついうと同時に受付嬢が溜息をついた。

「えええ〜紛らわしいのよアリル〜」

「いいから行つてきなさい！」

受付嬢・アリルに叱られたメリアは二階へと上がっていった。

今度引き摺ってきたのは、街中に居ればただの住民と大差ない格好をしているが雰囲気醸し出している老爺だった。

「ええい、何じゃ！僕は忙しいと言つておろうが」

瑞樹に向かって怒りを顕にする老人。

「爺さん、俺を忘れたのか？」

瑞樹の顔をジロジロと見て、暫し考える素振りを見せた後驚愕に包まれた顔を見せた。

「お主、瑞樹か！！？」

「そつだよ、ただいま爺さん」

ギルド長の大声に場が静まり返った。

勿論衆目が集まったのはギルド長と話をしている瑞樹である。

「——あいつ、誰だ？」

「ギルド長に喧嘩でも売ってるのかしら」

「でも顔はイイんじゃない？」

ギルド長がカウンターの後ろにある肖像画の前に立つ。

「お主が来たということはこの時ということなのじゃろっ？」

「そうだね、王様の許可は貰ってきたから」

肖像画に注目していた傭兵の一人が何かに気が付いたかのように大声を上げる。

「あの肖像画に描かれている人、あいつにそっくりじゃないか!？」

「——そう言われてみれば……」

「確かに似てるわね」

そして、ギルド長が肖像画を外す。

中にあつたのは遠距離通信機。

これも掲示板と同じく遺産の一つである。

現在大陸における遠距離での通信手段は飛脚もしくは導術による手紙通信が主流である。

そんな中通信機だけは解体するなと提供者に言われているためこれも遺産指定されているのだ。

ギルド長が通信先指定を全部の箇所を設定し、通信を行う。

「北東ギルド長・ローガスじゃ。これは、ギルド特別条例1条に基づく措置じゃ」

そう言つと通信機を瑞樹に渡す。

「あー、あー、通信試験中。通信試験中。

こちら中央ギルド長、天河石瑞樹。

特別条例の発令により、中央ギルドの活動再会を宣言させてもらう。

各ギルド長は三日後のギルド大会議に参加するように」

「北西ギルド長・ローレンス了解」

「南西ギルド長・ロレンツ了解」

「南東ギルド長・ローヴァス了解」

その返答を聞いて瑞樹は通信を切った。

そして、カウンターにあつた依頼掲示板を操作する。

傭兵達が依頼を受けるときに掲示板を利用するのと同様に依頼主も当然掲示板を利用するのである。

依頼レベル：最重要（緊急）

依頼主：中央統括ギルド長・天河石瑞樹

依頼報酬：無し

依頼内容：中央ギルド再編のための人員募集。詳細は各ギルド長に。

瑞樹はこれだけを打ち終わると、静かになったギルドから出て行った。

暫くの沈黙の後、カウンターにいたアリルが依頼の承認手続きを行った途端カウンターに傭兵達が集まった。

ギルドを出て暫く歩いていると、瑞樹は見知った人影を見かけた。

「何やってるんだ？」

そう問いかけられたのはルシアだった。

「お土産を買おうと思ひまして」

「そうか、それはきっと王様も喜ぶだろうな」

そう言った瑞樹に対しルシアは不思議な物を見た、と言わんばかりに首をかしげた。

「これは瑞樹様への物なんですけど……」

瑞樹は困惑した。

「俺もここににいるのに、お土産の意味あるのかな？」

「ダメですか……？」

上目遣いをして瑞樹を籠絡に掛かるルシア。

その行為に異を唱えられるほど瑞樹は大人ではなかった。

「いいや、ありがたく戴くよ」

それを聞いたルシアが花が咲いたような笑顔になったのは言うまでもない。

ギルド条例

第一条 ギルドは国政に関して原則的に不干渉である

第二条 各地に点在するギルドを取りまとめるのはソルディバイト皇国にある北東ギルド

そしてカルバディアノス皇国にある南東ギルド
イスラフィール教国にある北西ギルド
アシユメダイア連合国にある南西ギルド

第三条 ギルドの権利は如何なる国においても保障される

中央ギルド特別条例

第一条 ギルド創設者、天河石瑞樹が必要としたとき特例として中央ギルドが設立される。

第二条 中央ギルドは四箇所の大ギルドを統括する役割を持つ最上位のギルドである

第三条 受けられる依頼は領域を問わない

閑話の一 とある一日の瑞樹（後書き）

ギルドは、考え方としては大使館程度に思っておけばいいと思います。

治外法権です。国と反発するようなことはしませんけどね。
瑞樹はギルドの創設者でした、というオチ。

閑話の二 婚礼の儀（前書き）

閑話の二、です。

これで総括としての第一章は終わります（本編としての第一章は既に終了していますので）

閑話の二 婚禮の儀

「ふむ……彼がそのような事を」

現ソルディバイト皇王は唸った。

「はい、特にわが国には問題はないと思うのですが」

彼の前に傳っているのは皇王の一番の側近である近衛兵長。

四十過ぎの貫禄を持ったベテランである。

瑞樹がギルドに向かっているのと同時刻、彼らがいるのは謁見の間と繋がっている皇王の待機室である。

謁見の間に出ることがあるときに事前準備などを行う部屋である。

現在彼らが話し合っているのは瑞樹が欲していた旧ジパオン領のことであった。

「あそこは確かにジパオンの領地であったがあれは四国会談でわが国の租借地となっていたな」

「ええ、租借地とは言いましても租借料などは在ってない様なものですが」

旧ジパオン領は北東部にあるソルディバイトのなかでも最も中央部に近い地域である。

嘗ては多種族の暮らす風光明媚な土地であったが、君主無き後急速に廃れていった地域である。

現在その地域に残っているのは当時立てられた建築物の残骸程度である。

時々盗賊が根城として使う事もある場所のため、度々ギルドに討伐依頼が寄せられるのだ。

「しかし、彼はあそこをどうするつもりなのじゃろうか……」

「私にも理解しがたいです……彼に一度伺ったときも、のらりくり避けられたので」

暫く考え込んだ二人だったが皇王が唐突に話を変えた。

「それよりもまずは婚礼の儀じゃがな……」

「そうですね……」

頭を抱える二人であった。

二人が話し合っているのと同時刻、シャーレヴィヒの部屋は散らかっていた。

主に服、服、服、装飾品である。

「中々良いのが決まりません……貴女はどう思う？」

部屋の隅に控えている侍従の一人に尋ねる。

突然に振られた侍従は困り顔を浮かべながら当たり障りの無い答えを返した。

「姫様がこれ、と思ったものがよろしいかと」

「そうなのですけれど……」

シャールヴィヒが考え込んでいると部屋の扉が勢いよく開いた。

突然の音に侍従と共に居た兵が一瞬迎撃の構えを見せた。

「シャル、貴女婚礼の儀をやるの!？」

入ってきたのは声を上げたラグネシア、部屋を覗き込むラッテレー、デュ＝シールであった。

「あら？セラティアは何処に行ったのかしら？」

シャールヴィヒのその疑問に答えたのはラッテレーだった。

「セラティア……朝一番に……帰った」

「じゃあルシアも？」

ラグネイアが首を横に振った。

「いいや、あの娘は瑞樹さんを探しに街へ出かけてったわよ」

「そんな……私も行きたかったのに……」

項垂れるシャーレヴィヒ。その様子を呆れた目で見ていたラグネイ
アは真剣な目を見せた。

「そんな事より、本当に儀式をやるのかって聞いているのよ」

その質問に気を取り直して笑顔で答えるシャーレヴィヒ。

「勿論です（＾＾）」

その悪魔をも殺せそうな笑顔を見てガツクリと膝を突いたのは二龍だった。

「そんな……瑞樹様、私ともまだやってないのに……」

「主にだけ仕えたというのに……我は望まれておらぬというのか……？」

もう見るも無残な精神状態を見たシャーレヴィヒは閃いた。

「そうです、二人も一緒にやったらどうかしら」

[illegible]

!!!!!!

城内に三人＋侍従達＋兵士達の声が響き渡った。

「ふむ、何か叫び声のような声が聞こえたと思ったが」

「大方兵士の訓練中なのでしょう、気合が入っていますね」

王とその側近は見当違いの答えを導き出していた。

「しかし陛下、ジパオンを復活させるということはギルドがまた…」

…」

ギルド条例は大陸中の国に知れ渡っている。

正確に言えばギルド自体が広めたのだが。

嘗ての正史の始まりとされている魔獣との大陸戦争の折に義勇兵を募った仮ギルドから現在のギルドは成立しているのだが、当時の記録として中央ギルドを立てられたのは旧ジパオン領、現在のソルデイバイト南西部である。

「わが国からギルドが抜けるといふ事の影響は少なくとも無いでしょう」

「むむ……とはいってもこの都市にあるのは独立支部のような物であるから然程問題は無いと思うが？」

「そうですね……」

そう言って話を進めっていると部屋の扉が勢いよく開いた。

入ってきたのは市内巡回の兵士であった。

近衛兵長は叱責こそしなかったものの苦々しげにその様子を見た。

「王の面前だぞ、礼儀がなっておらん……」

ボソツと呟いたが兵士には聞こえたらしく表情が引き攣っている。

「して、何用かね。結構な事態だと思うのだが」

「申し訳ありませんでした。市内で話が広がっておりますので報告させていただきます。」

ギルドが、中央再編を行うと発表した模様です」

王と近衛兵長は顔を見合わせた。

「それは事実なのか？」

「はい、ギルドに所属している構成員の言質を取りましたしギルド長にも話を伺いました」

若干の越権行為すれすれのものが含まれていたが二人は聞き流した。

「そうか……それでギルド長は何と？」

「はい、中央ギルド特別条例に基づく物であると」

「中央ギルド特別条例？」

また二人は顔を見合わせた。

そのようなものは聞いた事が無かったからである。

「こちらがその資料になります」

兵士から渡された一枚の紙を手にとって二人は眺めた。

「ふむ……やはり彼がギルドの創立者……」

「ということは彼はやはり『英雄』で間違いありませんね」

「なれば認めなければなるまい、旧ジパオン領の返還を」

「そうですね……」

するとまた別の兵が部屋の中に飛び込んできた。

「今度は何だ！？」

流石の近衛兵長も若干、多分に怒りを含んでいた。

「申し訳ありませんッ！姫様が、婚礼の儀を四人で行うと仰ってお

ります！」

「よ、四人じゃと!？」

皇王も驚きを隠せない。

自身数人の正室を迎えているが、瑞樹除く三人を一度に迎え入れるようなことは聞いたことが無い。

「それは真か？」

「はい、現在姫様とお二人……龍の姫君は共にお召しになる服を選んでおられます」

「ふう……分かった。婚礼の儀は今宵行う。そう伝えておいてくれ、城内の者に」

「了解しました！」

元気よく兵達は出て行った。

そんな兵の後姿を見つつ、二人は深い溜息をついたのだった。

その夜、謁見の間。

中央を歩くのは一組の男女。

瑞樹とシャーレヴィヒである。

この世界にはウエディングドレスなるものの習慣はないため、普段貴族達のパーティーなどで着用するドレスを使用するのが一般的である。

最も、公式な婚礼の場合は新しく皇家御用達の服飾専門店で仕立ててもらうのだが。

瑞樹が着用しているのは上から下まで青みがかった黒のスーツであった。

その姿は瑞樹の線の細さをより魅せている。

一方のシャーレヴィヒが着用しているのは純白のエンパイアドレス。仕立てて貰うまでもなく、既に婚礼衣装をシャーレヴィヒは持っていたのだ。

衣装棚から様々なドレスを取り出しているところに瑞樹がやって来て選んだのがこのドレスである。

若干胸元に意識が行ってしまうのが難点？であるが、割と着易かったのである。

因みに何故これまで一度も使ったことの無い服が衣装棚に残されていたかというと、初代ソルディバイト皇王が妃に着せたものをその

まま受け継いでいたということであつた。

幾らかの神力と魔力を内包していることをアリアと瑞樹がそれぞれ見抜いた。

その力によつてこのドレスは今まで朽ちることなく、食い破られる事も無く綺麗な状態のまま残っていたのである。

二人はそのまま真つ直ぐに玉座の前に立つた。

そしてそれと同時にその後ろから二人の姫がやってくる。

龍の姫君、デユ＝シールとラ＝テールである。

彼女達が着けているのは龍族の儀礼衣装。

燃えるような紅と全てを凍らせてしまいそうな蒼。

それぞれを纏つた二人はシャーレヴィヒとは瑞樹を挟んで反対側の位置に立つた。

現在この謁見の間にいるのは各部門大臣級と、城内につめている人間の大半であつた。

勿論、アリア、ルシア、ラグネイアもいる。

皇王は玉座より立ち上がった。

「汝、瑞樹＝アマゾナイトはソルディバイトの血脈を受け入れる事

を認めるか？」

「認める」

「汝、シャーレヴィヒ」ツヴェルノス「ソルディバイトは良妻賢母となることを誓うか？」

「はい」

残りの二人は省略される。

龍の儀式にのっとってやる必要があるからである。

「それでは、汝等の未来に幸多からんことをここに願う物とし、契約の儀を――」

契約の儀とは、別名接吻の儀の事である。

これによって二人の間における精神部が交感^{リンク}され、絶対の誓いと成り得るのである。

「んっ……………」

口付けを交わす。

シャーレヴィヒの頬が赤く染まっていたが瑞樹は特に気にする事なしに続けた。

「んむう……………」

シャーレヴィヒから唇を離し、反対を向いて二人にも口付ける。

こちらは頬であつたが。

十数秒に及んだ口付けをもって、婚礼の儀は終了した。

十数秒の間、皇王が拳をワナワナと震わせていたのに気が付いたのは極少数であつた。

儀式の終了後、顔が火照つたままのシャーレヴィヒを彼女の部屋に送り、そのまま瑞樹は夜の営みに没頭するのであつた。

これは半ば儀式の終了を知らせるために必要な事であるのだ。

お互いを精神的に繋げた口付けの後に身体的にも繋がることによって互いが互いを思いやる事が出来たり云々云々……と歴史書に書かれているのだ。

それ故に妨害するものは誰も居なかったが。

正確なところを言うと、ラグネシアが他の連れ合いの姫達の覗きを押さえ込んだのであつた。

同じ夜、皇王と近衛兵長は自棄酒に手を伸ばすのだった。

翌日、婚礼の儀の終了と旧ジパオン領の返還の旨が公布された。

周辺諸国はこの出来事以降慌しく動く事を余儀なくされるのだった。

閑話の二 婚礼の儀（後書き）

分かっていることだとは思いますが、瑞樹は年齢に問題はありませ
ん。

世界観的にも、現実的にも。

本編の第一章は二話前で終わりましたが、閑話も含めて一区切り、
となります。

動く国、動く人、動く時代（前書き）

更新が非常にゆっくりで申し訳ないです。

ユニークユーザーが10000人も……恐悦至極であります。

動く国、動く人、動く時代

「——諜報員からの情報は以上です」

「解った。今後情報収集を続ける」

「はっ」

二人の人間が会話をしていた部屋は光の入らない真つ暗な部屋だった。

報告を行った兵士の気配が消えると部屋に残っていた男は深い溜息をついた。

「それにしても……英雄とはな……」

広く大陸中に伝承として残されていた英雄伝。

大方吟遊詩人の作り上げた創作童話だと思っていた男は驚きの表情を浮かべるほか無かった。

男が生まれてきた時代は既に英雄譚は民衆に広く親しまれる程度の物であり、特権階級と纏められる貴族、皇族血統の者達が気にする程度の物ではなくなっていた。

そこに先ほどの兵士からの報告である。

「突如ソルディバイトに現れた英雄か……」

ソルディバイトに現れた英雄と名乗った男。

彼はソルディバイト皇王により叙勲されたとも言われているが真偽の程が判らない。

「こんな事では父上に申し訳が立たないな」

そう言っただけの男は現在は暗くて見えない壁画を見据えた。

「カルバディアノスを嘗ての帝国に……か」

病床で繰り返し繰り返し呟いていた父親の言葉を反芻する。

この男こそセラティアの父親にして今代のカルバディアノス皇王であつた。

しかしこの時の諜報員の情報は些か遅かつた。

瑞樹がソルディバイト第二皇女と婚礼の儀を済ませており、ソルディバイト皇王により割譲された旧ジパオンの領主となり、その上大陸各所に存在するギルドとも繋がりあつていたという非常に重要な用件すら皇王には伝えられていなかったのだから。

「そうか、奴がこの大陸に舞い戻ったか……」

都市にやってきた商人の話を聞いたアシュメダイア王・ルッキード
「ルクスエリア」アシュメダイアはどんよりと曇った空を見ながら
言った。

「今日はルクシエリアの笑顔が見られないな……」

曇り空を見てそんな事を言うルッキードを見たら瑞樹がツツコミを
入れていたかもしれない。

基本的に魔人族は長命である。

異種交配を行って成立してきた血統は力を強めた。

一般的にヒトと呼称される人間族は平均寿命が大凡一世紀であるの
に対して、血統種にもよるがそれでも最低二世紀ほどは生命を維持
できるのである。

因みにルッキードは万世界共通に畏怖される存在である吸血鬼と人
間族の血を引いている。

一般的にヴァンパイア・ハーフと呼ばれる存在である吸血鬼族は吸
血鬼の超人的な能力を継承しつつ主要な活力を血液以外の普通の食
物で摂取できる進化族である。

同じ魔人族として言われる獣人系やその他諸々の種族とは比になら
ない。

但し龍族は除くが。

「さて……今回は何をやらかすのか」

何処かそれを楽しむかのように笑みを浮かべつつルッキードは杯を空に掲げた。

イスラフィール教国中央都・イスラマイル。

ここには国の中枢機関が存在する。

教皇庁である。

国が総力を挙げて崇めている天使イスラフェルを最上に置き、その下に教皇、枢機卿と並んでいるのだ。

あくまで国のトップはイスラフェルであると主張し、周辺諸国からの苦情を全て『我らが主、イスラフェル様の名の下に』で受け流しているのだから強ちこのシステムもバカには出来ないのである。

そして中央都にはもう一つ重要な施設が存在する。

国内の全ての教会の頂点に立つ中央聖教会である。

毎年天使再臨と予言された日に中央聖教会にて行われる国民総礼拝。^{ミサ}

そしてこの日、中央聖教会には民衆が集まっていた。

喧騒に包まれている教会内であつたが、壇上に一人の男が登るとその空気は一変した。

「我らが主、イスラファエル様の恵みに今日も感謝の意を尽くさん！」

そう言つて民衆の心を掴むのは枢機卿筆頭・バーデンⅡサンクテットⅡイスラフィール。

アリアの父親にして、祖父殺しの男である。

壇上の壁際に並んでいるのは彼に心身共に捧げた妻達である。

「さて、敬虔なる信徒である諸君に伝えておかねばならないことがある」

場がザワついた。

「先ごろ、隣国にて英雄の存在が確認された」

喧騒が大きくなった。

「静かに！我らが主の面前であるぞ」

再び沈黙が教会内を満たした。

「諸君等も知つてのとおり英雄は我らが主を嘗て辱め、陥れた憎き存在である。」

主が墮天の危機に見舞われたのも奴が原因であることは明白である。

我々は主のために行動を開始する事を決めた！

我らが主も必ずや我々の行いを見守っていてくれるであろう！

諸君らには協力して欲しいのだ！！」

再び発生した喧騒は、何時しか方向性を持った物へと変わっていた。

それを見たバーデンは民衆には見えない程度の微かな笑みを浮かべていた。

民衆は誰一人気が付かなかった。

その中にただ一人、イスラフィール教国に属さない者が居た事にも。

「これは不味いね……早くギルドに知らせないと」

彼の名前はルグス、北西ギルド所属の国家諜報員である。

その情報は、同日中にイスラフィール教国の影響がある地域のギルドに伝えられる。

教国内のギルドが全て国外へ移転したのと、イスラフィール教国が諸外国へ通じる主要路を全て封鎖したのはほぼ同時であった。

結果的に教国内にあったギルド所属の傭兵は一部を新天地に残し、残りは中央ギルド所属となるのだった。

時代は、急速に変革を始めた。

動く国、動く人、動く時代（後書き）

二章導入です。

ごちゃごちゃが始まりますが、とりあえず次話からは再び瑞樹サイドです。

大陸二大会議（前書き）

受験勉強の片手間です。（言い方悪かったかな……？）
執筆に割ける時間が減っていく……。

大陸二大会議

アルベダイド大陸には二つの大きな会議が存在する。

一つは大陸の国々——小国も含めると百あるかないか——の代表が一同に会して行われる全大陸和平会議である。

文字通り国同士の折衝を手助けしたり、魔獣被害などの情報を共有するためのものである。

会議が行われるのは年周期ではなく、一年を分割する栄の月、枯の月、盛の月、衰の月の各月ごとに行われる。

全代表が集い会議を行う事もあれば、特定の数力国のみで行われる事もある。

最も、北東、北西、南東、南西に覇を唱えた四力国が結局のところ実権を持ち、その他の小国はそれぞれが属する地域の大国に依存する、云わば州、と区分されているため、小国自身が議論を巻き起こすなどという事は起こらず、結果小国が皆集まる事は余程重要な事でもない限りはあり得ないのであるが。

しかしこの日の光景はその滅多に起こりえない状況に加え、これまで一度たりとも起こらなかったことが起きていたことをまざまざと見せ付けた。

長机を幾つか並べ、正方形を作る。

各辺の中心に大国の代表者が座し、その横に座るのは大国と同地域に在る国の代表者。

並び順は無用な争いを避けるため首都との距離で決められている。

しかしこの日は正方形が成立しなかった。

ある一辺に並ぶはずの国々の代表者は誰一人として現れず、その代わり^に他の三辺の席は全て埋まっているという奇怪な状況。

この会議の場が持たれてからも大同士の戦争は幾度か行われたものの、そのときですら大同の代表者が会議に参加しないという事は無かった。

それ故に戦争の早期終結などということが可能であり、会議の権威は最上の物として保たれてきたのである。

「一体どうした事が……」

誰が発したのかわからないその声は、議場に響き渡った。

「此れほどとはな……」

今度声を発したのは北東の王、ソルディバイト皇王・ヴォルケイア
「ライ」ソルディバイトだ。

その声が伝わった途端議場は喧騒に包まれた。

一見統一性がなさそうに見えるこの喧騒も、暗示している事は唯一つ『不安』である。

「だがまあ会議を始めようじゃないか」

カルバディアノス皇王、フォルツァ「アルブ」カルバディアノスが飄々とした態度で場を促す。

セラティアの前で見せる威厳が何処に行ってしまったのかというくらい今の彼は軽かった。

「そうだな」

残る大同の王、ルッキードの同意により今回の全大陸和平会議は始まった。

今回の会議のスタンスは専ら質疑応答形式となった。

瑞樹の存在と現在の動向を熟知しているヴォルケイア王に、規模を問わず他の国々が質問をぶつけていく。

曰く、「英雄と呼ばれる人物とソルディバイトの同盟如何」や、「ギルドの長年の規律を侵す行為如何」などなど。

基本的にギルドについての質問には答えられない、というより答えを持っていない。

先の、ギルドへの不干涉という理由と、もう一つの会議にて回答が得られるという二つの理由からである。

ルッキードは以前から瑞樹とは色々あった仲なので特にこれと言った質問はしない。

唯一つ、会議の終盤にヴォルケイア王へ放った一言。

「これから起こることは、面白いか？」

これだけである。寧ろこの一言こそルッキードの本質を示す物であり、これ以上にも以下にもルッキードを示す事のできる言葉は無いであろう。

ある程度の質問を終えたフォルツァ含む各国の代表団も落ち着きを取り戻す。

しかし、そんな場を変える者がある。

本来起立の必要の無い会議においてそれは起立する。

それが起立したとき周囲が浮かべる表情は主に二種類。

「何時ものが来た」という期待と「また喧しいのが」という諦観。

そんな二種類の表情を横目で見つっ彼女は声を張り上げた。

「ヴォルケイア様！貴国の姫君が件の英雄に嫁いだという話は真ですか！」

一石を投じる彼女の所属国はソルディバイト地域における辺境。

他の国の代表が視線を向ける中ヴォルケイア王は答えた。

「事実じゃ。そして彼の英雄には領土を返還した」

彼女の所属国地域一帯、ジパオンを。

場は沈黙に包まれる。

彼女が若干項垂れるように着席した後、議場は大混乱に陥った。

土地の所有権が突然移譲される、嘗て無い暴挙により生じた混乱は暫くの間収まりそうに無かった。

全大陸和平会議と同様にして大陸内で大きな地位を占めているもう一つの会議。

大陸内通商物管理協定会議。現在ではその正式な呼称を使うものはそうおらず、正式な書類にも大陸ギルド会議として記録されている。ギルド会議が行われるのは中央ギルドが設置されるときだけである。そもそもここ数百年は行われていないため知っている物は極僅かである。

ギルド会議が行われるのは座標軸的に大陸の中心より若干ソルディバイト近くに位置するグレアレインという街である。

ピローナスク地域への入り口となっているこの街は古来より通商に使われることが比較的多く、ある程度は発展していた。

また、騎士団などがある大国と異なり誰も統治することが無いピローナスク地域から稀に降りてくる魔獣たちを狩るのが主な仕事となっており、その点では現在のギルド発祥の地として伝えられているのは納得が出来るところだろう。

そしてその街には現在、数十年に一度と言われる活気が溢れていた。瑞樹が依頼をした内容、中央ギルド再編への参加を申し出た冒険者達が集う。

人が集まるところに商売は成り立つ。

そこに商人がやって来て自分の店を置く。

行商人もここぞとばかりに集まる。

そもそも、イスラフィール周辺から結果的に追い出されたギルドに所属していた傭兵達は全員が確実に参加している上に他の国々からも集まっている。

建設業を営む職人達もこの状況には興奮を隠せない。

そうして日々人口が右肩上がりに伸びているグレアレインである。

グレアレインにも会議場がある。

全大陸和平会議とは全く異なり、会場は中央広場にある時計塔である。

ここに集まっているのは七人。

各方面ギルド長と瑞樹、そしてギルドの受付嬢二人。

ここに居たのはソルディバイトで働いていたメリアとア ril だった。

「さて、話を聞こうかのう」

そう言つて北東ギルド長・ローガスが促すと、瑞樹は頷いて現状を説明した。

ジパオン領の入手などについても詳細に説明をする。

因みにシャーレヴィヒを筆頭とした姫達は現在グレアレインの街中を散策中である。

瑞樹の説明の後、追い出された北西ギルド長・ローレンスが引き継ぐ。

撤退時の状況や国上層部の動きについても説明を終えると、皆一様に嘆息した。

「取り敢えず状況が余り良く掴めていないということが問題か」

「流通を失った国が長く立ち行くと云う事は無いでしょう。国家崩壊も時間の問題かと」

「しかしあの地域は穀倉地帯であり鎖国状態になれば寧ろこちらの方が不利かと」

「どうします？マスター」

普段マスターと呼ばれる立場のギルド長達がマスターと呼ぶのは形式的に瑞樹と問答する場合のみである。

「そうだな……食糧問題については間違いなくこちらの方が不利だから各国に進言しておこう。」

それが必要とあればピローナスク一帯を穀倉地帯として開墾する必要があるかもしれない」

「しかしそれを行えば天然の要衝とされてきたピローナスクが形骸化するのでは？」

「だったらギルド直轄地にすればいい。あの辺りから魔獣は出現するんだ。」

他の国もすき好んで魔獣討伐に行かせようとは思えないだろう。金もかかるし」

瑞樹の考えに筋が通っていたので特に反論する事もない他の面々。メリアとア ril は先程から給仕に徹している。

おちゃらけている一面を以前見たため瑞樹は心配していた物の、その心配は結果的にいい意味で裏切られたのだった。

ところで……、と南東ギルド長・ローヴァスが訊ねた。

「マスターはジパオン領を回収したと聞いたのですが、そちらに移られる予定で？」

瑞樹は予想していた質問だと言わんばかりに目を輝かせて答えた。

「心配しなくても、ここがもうジパオン領だから。ヴォルケイア王に頼んだからね」

抜け目が無いとはこのことである。

「ヘックシヨイツッ！」

「おいおい、風邪でもひいたか？」

「わしも年かのう」

会議の後のブレークタイムにルッキードと飲んでいたヴォルケイアはそう洩らすのだった。

大陸二大会議（後書き）

（権力的には）チートの主人公でした。

どうにも皆様の感想を見ると主人公がチートに見えないらしくて…

…。
精進いたします。

姫様達の視察（前書き）

総合PVが10万越えと言う事で恐悦至極であります。

今回のお話は短いです。史上最短。

姫様達の視察

瑞樹が会議を行っている間、シャーレヴィヒ達一行はグレアレインを散策していた。

彼女達の格好は、普段着であつた動きやすさに特化したドレスではなく町娘が着用するような軽装ともいえるものである。勿論これは大国の姫君である事を隠す事が狙いであるが、彼女達自身としては単純にドレスに飽きたのである。

無為に警戒心を周囲に抱かせないために敢えて護衛は付いていない。元々護衛を必要としない人間が何人かいるから、と言うのも理由である。

因みに、ほとんどの格好が元々シャーレヴィヒの部屋にあつたワンピースを着用しているのだがラッテールはその小柄な身体を生かして（？）何時からか急速に浸透したゴスロリと呼ばれる服装をしている。

同様に小柄、と言うより幼いと言えるルシアはセラティアの抵抗にあい、年頃の少女が着るワンピース姿である。

ゴスロリ、という服の定義は各国によってバラバラである。実はこの定義についても過去の全大陸和平会議で議論されたことがあるというのだから会議の存在意義が問われていたこともあるのだ。そもそもその会議で取り上げられた原因が、ゴスロリ服を着た少女を見た男達が異常なまでに劣情を催し、犯罪率がその後数ヶ月に渡って急進したためである。現在はゴスロリのニーズが下がっているらしく一時期のような犯罪は減少したものの、その名残として各国の法

律にはゴスロリに関する旨が記載されているのである。

そうでなくとも元々端整な顔立ちをしている面々である。通りを歩いていると不特定多数の視線を受けなければならないのは仕方がないといえるだろう。

街が街だけにほとんどの者はギルドお抱えの傭兵ばかりである。男女関係なく視線が釘付けになっている。

傭兵は職業上余り特定の国家とかかわりを持たない。それ故この地で素顔を晒す事は危険と直接は繋がりを持たない。

「次は何処へ行きましょうか」

「そうねえ……あのお店はどうかしら」

「……………賛成」

この状況においても物怖じせず純粹にショッピングを楽しんでいる様は流石国の象徴として場慣れしているだけのことはある。

専ら前向きなのはシャーレヴィヒ、ルシア、ラグネイア、ラッテレのみである。

普段女性的な格好を余りしないセラティアは着せ替え人形のように扱われ、デュゥシールは別行動、アリアは未だ沈黙を保っている。

ここぞとばかりに出店している商人達は売り込みを掛けた。特に彼女達が立ち寄った店については同日で商品が完売するという出来事が複数確認されている。

「それにしても、セラたちは帰らなくて良かったの？」
唐突にラグネアが訊ねた。

「父上が今は城に居ないと言う事だからな。それにルシアも中々帰ろうとしない」

そうついつつ服選びに目を輝かせているルシアを見やる。

そんなルシアはというと、シャーレヴィヒと舌戦を繰り広げていた。

「この服装が瑞……旦那様に好評に違いないの！」

「いいえ、幾らシャルお姉様と言えどもそれは譲れません！」

瑞樹様は間違いなくこつちの方がいいと言うに違いありません！」

彼女達が争っているのは瑞樹の服装についてであった。

瑞樹が現在着用しているのは何処かの風来坊のような服である。

野戦服とも言える格好に、外出時にボロマントを羽織ると言う格好は些か恐怖心をあおるものだった。

シャーレヴィヒが主張するのは婚礼の儀の際に瑞樹が着用していた黒スーツである。

正確に言えば、上はジャケットタイプで下はスラックスと呼ばれるような、（一般的に言う長ズボン）である。

儀式の際の格好が余りに格好良かったと言うのが選定の理由である。

対するルシアはというと、どちらかと言えば軍師のような格好である。

宰相などが着る服と酷似していて、特にマントは瑞樹が好むだろうとの判断である。

「あれは恋じゃないの？」

瑞樹への服選びに力を注ぐルシアを見つつラグネイアが訊ねる。

「……………コクン」

アリアからも同意の意志を向けられたセラティアは認めたくない一心もあり、答えに窮するのであった。認めたくない一心”も”あると同時に芽生えたもう一つの感情はセラティア自身には理解が及ばなかった。

決着は瑞樹の判断と言うことになり、とりあえず両方を購入した。多額の品物の大量購入により店主はホクホク顔であった。

余談ではあるが、シャーレヴィヒが瑞樹を旦那様と呼ぶのは婚禮の儀の後に瑞樹が頼んだからである。

「俺とシャルは他人行儀な仲じゃあないだろ」

その事を数日おきに思い出し、周りに話し、悶える姿は周囲の者にある共通の理解を齎した。

一つ、瑞樹は自覚無しの女誑しである可能性が高いということ。

もう一つは、シャーレヴィヒという一つの仮面であり表面であったものが崩壊したと言う事を。

「そう言えば、シールは何処に行ったのだ？ 始めから居なかった様だが」

セラティアが誰ともなしに訊ねると、アリアが空を指し示す。

「シールは安全のために巡回すると言った」
ラァーテールがそれを補完した。

「折角ですから一緒にいれば服を選んであげられたのですけれど」
「そうよね〜」

先頭を歩くシャーレヴィヒとラグネアが呟いた。

一体何人がデュ＝シールが計画的逃亡を図ったことに気が付いたかは不明であつたが、少なくともセラティアが歯を食いしばって空を見上げているところから、ほぼ間違いなく彼女はその行動の意図するものに気が付いていたのだらう。

ほぼ丸一日を無事に買い物で費やした一行だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8705u/>

英雄の英雄による、王女様達の為の気まぐれ。

2011年10月20日21時17分発行